

書き下ろし&読み切り文芸マガジン

★ signal

vol4. キス

「きみの花飾り」
入江棗

「王子と私とご主人様」
広野未沙

「人形姫と泥棒悪魔」
貴水玲

「くるくる」
水島朱音

「世話焼き魔ーメイド」
番柵葵

「審判部な面々」
諸星崇

企画・監修 榎本秋

株式会社榎本事務所

はじめに

書き下ろし&読みきり文芸マガジン「s i g n a l」の第四号をここにお届けする。今回のテーマには恋愛をめぐる最大のイベントの一つ、「キス」を取り上げる。

本マガジンは、私、榎本秋と関係ある若手作家・番棚葵、榎本事務所所属作家の諸星崇の両名の賛同のもと、両名の作品に加えて榎本秋が教えている四名の作家の卵たちの作品の、合計六作品を収録している。基本的に毎号テーマに沿って各人が自分の世界観、キャラクターで緩やかなつながりのもとに執筆する読み切り作品であり、各号ごとにどこから読んでもいいように、またテーマアンソロジーとしても楽しめるように留意して企画した（ただし、一部は作品としての面白さを優先してシリーズものの色の強い作品も掲載しているため、既刊とも合わせて読んでいただければ幸いである）。

さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科の全面協力を得て、毎月イラストコンペを開催していただき、その上位作品を収録するという試みもさせていただいている。

本誌をひとつの踏み切り板としてに各参加作家、イラストレーターが新たな展開を手にすることを願ってやまない。

なお、昨今の電子書籍の隆盛なども鑑み、本マガジンは、榎本事務所HPで配布しているPDFファイルを改変しないことを条件に配布、複製は自由とする。ただし、有償での配布は印刷も含めて不許可とする。それでは、楽しんでいただけると幸いである。

また、感想やご意見など、特設ページのメールフォームなどご利用の上でいただけると大変うれしい。

榎本秋

目次

はじめに.....1

扉絵3

イラスト提供 伊藤由希
 神内みさと
 仔樺
 なかきしろ。
 (掲載順)

きみの花飾り 入江棗.....7

人形姫と泥棒悪魔 貴水玲.....15

世話焼き魔ーメイド 番棚葵.....24

王子と私とご主人様 広野未沙.....32

くるくる 水島朱音.....40

審判部な面々 諸星崇.....49

解説55









きみの花飾り 入江棗

あらすじ

○あらすじ

高瀬家長女・香穂は幼馴染に恋しているが、高校の後輩から猛烈アタックを受けている。次女の双葉はクラスメイトにバイトをしていることがばれてしまい、黙っている代わりに交際を申し込まれた。

今回は二人の妹で人間不信の咲のおはなし。

○登場人物

高瀬香穂

長女。大学一年。両親が不在の高瀬家をまとめる。

高瀬双葉

次女。高校二年。和菓子屋でアルバイトをしている。

高瀬 咲

三女。中学二年。猫かぶりの生徒会長。

4、借りは利子つきで返しましょう

「高瀬会長、クリスマスにイベントしようよ」

生徒会室の会長席で参考書とにらめっこをしていると、眼前に紙切れが突き出された。誰も居ないはずだったのにいつの間に誰か入ってきたのか。

四つに折った跡があるB5の紙には“クリスマスイベントがやりたいです”とだけ書かれている。

一体誰……と思い顔を少し上げると、悪い意味でそこそこ深い仲の男だったのですぐに参考書に視線を戻した。本来なら愛想笑いの一つでも浮かべているところだけど、こいつにそんなものは必要ない。

「なによそれ」

「目安箱に入った」

目安箱は代々生徒会が管理している御意見箱のことだ。意見といってもどうでもいいようなお願いだったり自分勝手な要求ばかりが投書されていたので撤廃しようかと思ったけど、「代々のものだし、生徒の思いを聞ける貴重なものだから」と生徒会顧問に却下されている。

今見た『ご意見』も私の中ではどうでもいいようなお願いにしか映らない。しかも匿名で出すなんて馬鹿じゃないのだろうか。本気でやりたいなら一学年分くらいの署名を持ってこい。

しかし、副会長はえらくお気に召したようだった。

「生徒が主体となって～とか名目つけたらきっと予算つくよ。てか、これを今年の生徒予算にしてもいいし」

「却下」

副会長——相馬巧の言葉を遮るように強く言い放った。こっちはそんなどうでもいいことを考えている時間は一切ない。

「ちょっとは話聞かない？」

「聞かない」

「せめてこっち見ない？」

「見ない」

うっとおしくなってきた。出て行ってほしいけど、生徒会室は生徒会役員の一室なので追い出すことはできない。

「そんなに眉ひそめると皺が残るかもよ」

臨界点を超えるギリギリライン。まだ笑顔を取り繕う余力はある。

参考書を閉じて机の上に叩きつけるように置き、こっちを見ろと言っていたので視線を合わせてあげる。最大限の笑みをかました。

「日時候補・会場・詳細なイベント内容・予算・授業の振り替え対応・開催の意義・校長の許可・全生徒三分の一以上の賛成署名。言うだけなら猿にでもできるのよ。今言ったこときっちり揃えて出直してきてくれる？ 話はそれから」

脇に置いていた鞆に参考書を入れて席から立った。

「まだ居るなら鍵閉めお願いね」

相馬の返事を聞く前に生徒会室から出る。

せっかく静かに勉強してたのに。邪魔するなんてなんなの？ 嫌がらせなの？

図書室にはほかの生徒が群れているから行きたくない。集まりがない日の生徒会室は一人になれる絶好のスポットだと思っていたのに。

相馬に放課後あそこで勉強していると知られてしまった今、校内の心休まるスポットは消滅してしまった。

相馬専用（害虫）駆除剤とかどこかに売ってないかな。家で愚痴っても最近はからかわれることが多いからいっそのこと根絶やしにしてみたい。

なんて少し考え過ぎたかなと心の中で反省したけど、やっぱり反省する必要はなかった。

「日時候補・会場・詳細なイベント内容・予算・授業の振り替え対応・開催の意義・校長の許可・全生徒三分の一以上の賛成署名、の書類。これで不備はないはずだから、目を通してもらっていい？」

私の次に学年で秀才の男子は私の言ったことを一字一句漏らさず記憶し、署名込みの書類を三日で私の前に差し出してきた。嫌味なことに受験で嫌がるかと思っていた三年生が中心。内部進学が多いからって、あんたら勉強はいいのか。

さらに相馬は私以外の生徒会役員を全員味方につけていた。

NOといえる空気を完全に排除されている。

日時は終業式が終わった午後、十二月二十五日。まさにクリスマス。

本日は十二月一日。当日まで一ヶ月も時間がない。

署名した奴全員に「馬鹿じゃないの？」と言ってやりたかった。

どうせやらないといけないなら最大限利用すればいい。

その精神にのっとして私からも一つ提案を出した。

「小学生を招待する？」

現在姉妹ではまっているドラマをソファで三人並んで鑑賞中。CMの合間を縫ってイベントの話二人にしている。

「そ。近くにある公立の小学校の生徒をね。といっても全員は無理だから五年と六年だけ。地域に関心持ってまーす、と見せかけて五年生に来年うちを受験させるための餌よ。結果主義の教頭を唆して、これが成功したら生徒会長専用の個室貰うって約束取り付けてやったわ。志望校がM高だって言ったら「静かな場所で勉強しないといけないな」と目輝かせてたし」

M高は県外の超名門校。うちの学校から合格者が出ることはあまりない。しかも私は学費免除の特待生を狙っているので、めいっぱい勉強をしなくてははいけない。今日もこのドラマを見たら三時間勉強する。

「咲ってそういうところの世渡りは上手よね」

長女の香穂姉はポットで蒸した紅茶を入れながら呟く。

「けどさー、お前そんなんでも相馬以外にも本音出せるのかよ」

次女の双葉姉が香穂姉からまわってきたカップを私に渡してくれた。カップを受け取った手に力が入る。

「ちょっとずつやってるわよ。この間書類の記入ミスしやがった一年の役員に思ったことをありのまま言ったんだから。それ以降、そいつ私を怯えるような目で見てくるけどね」

正しいことだけを言ったつもりだ。私は間違っていない。

けれど、相馬以外の役員たちの接し方がぎこちなくなっただのも事実だった。それはいじめに発展することはないにしても、「こいつとはうまく付き合えない」と言っているようなもの。

本音を出すってこういうことだったのだろうか。

テレビはCMが開けてドラマの本編に戻っていたけど、香穂姉も双葉姉もまだこちらを見ていた。

「見ないの？」

そう言ってようやく二人ともテレビの方を見た。香穂姉が淹れてくれた紅茶を飲む。いつもと同じ量の砂糖を入れたのに、少し苦い気がした。

「一年三組、出し物は屋台って、文化祭じゃないんだから。二年一組と二組は合同って聞いたけど、結局何をするの？ 三年生は融資参加でバンドですね。小学生が驚かないような選曲をお願いします。坂田先輩、文化祭でヘビーメタル歌っていらしたでしょう？」

次から次へとやってくるクラスからの出し物申請書類に目を通す。生徒達にとってノリは第二の文化祭のようだ。そんなのじゃやる意義もなにもないんだから少しは考えてほしい。いくら生徒の署名があったって校長が開催を撤回したら一発で終わるのに。もっとも、小学生を招待してしまっている手前それはないけれど。

ライブをするグループがけっこう多い。体育館で行われる全員参加の催しものが盛り上がるからいいんだけど、近隣住民にうるさくなりますって挨拶に回らないと。

一緒に行くなら副会長かつ私と同じくらい愛想がいい相馬だよな、と書類を見ながら考える。途端にげんなりした。

「会長」

出し物申請書類を一通り見終わると、別作業をしていた一年の役員がおずおずと前に出てきた。この間書類の記入ミスをした奴だ。

「何？」

「全員参加のイベントで宝くじ的なものをするのはどうでしょうか」

宝くじ？ どういうことだろ。

「体育祭に入場する時、一人ひとりに番号を書いた紙を渡すんです。で、イベント中に抽選します」

確かに番号の紙が全員にきちんと回りさえすればイベント自体は簡単で手っ取り早い。けれど問題もないわけじゃない。

「景品はどうするの？ 小学校高学年にもなればちゃっちいものじゃ納得しないわよ」

中学生はいわずもがな、だ。それこそ家電の一つでも目玉にしないと食いついてくれないだろう。けれどそんなものに充てる予算はない。

一年役員は唾を一つ飲み込んで話を進めた。

「前期の先輩達の置き土産を使います」

「あ」

そういえばそんなものが。

「あれね。前期の副会長が勝手に生徒会の予算で株やって、それで儲けた二十万円」

あたしは関心を寄せたことがなかったから殆ど知らないけど、前期の生徒会は随分と天真爛漫な活動をしていたらしい。副会長が生徒会予算＝学校から出ているお金で株をしたり、会計が夏休み延長を求める署名を全生徒の八割分集めたり（あたしは興味がなかったので署名していない）、入学式の会長挨拶で新入生の保護者をナンパしたりなどなど、伝説に残りそうなことばかりをしている。といっても三年生だからすぐに顔を拝めるけど。

「前副会長にも確認したのですが、好きに使えと。なんだったらそれで花火でも上げてしまえと
のことです」

いや、二十万じゃ足りないでしょ、と脳内で冷静に突っ込みを入れた自分がいた。

「二十万あればWiiでもiPodでも何でも買えます。どうでしょうか？」

一年役員があまりに真面目な顔をしていたので、こっちもつられて神妙になってしまった。顎
に手を当てて考える。

「いいんじゃない？ ゲームばかりじゃおふざけにしか見えないから、電子辞書とかちょっと
真面目もアイテムも入れておけばいいと思う。景品の選定は任せるわ。予算と相談して案できたら
見せて」

「あ、ありがとうございます！」

一年役員は異様に喜んだ。一大決心の提案だったのだろうか。たかだかイベントの中の一つだ
と言うのに。

くじかあ。何が景品だったら嬉しいかな。食器乾燥機とかあったら嬉しいけど、一般的な小中
学生には全く必要ないな……。だったら。

「これ、生徒会主催だし役員はくじ対象外？」

「いえ、役員も入れておこうかなと。かなりの倍率になりますから役員数人が増えようが減ろう
が関係ないかと思って」

「じゃあ景品に北海道から産地直送の海鮮セット入れて。何等でもいいから」

「へ？ か、海鮮？」

「私が食べたい。絶対当ててやるわ」

この時期の海鮮は鍋にしたら絶対に美味しい。お姉たちと豪華な鍋したい。

「なんだか、意外です」

一年役員は目を少し丸くしてこちらを見ていた。

「意外？」

「会長が自分のこと話すの珍しいし、あと初めはイベント自体を反対していたからここまで乗っ
てくれてよかったというか。副会長と署名に奔走した甲斐がありました」

他の役員たちも微笑ましい目でこちらを見ていた。多分、これがテレビでよくある学園ドラマ
なら感動一步手前のいいシーンだったりするんだろう。

でもそんな風には思えなかった。

「企画通った？」

微妙な気分を抱いていると、更に気分を害する声が聞こえた。

「副会長」

一年役員が後ろを向き、たった今生徒会室に入って来た奴の役職名を声にした。他の役員も同
じ人物に注目する。

正面に相馬の顔が目に入って、私は顔を逸らした。

「会長OKしてくれました」

「良かったなあ。一人ひとりにナンバーが当てられるんだよな。これほかのイベントでも使って

いい？」

「勿論です」

一年役員の声と表情がなんだか輝いているように見えた。なんというか、私と相馬とでは態度が若干違う。

いらついできた。

「じゃあ俺らのクラスはこれ使お。高瀬さん、山崎先生が近所回りの件で話があるって。今から行ける？」

急に自分に話を振られて思わず表情を作るのを忘れてしまった。多分かなり嫌な顔をしてしまっていたんだろう。一年役員が少し不安げにしていた。

「分かった。相馬くんも同席？」

「俺も回るからね」

「そう。ちょうど手が空いたから行けるわ。景品の案、なるべく早めをお願いね」

今度は上手く顔作れた。席を立てて相馬と一緒に生徒会室を出る。

出た瞬間どっと疲れが押し寄せてきた。書類を大量に見たせいもあるだろうけど、いまだに表情を作らないといけない自分が嫌になって疲れる。

「お疲れ？」

「そんなことないわよ」

疲れているのを見破られてとっさに嘘を吐いてしまった。

「帰ったら勉強もしてるんだろ？ 目の下にクマできかけてる」

心配されるのもうっとおしかった。いくら相馬だからといって、何でこんなにイライラしているんだろ。

「イベント終わるまで勉強止めたら？ 別にガリ勉なんかする必要ないじゃん」

相馬は私が猛勉強する理由なんて知らない。だからそう言うのは全然おかしいことじゃない。おかしくないのに不機嫌のボルテージは上がっていくばかり。

「何であんたにそんなこと言われたいといけないの」

尖った口調になってしまった。空気が凍ったのが分かる。

並んで歩く相馬を横目でちらっと見ると、こちらも不機嫌そうな表情を浮かべていた。

「だってどう見たって無理してるじゃん。さっきからいつも以上に可愛げないし、なに怒ってるの？ 自分ひとりで機嫌悪くするのは勝手だけど、周りにまで悪影響及ぼすのは止めろよ」

ボルテージが限界地に達した。足が止まる。相馬もそれに気付いて一歩前で停止した。

「高瀬？」

「だったらもうあんたが仕切れれば？ あんたの方がみんなに好かれてるみたいだし、そうしてくれるとこっちも助かるわ。お遊びみたいなイベント開くのに署名集められるあんたとは違って私は忙しいの」

生徒会室の空気が気持ち悪かった。

私だけ蚊帳の外に居るようで。

今まではそれが当たり前で、平穏な証拠だったはずなのに。

香穂姉、これが変わるってことなの？

しんどい。

「全権を相馬くんに委ねるわ。もちろん近所回りとか必要なことはやるから。あとは好きにして」

固まったように動かない相馬を無視して再び歩き出した。

言いたいことを言えてスッキリしたはずだ。

なのに、気分は全く晴れなかった。

イベントまであと三日。我ながら最悪な時期に風邪を引いた。

ほとんどの仕事を相馬に押し付けて勉強していたのに、これじゃ文句を言われても仕方がない

。

しかも今日は近所回りの日だ。先々週も一度行ってはいるけど、直前に改めて挨拶しに行くという名目。会長の私が行かないわけにもいかない。

幸い風邪の症状は発熱と軽い咳。昔から熱を出しても表面には出にくいので、マスクをして『軽い風邪』と言っておけば大丈夫だろう。誰かに移さなきゃ問題ない。

放課後、四時に校門の前で集合。私、生徒会顧問の山崎先生、それから相馬。

相馬とはあれから必要以上話をしていない。私から話したくもなかったし、相馬からも何も

ない。その空気を感じ取ったのか、他の生徒会役員も私にあまり近付かなくなった。イベントの責任者は相馬に変わったようなものでもあるし。

一人の時間が増えてすごく楽になった。クラスメイト達には相変わらず愛想笑いの仮面を被ってる。

本末転倒。今の状況を香穂姉に言ったらM高受験をまた反対されるかも。

今回は双葉姉も味方にはなってくれないだろうし。

どうしよ。どうにかしないといけない。

考えないといけないのに風邪で頭がうまく回らない。

「遅いぞ高瀬。なんだ、風邪かあ？」

ホームルームが長引いて五分遅れてしまった。小走りで校門に向かうと、既に先生と相馬は集まっている。

先生はマスクを見て、やや怪訝そうな顔をした。

「遅れてすみません。風邪は大丈夫です。ちょっと咳が出るだけなので」

鼻から下がマスクで隠れているので表情を作らないで済む。これ楽かも。

相馬の方をちらりと見てみると、先生の方を向いて能面みたいな微笑を浮かべていた。

なにその顔、気持ち悪い。

わざとこちらを見ないようにしているのが見え見えで腹ただしくもなってきた。

相馬も私のことで怒ってると思うけど。

先生には分からない微妙な空気が流れる中、ご近所回りをスタートさせた。

「クリスマスだし、昼間なら少しくらい騒いでも大丈夫だよ」

「うちの子が五年生なんだけど、すごく楽しみにしているわ」

「あんた風邪引いてるの？ のど飴あるから持っていきな」

何か行事がある度にこうやって近所に挨拶をしているけど、みんないい人達だ。体育祭の時なんて特にうるさかっただろうに、「子どもが元気にしているならそれでいい」と寛大な言葉ばか

りをくれる。

その優しいやり取りがなんだか嬉しくて、マスクで隠れた唇は勝手に弧を描いていた。

M高受験を決心させたのも、実はこの近所挨拶のおかげだったりする。

今まで避けてきた他人との接触が予想外に心地いいもので、他人も悪くないなって思えて、『他人なんて信用できない』って思い込んでいる自分がただ逃げ回っているだけに思えたから。自分から歩み寄れば、人は敵意や自分の欲望みたいなもの以外のものも与えてくれるんじゃないかって。

この考えが学校でも発揮されればいいのに。

中途半端な距離感に居るせいか、まだ、怖い。

一時間ほど巡って残りはあと一軒になった。この一軒がとても大変だったりする。

好意的なご近所さん達の中で唯一、学校に嫌悪感を抱いているおじいさんだからだ。

先生もその家に向かうとなった時、苦い顔をしていた。相馬もにこやかに挨拶をしていたけど、今は真顔に戻っている。

私はというと最悪なことに歩き過ぎたせいで頭がゆでダコ状態になりつつあった。

熱が上がってる。これはだいぶまずい。

あと一軒で終わる。今日は連絡してお姉のどちらかに迎えに来てもらおう、そう算段を立ててなんとか踏ん張ろうとする。

マスクで顔の半分が隠されてて本当に良かった。息が荒くなるのをなんとか抑えるだけで済む。

五分ほど歩いたところで最後の家の前についた。この地域に戦後以来ずっと住んでいるらしい。建て替えをしているだろうけどかなり古い一軒家だ。

挨拶は基本生徒がするもの。先生はただの付き添いに等しい。ここで動かなくてはいけないのは私だ。

肩で大きく深呼吸をしてブザーを鳴らした。

三十秒ほどで引き戸からおじいさんが出てくる。私達の顔を見た瞬間、不機嫌そうな態度を示した。

「こんにちは。××中等学校生徒会長の高瀬です。突然お訪ねしてすみません。先日もお伺いさせていただきましたが、今度の二十五日にクリスマス行事を行うことになったので、直前の挨拶に伺わせていただきました」

「副会長の相馬です。当日は少し騒がしくなってしまうことを事前にお詫びさせていただこうと思ひまして。これ、お詫びの品といっはなんですが」

本日何回目か分からないお決まりの台詞を吐き出す。相馬は持っていたタオルセットをおじいさんに渡そうとした。が、

「いらんわそんなもん」

こちらを一瞥しただけで家の中へ戻ろうとした。先生が慌てふためく。どうしたらいいのか分からないのか本当におろおろするだけ。

おじいさんの態度は生徒会長就任時に行った挨拶巡りの時から変わらない。先代の会長曰く、昔から毛嫌いされているらしい。何でかは会長も知らなかった。

行事を妨害されることはないから不仲なままでも被害はない。

でも、理由も分からなくこういった態度をとられると少しカチンとくる、

「あの、うちの生徒が過去何か失礼なことでもしましたでしょうか？」

「お前には関係ない。イベントでも何でもやればいい。帰れ」

瞬時にすばっと斬られた。取り付く島なし。このじじい……！

こういった時どういう対処が適切だったか、頭が回転せず全く思い出せない。

でもこのまま引き下がるのは無性に許せない。

「本校はご近所の皆様のご協力があって日々の学生生活を有意義に送らせていただいています。ですからご近所の方が何かご不満やご意見などをお持ちでしたらできる限り改善したいと思っています。これからも学校とは長いお付き合いになるかと思いますので、よろしかったら」

「帰れと言ったのが聞こえなかったのか」

引き戸を閉められてしまった。空しく取り残される。

何もしなかった先生が「いつもこうだからしょうがない。高瀬も風邪を引いていることだし、今日は帰ろう」とフォローするように言った、おじいさんに聞こえないようにか小声で。

相馬も疲れたような溜息を一つ吐き、先生の意見に賛成の模様。持っているタオルセットをもてあそんでいた。

二人が家から離れていく。私はその場から動けない。

色んなイライラが募っていた。のけ者にされた生徒会。話をしてくれないじじい。素直にものを言えない自分。

相馬にキレた時とは違う、もっと大きい波の感情が流れ込んでくる。

鼻も口も隠れてるから息がしづらいし喋りにくい。それにすら苛ついて、マスクを剥ぎ取った。

さっき一度押したブザーを押す。数十秒待っても反応がなかったので連続で何回も押してやった。気付いた先生が慌てて止めに入る。

「高瀬、何してるんだ」

「何回も押すな！ 警察呼ばれたいのか！」

先生に腕を掴まれたのと、じじいが家の中から出てくるのはほぼ同時だった。先生の手を振り切ってじじいの顔を思い切り睨み付ける。手のマスクを力いっぱい握った。

「うちの何が気に食わないんだか知らないけど、何十年も生きてるんだったらもっと適切な対応したらどうなんですか!? 中学生のガキ相手に大人気ない！」

「何だその口の利き方は！」

じじいが玄関から出てきてこちらに大股で向かってきた。

「さっきから不誠実な対応しかしてない人に口の利き方がどうこう言われたくないわ！ 何か迷惑かけたんなら謝りたいと思っているのに、それすらさせてくれないんですか？ そんなんだから代々頑固じじいとか言われるのよ！」

背後で先生が「高瀬え……」と情けない声を出していた。知るか、ここまできたら今日決着を

つけてやる。顔がすごい熱いけど気にしない。

「お前の学校はどういう教育をしているんだ！　こんなのが生徒会長だなんて、親と担任の顔が見たいわ！」

最悪なワードを出してきた。親ですって？

「あんたにうちの何が分かるのよ!!　お父さんもお母さんも私達のことをこれでもかかってくらい考えてくれてるわよ!!　教育？　言われるだけ言われてへこへこ帰るような弱っちい奴に育てるのが教育だっていうの？　確かに私は言いたいことの九割を隠して生きてきたけど、苦痛でしかなかった。あんたは教育でそんな人間を育てろって言いたいわけ？」

ほとんど叫ぶように言葉をぶつけた。息が乱れる。頭は熱いのを通り越してグラグラしていた。完全に血が昇っている。

「隠してきたなんて嘘を！　今言いたい放題じゃないか！　お前みたいに好き勝手やる奴が居るから弱い立場の子が痛い目を見るんだ。俺の孫はそうやって淘汰された！」

淘汰？　意味が分からない。や、言葉の意味は分かってる。いらぬものを除くこと。

孫が除かれたって――。

唐突に悪寒がした。

「それ、どういう」

「俺の孫はお前の学校に通っていていじめに遭った。そして転校を余儀なくされた。お前みたいな居丈高な奴らがよってたかって汚いことをしてくれたんだ！」

握っていたマスクが手から離れた。力が入らない。

何も考えられなかった脳内がいきなりクリアになって、『あの時』の映像が流れ込んでくる。

真っ暗な倉庫。クラスメイト達の笑い声。

笑い声に混じった存在拒否の言葉。「調子乗らないでよ」「二度と学校来んな」「顔も見たくない」

聞きたくない。耳を塞ぐ。脳内再生なんだから意味がない。

今の私はあの子達と同じなの？

思ったことを言ったらどこに行っても否定されるの？

それは、私が私である意味、あるの？

押さえている手をすり抜けて、脳内ではなく鼓膜が震えた。アスファルトに何かが落下する音。

後ろから誰かに支えられる。私より少し高いくらいの背丈。

「大丈夫」

耳元の傍で低い声が響いた。

相馬。

「一つ聞きますが、そのお孫さんは今何を？」

「もう成人しとる。転校先に恵まれて立ち直ってくれた。今は立派に働いている」

「そうですか。お孫さんが今我が校をどう思っているかは分かりませんが、いつまでもうじうじと恨んでいるのは貴方だけのようですね」

肩に置かれた右腕の重さが心地よかった。変だ、家族以外に触られたら気持ち悪くなるはずな

のに。

それよりも今度は相馬とじじいが険悪な状態になっている。私が起こした喧嘩なのに。止めなきゃ。

「相馬、いいよ」

「周りが本人の意思とは関係なくごちゃごちゃ言うのは迷惑以外のなにものでもないですよ。折角立ち直ろうとしているのに掘り返すようなものです。現に貴方は今、高瀬の思い出したくない過去をほじくり返した。貴方の孫と同じく学校を変えて、過去を乗り越えようと頑張っているのに、それをぶち壊した」

相馬の左腕は私の腕を掴んでいた。その力が少しずつ強くなって行って、微かに震えていた。

ねえ、何であんたがあたしのことで怒るのよ。

「嫌な目に遭った人間は全員あなたの孫のように立ち直らないといけないんですか？ 大人へ果敢に意見するような人間に立ち直ってはいけないんですか？ 口の利き方は確かに悪かったです、謝ります。あと、いじめを起こしてしまった事実は正式に謝罪させていただきたいと思います。でもそれ以外を貴方に否定される謂れはありません」

じじいは何も言わなかった。厳しい表情をしたまま私達以外のどこかを見ている。

弾んでいた息がだいぶおさまってきた。血も下がったようだ。

威圧的だったじじいが急に小さくなったように見えた。この人だって好きで学校を嫌いになったわけじゃない。お孫さんが酷い目に遭っている。恨みの一つや二つ、抱えていて当然だ。

肩に乗っている相馬の手をはずした。相馬から離れておじいさんに近付いた。おじいさんが目を丸くして私を見る。

私もおじいさんの目を見た。

「言い過ぎました。謝ります。すみませんでした。でも間違ったことを言ったとは思っていません。言ったことは私の本心です。信じられないかもしれませんが、家族以外には殆ど隠してきた、本音です。爆発みたいな形になってしまったけど、吐き出せて、今とてもすっきりしています。それが嬉しい。

私はもう自分の考えを押し潰すようなことをもうしたくないんです。もちろん相手の考えもです。今みたいにぶつかっても、愛想笑いで逃げたくはないんです」

言っている間に涙が出そうになった。今、家族と相馬以外に心の底から思っていることを話している。

怒鳴り声を不審に思ったのか、お隣さんやご近所さんがこちらの様子を窺っていた。先生がやっぱり慌てて事情を説明しに行っている。

おじいさんはしばらく私の顔を見て、「悪かった」と呟いた。

「確かにお前さんくらい啖呵を切る奴の方が図太く生きていけそうだしな。孫も、あの時少しでも自分の思いを誰かに伝えたら変わっていたかもしれない」

そう言ったおじいさんは道路に出て、転がっていたタオルセットを拾い上げた。すぐに家の敷地内に戻る。

「行事運営、頑張りなさい」

一言言い残して家の中に入って行った。引き戸が静かに閉まる。

タオルセットを受け取ってもらえたということは、認めてもらえたということでいいんだろ
うか。

そう考えた瞬間、全身の力が抜けた。道端に座り込んでしまう。

「高瀬！」

すぐさま相馬が駆け寄って来た。

「お前大丈夫かよ、って熱っ」

不躰に頬を触られる。手が冷たくて気持ちいい。

これ、相当熱上がってるな。エキサイトし過ぎちゃったかも。意識がぼんやりしている。

そうだ、これだけは言わないと。

「相馬」

「ああ？ 今先生に車呼んでもらうからちょっと待って」

「いろいろごめんね。ありがと。けどいつも相馬に助けてもらってばっかで、むかつく」

お礼だけ言うつもりが、ばか正直に思ってることまで口にしてしまった。ここは常識的に隠し
ておくべきだろうに。

まあいいか、相馬だし。そう思ったら何でか笑えてきてしまった。

「借りはきっちり返してもらうから覚えとけ」

ものすごく不穏な台詞を吐かれて嫌な予感がしたけど、相馬も笑っていたから、どうでもよ
くなってしまった。

「六度七分。まあいいわね」

香穂姉が体温計を見ながら私のおでこに手のひらをつける。

「今回は治るのが早かったじゃん。咲はばれないと思ってギリギリまで我慢すんだから。看病するこっちの身にもなれっての」

食パンを頬張りながら双葉姉が悪態をついた。冬休みに入っているからいつもより遅い朝食中だ。

おじいさんと大喧嘩から三日が経つ。つまり、イベント当日。

あれから本格的に発熱していた私は学校から派遣された車で病院へ直行。双葉姉が迎えに来て学校には戻らず家に帰った。

香穂姉が帰ってきてからは説教の嵐。看病されながらお小言をいただくという拷問のような目に遭った。その看病のお陰で熱が引いたのだけど。

「無理はしちゃだめよ。何かあったら早退してきなさい。連絡くれたら迎えに行くから」

「香穂姉、今日必修の講義あるじゃん。双葉姉は朝からバイトだし」

「冬休みに入って時間に融通がきく後輩を派遣するわ」

井上さんを寄越すのか。お付き合いを断ってる人を使うなんて、香穂姉もなかなか凶太い人間になったな。井上さんは最近ちょくちょく野菜を持って夕飯を食べに来て、諦めることなく香穂姉に交際の申し込みをしている。

ご飯は食べ終わっていたので制服に着替え学校へ行く支度をした。玄関まで香穂姉が見送ってくれる。

「ほら、マフラーちゃんと巻きなさい」

適当に巻いていたマフラーを巻き直してくれた。

もしM高に合格したらこういうことをしてもらえなくなる。そう考えたら少し寂しくなって、同時にそれが大人になるということなんだと察した。

「香穂姉」

「ん？」

「私、ちゃんとした大人になれると思う？」

香穂姉はきょとんとした顔をして私を見た。

しかし、すぐに笑って

「ちゃんとした大人なんて実はそんなに居ない気がするけどね。他人にあまり迷惑をかけないで、自分らしく生きていけたらちゃんとした『人間』なんじゃないかしら」

求めていたような気がする言葉をくれた。

「行ってらっしゃい。帰ったらケーキ食べようね」

私が居ない三日の間に校内がクリスマス仕様になっていた。そこら中にモールやらツリーで使

うような飾りがついている。

校門をくぐったところに山崎先生が立っていた。私を見つけるなりこちらに寄って来る。そういえばブチ切れたの目の当たりにされていたんだっけ……。

「おはよう。もう大丈夫なのか？」

「はい。全然準備に参加できないですみませんでした」

「いや、お前はやってくれたよ。田口達は「高瀬があのだじいを落とした！」ってものすごい喜んでたぞ」

田口さんは前期の生徒会長。喜んだというより楽しんでいるといった方が楽しい気がするけれど。

先生とは全員参加のイベントでする会長挨拶のことで二、三打ち合わせをして別れた。

終業式の打ち合わせのため生徒会室に行くと、相馬以外の役員が揃っていた。わらわらと寄ってきて風邪は大丈夫なのかと心配してくれる。あと、ブチ切れの件について聞きづらそうにも興味津々で尋ねられた。

「ちょっと会話にならなくて、切れちゃった」

冗談っぽく笑ってみた。役員達が真顔になる。

その顔には覚えがあり、寒気がした瞬間、役員達が一斉に笑い出した。

「そら会長でも切れちゃうよー！」

「株が下落した時しか切れない前副会長がその人のところに行ったら三日誰とも口利かなかったっていうくらいだし」

「てか俺らすごくないですか？ 二代連続で生徒会の伝説拝めちゃったんですよ？」

宝くじ発案者の一年役員が目を輝かせて私を見る。

以前からこうやって生徒に囲まれることは多々あった。

成績優秀で完璧な生徒会長を羨望するような目で。

言葉にしたら多分今も大体同じ。

でも、これまでみたいな居心地の悪さはなかった。

「会長、今日のイベント頑張りましょうね」

一年役員は今まで見たことのないような笑顔を向けた。

少し泣きそうになったのを堪えて、大きく頷いた。

“六等賞品は図書カード三千円分です！”

壇上でMC役の一年役員が声を張り上げている。イベントは問題なく進行し、現在は全員参加のメインイベントの最中。

それを体育館の壁に寄り掛かって眺める。生徒会は生徒席から離れてメインイベントの進行に徹していた。

普段は居ない小学生が入り、体育館は満員。照明を落として興奮を煽っているからか、ろくな暖房もないのに熱気に包まれている。クラスの出し物も概ね好評だったようだ。

私の出番は最後の挨拶くらい。役員達が病み上がりの私を気遣って、担当するはずだったMCを代わってくれたのだ。

宝くじの海鮮セットは四等。宝くじの紙を開いてみた。

「何番？」

脇から突然顔が出てきた。相馬だった。

「びっくりさせないでよ」

「悪い悪い。で、何番？」

暗がりのせいで全然気付かなかった。

「一三九番。海鮮セットは渡さないわよ」

「何で自分が当たると思ってるんだよ。倍率何倍だと思ってるの」

そうこうしている間に五等の抽選が終わった。五等は近所の商店街商品券五千円分。地域との円満な付き合いにもぬかりはない。

「暗いけど大丈夫か？」

相馬が上を見上げながら聞いてくる。現在、体育館の照明は壇上とスポットライトひとつのみになっている。隣の人の顔がなんとか見えるくらいの暗さだ。

「平気。壇上明るいし、かなり騒がしいしね。最近は突然暗くなったり狭かったりすると駄目なの」

「授業でスライド再生する時とかどうすんの？ 真っ暗じゃん」

「それはサボる。まだきつい。いい加減治さなきゃとは思ってるけど」

今だって病み上がりなこともあるけどあまりいい体調ではない。けれどいつまでも拒絶してられない。香穂姉が言った通り、寮で停電が起きても誰も助けてくれないのだから。

それに。

「さすがにこれ以上あんたに助けられるわけにもいかないしね。ほんと、何であんたにばっか助けられるんだろ」

「それは、俺が」

“四等は北海道直送の海鮮セットです！”

相馬が何か言いかけたけどそれよりも壇上の方が気になった。お目当ての海鮮セットが出て

きた。

“この景品は会長直々のご指名で用意しました！ 会長！”

MCの掛け声を合図に当選者のインタビューをとる係の役員がこちらへ走ってきた。同時にスポットライトが当てられる。相馬はさっと脇から退いた。

“会長！ 海鮮セットを希望した理由は？”

マイクを差し出される。スポットライトが少し眩しい。

“食べることが好きで特にカニには目がないんです。なのでぜひ私にお持ち帰りさせてくださいね”

茶目っ気を加えたおかげで体育館内は笑いに包まれる。会長として少しは仕事しないと。

壇上で代表して二年の学年主任がくじを引いている。頼むから引いてよ一三九番！

“四等出ました！ 一四三番！”

一年が座っている方から歓声が上がった。四番違っちゃって、中途半端に近いから余計に悔しい。

「はずれたな」

相馬はまた隣に戻って来た。あのまま離れてれば良かったのに。

“残念ながら会長ははずしてしまいましたねー。でもまだ三つ残ってるので、それを当てて交換交渉しましょう！”

壇上のMCからの言葉に適当に手を振って応える。そうだ、どれか当てて交換してもらえばいいんだ。どう考えてもWiiとかのいいだろうし。持っているくじに念を込めた。

「高瀬」

一三九と書かれた紙切れをひたすら睨んでいると、隣から邪魔された。

「なに、今念を込めるのに忙し」

「俺もM高受験するから」

反射で首を横に振ってしまった。何でこいつが。その前に、何で私がM高を受験することを知っている。

「病院でお姉さんに聞いた」

双葉姉……!! 帰ったらしめる。

「特待生は譲るよ。本気の高瀬に勝てるとも思えないし。一般で華麗に合格してやる」

「ちょ、何であんたまでM高受けるのよ？ この高等部だって十分進学校じゃない」

「分かんねえの？」

目の前がいきなり暗くなった。壇上の光が遮られたから。肩が震える。

けれど恐怖より驚きの方が大きかった。相馬の顔が目の前にあったから。

「お前が行くからじゃん」

顔がどんどん、近く。

“——一等出ました！ 二一八番!!”

一際大きな歓声が体育館にこだました。

“当たったのは——お、五年生？ お名前教えてください！”

距離、残り約十センチで止まる。

「あ、俺次仕事あるんだった」

何事もなかったように顔が離れていった。

私はというと心臓がありえないくらいうるさくて、全身が硬直している。

「くじ、まだちゃんと持っておけよ」

相馬はそれだけ言い残して壇上に上がっていった。

「なんなのよ……」

何あれ、何あれ、何あれ！ 意味分かんない！

顔が熱い。違う、あいつのせいじゃない。体育館が暑くて熱がぶり返したせいだ。

落ち着くために深呼吸を一回。この後締め挨拶をしなければいけないんだ。私も壇上近くに行っておこうとしたけれど、予想外の台詞に足が止まった。

“メインイベントの最後は、二年四組のドッキリ企画『百人単位で王様ゲーム』です！”

MCがどこかで見たことのあるような生徒に変わっている。その近くには相馬が。

そういえば相馬のクラスはくじを使う企画にするって……！ 出し物のチェックも途中から相馬に任せたのは間違いだった。

“ルールはこの数字ボックスから引いて出た数字の人が、指名ボックスから出てきた指名を遂行するというものです。くじの番号で抽選するのでまだ持っていてくださいねー。あ、悪いことはしないので安心してください”

MCはかなりノリノリの様子。本当に悪いことはしないのか不安になってくる。

“それじゃさっそく。指令は『来年の抱負を語る』！ 番号は五八九番！”

小学生の群れの方から歓声が上がる。良かった、本当に悪ノリはないようだ。

それから三つ四つ平和的な指令（当たったのが中学生だったら少々酷いことにもなったけど）が遂行され、宝くじの時と同じくらいの盛り上がりを見せた。

“実はけっこう時間を押してるらしいのでこれで最後にします。最後の指令は――”

あ、唯一の悪ノリ指令が出ました”

生徒達からはヤジが飛ぶ。さっさと指令を言えということらしい。

一体何をさせる気だ。これだけ数が居るから当たるとは思えず、どうしても他人事のように思ってしまうけど。

“数字くじも引いたところで発表します。番号は三八六番と一三九番。指令、『ポッキーゲーム』！”

数秒前に高をくくっていた自分がぶん殴られたような境地に立たされた。

さっきまで念を送っていたくじを見る。そこには一三九と書かれていた。

指令、ポッキーゲームって。冗談じゃない。

“さあて、三八六番と一三九番は誰ですかー？”

よし、逃げよう。今なら間に合う。

締めの挨拶のことなどすっかり忘れて傍にある入口から出ようとした。

“たーかーせ”

マイクで呼ぶ声に止められた。恐る恐る振り向くと、脇に立ってアシスタントをしているだけのはずだった相馬がマイクを握っている。

“会長が逃げるってのは感心しないよなあ”

体育祭のころに見た、悪魔のような笑顔が貼りついている。マイクを持ったまま壇上を降りてこちらに向かってきた。片手にはポッキーの赤い箱。

後ずさりしようとしたけど、いつの間に背後にいた生徒に阻まれた。見覚えあるから恐らく四組の生徒。

生徒の一人がマイクを持っていたので引手繰った。あがけるとこまではあがく！

「な、何でポッキーゲーム？ 今日は一一月一日じゃないよね？」

“さあ？ この指令作ったの俺じゃないから”

最悪なことにスポットライトまで当たっている。確認はできないけど、おそらく生徒ほとんどの目がこちらに来ている。

確実に追い詰められていた。何て言ったら逃げれるのかももう分からない。

「合コンじゃないんだからこんなの無効に、大体何で私だけ捕まえられてるの!? 三八六番の奴はどうしたのよ！」

“それ俺”

目眩がした。夢なら誰か今すぐ私の顔に思いきりビンタして起こして欲しい。

軽い現実逃避の間に、相馬との距離はマイクが要らないくらいまでになっていた。

「言っただろ？ 借りは返してもらって」

相馬はマイクをクラスメイトに預けてポッキーの箱を開ける。

「謀ったの!？」

「見てただろ？ 俺はくじを引いてない」

そんなの協力上げばどうにでもなる。

「別にキスしろって言われてるわけじゃないんだからさ。ゲームだよゲーム。負けたら寸止めで終わるから大丈夫だって。負けていいならね？」

挑発されているとはすぐに分かった。別にゲームくらい負けてもいい。

けど、相馬の態度と嫌味な笑顔に無性に腹が立った。

マイクをしっかりと握る。息を一つ大きく吸った。

“こんなセコい小細工使わないで、キスしたいんなら真正面からしてきなさいよ！ このヘタレ！”

音割れなど気にしないで叫ぶ。ざわついていた館内が一瞬にして静まり返った。

私を押さえていた相馬のクラスメイトも呆気にとられている。

時間が止まったようだった。相馬以外。

相馬は一瞬固まって、無言でポッキーの子袋を開けて一本取り出す。

「言ったな？」

そして、一本口に咥えてものすごい速さで食べ始めた。

ものの数秒でポッキーは相馬の口の中へ。喉の動きで胃の中へ入っていくのも分かった。

次の瞬間、相馬の腕が唖然としていた私の後頭部に伸びてきて――。

“――ゲームは俺の反則負けということで。最後の最後でお騒がせしました。あ、高瀬。これで借りは返したってことでいいから”

指一本動かさない私を抱きかかえたまま、相馬は清々しそうにマイクで話した。

相馬の腕の中に納まっている私の脳内は処理能力キャパオーバー中。

軽く触れてきた唇が離れる刹那、私にしか聞こえないような小声で言われた言葉が耳から離れない。

ずるい。あんなこと言うなんてずるい。

好きだから助けるんだよ、なんて。

イベント終了後、私と二年四組の生徒は校長からこっぴどく叱られ、来年も実施される予定だったイベントは今年限りで終了、約束だった私の個室もなしになった。

あんな形で生徒全員に本性を見せてしまったし、悪いことだらけだ。

更に最悪なことに、生徒達の間では『小学生が居るにも関わらず熱愛っぷりを見せつけた生徒会長と副会長』という伝説が作られたらしい。これで私は二つの伝説持ちに。

伝説なんてものになってしまったことについて、副会長はこう語る。

「いんじゃない？ 告白イベントの発祥になったじゃん俺達」

ぶん殴ってやろうかと思ったけど止めておいた。正確には見つめられたら殴れなかった。

あれからまともに顔が見れない。でもそんなこと、悔しいから絶対に言ってやらない。

人形姫と泥棒悪魔 貴水玲

あらすじ

○あらすじ

「感情」を知らないダイヤの心臓を持つクラリッサ姫。『人形姫』と呼ばれる彼女は森の塔で孤独に暮らしていたが、ある日人の大切な物を盗んで空腹を満たす悪魔・ゼルと出会い外の世界に興味を持つ。お人好しのゼルを巻き込み、クラリッサはさまざまな「心」に出会う旅に出る。

○登場人物

クラリッサ

『人形姫』と呼ばれる喜怒哀楽が極端に少ない姫君。ダイヤの心臓と古い物に宿る思いが見えるサファイアの瞳を持つ。

ゼルナーガ（ゼル）

人間から大切なものを「盗む」ことで空腹を満たす悪魔。クラリッサの心臓を狙っている。

第四話 永遠の音色

ユヴェール王国最南端に広がるシトロンの森。緑の盛りの樹海の中に、その塔はひっそりと建っている。

それは王国の秘密の場所。誰にも知られてはいけない宝物の在り処。ダイヤを心臓に、二つのサファイアを瞳に持つ“人形姫”クラリッサが暮らす石の塔である――。

今日も書物に埋め尽くされた書庫で、クラリッサは遠く離れた都にいる王様からの長い長い手紙を読んでいた。

床から天井までぎっしりと本が並ぶ書架にぐるりと囲まれた部屋は、明るい陽射しと濃密な知識の匂いで満たされている。高々と聳えたつ本のタワーの間にある猫足テーブルにクラリッサはちょこんと座っていた。ふんわりとスカートが広がるエプロンドレスに包まれたその姿は、丹精こめて作られた人形のように愛らしい。だがその小さな整った顔には表情と呼べるものが浮かんでいない。

クラリッサのダイヤの心臓には感情というものが欠けている。

生まれてすぐに死んでしまったクラリッサを甦らせるため、魔女であったお妃様は自分の命を国宝のダイヤに吹き込んで娘に与えた。そのおかげでクラリッサは息を吹き返したが、お妃様は亡くなる前に“心”を王様に渡してしまったので、クラリッサは人が当たり前に持っているさまざまな気持ちを知らない。そのため世話役の侍女やコックには恐れられ、つねに一人で一日を過ごしている。

テーブルの上には百枚はあろうかという紙の束が載っている。それをクラリッサは無心に一枚、一枚とめくっていた。

『美しい森のほとりで私は運命的な出会いをした。きっとこの人を愛するようになると直感的に思った。だから私はすぐに彼女のもとへ行き――』

そこでクラリッサは手を止めた。そして小鳥のように首を傾げ、呟いた。

「愛……それはどういう気持ちなのだ？」

その時クラリッサの目の前にバサバサっと二冊の書物が落ちてきた。

一冊は小さな詩集、そしてもう一冊は豪華な装丁の騎士道物語。クラリッサのサファイアの瞳が瞬きと同時にきらりと光った。すると床の上で開かれた二冊の本の上に、言い争いをする若い男女の姿が浮かび上がった。

『ああっ、もうしつこいですわ！ つきまとわないでくださいませ！』

甲高い声を上げたのは、詩集の上に現れたきらびやかな貴婦人。コサージュつきの小さな帽子が載った頭はこれでもかというほど高く高く結い上げられている。

『フフ、わかっているよレイディ。君は照れているだけなんだね。私の大胆な愛を前に戸惑っているだけなのだろう？ 今まで拒み続けてきたのもそんなに違いない！』

一方騎士道物語から現れたのは、がっしりとした体躯の美丈夫。金色の髪を掻き上げ、白い歯をきらりとのぞかせる。貴婦人がばっちり化粧が施された顔を怒りの形相に変えた。

『ふざけないでくださいまし。何度も迷惑だと言っているでしょう！　いくら愛していると言われてもお断りします。あたくしは貴方のことは何とも思っていないから！』

『ははは、相変わらずきついなあ。レディ・ヒルデガルド。でもそれは今の気持ちだろう？　心というものは変わりゆくものさ。未来のことは誰にもわからない……だから私はあきらめはしない！　どんなに無残に踏みつけられようとも、この愛をあなたに捧げ続ける！』

『あああ、本当にうっとうしいですわ！　いらないと言っているでしょう、きーっ！！』

目の前で繰り広げられる痴話喧嘩をクラリッサは一人静かに眺めていた。

彼らは古き書物に宿る“古き知識”たち。

クラリッサのサファイアの瞳には、何百年と時を越えた物に宿った“心”を見る力がある。この図書室にはそういった“心”を持つ本たちがいて、気まぐれに姿を現す。

それは魔女であったお妃様から授かった不思議な力。この力とダイヤの心臓を持つせいで、クラリッサは赤ん坊の時から悪い魔法使いや魔物に狙われた。そこで王様は都から遠く離れたこの森に塔を建て娘を隠したのだ。

クラリッサはこの塔から出ることが出来ない。だからこの不思議な同居人たちは唯一の話し相手であり、さまざまな知識を与えてくれる家庭教師でもある。

「おはよう、ジルドレイ殿。ヒルデガルド夫人。今日も朝から元気だな」

噛み合わない応酬を続ける書物の住人の間で、クラリッサは挨拶の言葉を口にした。向かい合っていた二人は、その声に同時に振り返った。

『まあまあ、姫様！　おはようございます。本日もご機嫌麗しゅう』

ヒルデガルドと呼ばれた詩集の貴婦人が慌ててドレスの裾をつまんでお辞儀をした。

『これは失礼した、クラリッサ姫。つい愛の語らいに夢中になってしまいました』

その横で、自称・騎士の美青年ジルドレイがさらりと髪を掻き上げ優雅な一礼を繰り出す。ヒルデガルドが再びきつと眦をつり上げた。

『誤解を生むようなことを言わないでくださいまし！　姫様、気になさらないでくださいな。この方、少しおかしいのですわ。ジルドレイ様、何度も言いますけれど、あたくしは貴方のような騒々しく軽薄な殿方にはこれっぽっちも興味はございませんの。わかったらさっさと本の中にお戻りあそばせ！　あたくしは姫様と詩の朗読会をいたしますのよ』

ヒルデガルドがレースのハンカチーフを振ってジルドレイを追いたてる。クラリッサは二人を交互に見つめた。

「……二人は何を言い合っているのだ？」

『言い合いではありません。これは“求愛”なのですよ、姫君』

ハンカチ攻撃をひょいひょいと避けながらジルドレイが答えた。

『一目見た時から私は彼女に心を奪われ、それからずっと思い続けてきました。そしてこの熱い思いを伝え続けてきた……。しかしどういいうけか彼女は受け入れてくれず——私は一度絶望の淵に沈みました。ああ、なぜだこんなに愛しているのに——！　でも私は再び不死鳥のごとく甦ったのです。どんなに打ちのめされても一度この胸に宿った愛の炎は消えない——ならば燃え尽きるまで私は——うわっぷ！』

ハンカチーフが顔に張り付きジルドレイがもがく。両手を腰に当て、ヒルデガルドがフンと鼻息を荒くした。

『しばらくそうしていなさいな。申し訳ないけれど、あたくしはもっと洗練された慎ましい“愛”が好みなんです。美しい物語や詩の中に描かれているような……。貴方の“愛”は暑苦しくて息が詰まりそうですわ』

大きく息を一つついて、ヒルデガルドはぴんと背筋を伸ばしクラリッサに向き直った。

『申し訳ありません、姫様。お騒がせして……。あら、それはなんですか？』

テーブルの上の紙束を「ああ」とクラリッサは見下ろした。

「お父様からの手紙だ。お母様のことを聞かせてほしいと手紙に書いたら……。この超大作が送られてきたのだ。どうやら思い出すうちに、物語が出来上がってしまったらしい」

『まあ、素敵！ 王様とお妃様の愛の物語ですね。いったいどんな内容なんですか？』

「うむ。なかなか壮大な作りになっている。お父様は若い頃、何度も城を抜け出して冒険をしたらしい。そしてその途中でお母様と出会ったようなのだ。でも——」

手元にあるその出会いが始まる一ページ目に、クラリッサは視線を落とした。

「“愛”というのは何なのか、ふと思ってな。まだ続きが読めていない」

先を読もうとするのに、引き戻されてしまう。まるで魔法にでもかかったように、その言葉に引き寄せられる。

「……。この言葉の意味を理解できないと、先が読めない気がする」

そんな気がする。未知の世界からの誘いは突然やってきてクラリッサを駆り立てる。

『ぜひそうして欲しいですわ。だって人というものは愛の中から生まれるのですもの』

「……“愛”の中から？」

『そう。そして生まれた者はまた愛を知り、次の者へと繋いでいくのですわ。愛と言うのは特別な感情——この世の中でもっとも美しく、尊く、大切なもの。人も世界もそれなしではきっと存続できない。なくてはならないものですわ』

「では……。もし失ったらどうなるのだ？」

『きっと世界は暗闇に包まれてしまいますわ。愛のない人生はからっぽのお菓子の箱のようなもの。喜びも幸福も味わえないなんて虚しくて、心が死んでしまいます』

「うむ……。確かにお菓子のない人生はつまらないかもしれないな」

細い両腕を組み、クラリッサはいつになく熱心に頷いた。「でも、そんなに良いものならば、どうしてヒルデガルド夫人はジルドレイ殿を拒むのだ？」

彼はヒルデガルドを愛していると言った。そしてヒルデガルドは“愛”はなくてはならないものだという。それなのに拒否するのは矛盾しているのではないか。

『それは……。愛とは自分が相手を思い、相手が自分を思って初めて成立するものだからですわ。気持ちが通じ合わなければ意味がない——誰でもいいというわけではないのです。人の心がさまざまであるように愛の形も色々で、自分にぴったりと合うひとかけらを見つけるのはとても難しい。そうかと思ったら泡のように消えてしまったり、ちょっとした誤解で失ってしまったり... 愛とは気まぐれで時に残酷、そして儂いもの。でもそのひとかけらに出会えば、この上ない幸福がその先に待っていることでしょう』

「……なんだか複雑だな。でも、そのようなものをどうやって見つけるのだ？」

『ふふ、そうですわね。見つけるというより……気付くものだと思いますわ』

「気付く？」

クラリッサは首を傾げた。ええと頷き、ヒルデガルドがうっとり目を閉じる。

『思いがけない瞬間に、ふとわかるものですわ。うまく説明は出来ませんが……その人が何よりも大切だと思ったら、それが愛なのですわ』

「ふむ、よくわからないが……それは私にも学べることだろうか？」

『もちろんですわ！』ヒルデガルドが力強く首肯した。

『姫様にもそういう時がきつとくるはずです。王様とお妃様のように、運命の出会いが。お二人は愛し合い、そして姫様がお生まれになったのですわ。だから姫様もその愛を繋いでいかなければ。王国の発展と平和のためにも。それが姫様の使命でございます』

「使命……そうか、国の未来にも関わるのか。それは——重大任務だな」

クラリッサはほんのかすかにだが表情を固くした。ではぜひ理解しなければならぬ。それは一国の王女として果たすべき責任だ。それならばやるべきことは一つ——

「よし、探しにいこう」

クラリッサは椅子から立ち上がった。それを見てヒルデガルドが「えっ」と声を上げた。

「探しにいくっておっしゃいました？ いったいどちらへ——ま、まさか姫様、またよからぬことをお考えでは！？」

おろおろするヒルデガルドを横目に、クラリッサは唇の端に小さな笑みをしのばせた。

その後ろでジルドレイは、今だ白いハンカチーフと格闘していた……。

そして、その夜。

夜空に散りばめられた銀色の星々が内緒話に花を咲かせている真夜中すぎ。塔の最上階の窓の外で、うろうろしている影があった。

「入るべきか、やめるべきか……」

ぶつぶつ呟きながら窓縁を右往左往しているのは、コウモリのような翼と長い尻尾を持つ黒づくめの少年——泥棒悪魔・ゼル。半刻前からここでずっと悩み続けている。

「どうせまたクラリッサのヤロウはオレ様をハメる算段をしてやがるに違いねえ……だったらここで帰るべきか……」

ゼルが窓の向こうにあるクラリッサの部屋へ忍び込もうとしているのはこれが初めてではない。今までに何度も忍び込み、クラリッサのダイヤの心臓を盗もうとした。

ゼルは人間の大切なものを盗んで食べることで空腹を満たす。クラリッサのダイヤは今までにない最高ランクのごちそうだ。だがその最高食材の持ち主は小さな少女であるにも関わらずなかなか賢く、毎回ゼルは巧妙にだまされ下僕として扱われている。

「うううう、悩む～……でもここで逃げたら仲間にまたバカにされる……腹もいっぱいにならねえ……そうだ、怖気づいてる場合じゃねえ。オレ様はあいつの心臓を食って、最強悪魔になるんだ。そうだ、そうだ。迷うことなんかねえ……！　そうと決まれば行くぞっ」

バーンと勢いよく窓を押し開け、ゼルは声を張り上げた。

「はーっはっはっ！　今宵も大怪盗ゼル様の登場だっ！　覚悟しやがれクラリッサ！」

尖った爪が生えそろった両手を振り上げ、威嚇のポーズをとる。たいていの人間はこれで悲鳴を上げるものだ。だが予想した反応は部屋の主からは返ってこなかった。

「ああ、ゼル来たか。ちょうどよかった、そなたの好きなお菓子があるぞ」

寝台の上でお菓子パーティを開いていたクラリッサが顔色一つ変えずに振り返った。薔薇色の頬はぷっくりと膨らんでもごもごと動いている。差し出した手にはゼルの好物のジャムサンドがひとつ載っている。

「……何してるんだ、お前は」

せっかくのやる気を一瞬で失って、ゼルはガクリと肩を落とした。

「ん、出かける前に腹ごしらえをと思ってな」

寝台の上に立ち上がり、クラリッサはエプロンドレスについたクッキーのかけらを払った。はあ？とゼルが顔をしかめる。

「出かける？　……お前、また旅に出るつもりか？」

「ああ、そのつもりだ。“愛”とは何かを知るために」

ぴよんと飛び降り、クラリッサは寝台の下から白いトランクを引っ張り出した。見慣れた旅道具の登場にゼルの全身に戦慄が走った。

「オ、オオオオオレ様は行かないからなっ！　ああ、そうとも今日こそは行かないぞ！　てめえのくだらないナゾナゾにも答えないし、下僕にもならない！　ていうかその前に今夜こそオレ様はお前の体を引き裂いてダイヤの心臓を——」

「そうか、行かないのか。ならば別にいいぞ」

「……え？」

意外な返答にゼルは耳を疑った。

「私はそなたと行きたいのだが。でも無理強いは出来なしな。一人で行くことにしよう」

よいしょ、とトランクを持ち上げ、クラリッサはよろよろしながら窓辺へ運んで行く。予想外の展開にゼルは思わず動揺した。

「ほ、本当にいいのか……？ オレ様は行かないって言ったんだぞ？」

「ああ、別にかまわない。私ももう十四だ、供がなくとも旅くらい出来る。そなたはお菓子でも食べてくつろいで帰るといい。いつも面倒をかけているからな。ささやかなお礼だ」

「お、おう。そうか？ 悪いな。でも本当にいいのか？ 後悔しないか？」

「後悔？ そうだなするかもしれないな。そなたがいないと楽しくないからな」

「そうだろ、そうだろ。やっぱオレ様って必要不可欠な存在だよなっ」

「ああ、その通りだ。本当にそう思う。では一緒に行ってくれるか？ 下僕として」

「おう、いいぜ！ お安いご用だ。はははっ、やっぱりオレ様がいねえと……ってえ？」

そこでゼルは話の流れがどうもおかしいことに気がついた。——だが、すでに後の祭り。

「——そうか。では契約成立だな。いくぞ、下僕ゼル」

クラリッサの深みのある青い瞳が星のように煌めいた。それを見た瞬間、ゼルは自分が大きな過ちをおかしたことを悟った。

「あ、あ、あ———っ！！」

胸元から取り出した銀の笛を、クラリッサはピーっと吹いた。

満点の星空の彼方から、ミルキーウェイを描きながら一頭の馬が駆け降りてくる。わなわなと体を震わせ、顔を真っ赤にしてゼルは叫んだ。

「クラリッサ！ てめえ、ハメやがったな———っ！」

夜の静寂の中を風駆馬(ヒューマ)は軽やかに駆け抜けた。

求めるものがある遥か先へ——。やがてシトロンの森が遠く見えなくなった頃、朝がやってきた。大地が途切れ、目の前に現れたのは広大な——大海原だった。水平線から朝陽が昇り始める。風駆馬はゆっくり、ゆっくりと高度を下げていった……。

海沿いの防波堤にクラリッサとゼルは降り立った。

明るくなっていく空をカモメたちが飛んでいる。温かい潮風がクラリッサを通り抜けた。

「……不思議な匂いだな」

森で暮らしてきたクラリッサにとって、それは少し刺激的な香りだった。そして目の前の景色も今まで見たことのないものだった。

「これが海というものか。本で読んだことはあるが、本当に大きいな」

果てしない蒼い海原。まるで空が二つあるよう。シトロンの森よりも広大な場所にクラリッサは訪れたことがなかった。さらにこの水の下にはもう一つの世界があるという。

「うう……気持ちわりい。このじめじめとした空気、最悪だぜ……」

トランクに寄りかかってゼルはぐったりと座り込んでいた。どうやら潮の匂いが苦手らしい。お尻の尻尾やツンツン尖っていた黒髪は湿気のせいでしなっとしてしまっている。

「大丈夫か？ 吐くなら袋を渡すぞ。しかしそなたは悪魔のくせに苦手なものが多いな」

「言っただろうが、オレ様は繊細なんだよ……ていうかそもそもお前のせい……うっぷ」

両手で口を押さえ、ゼルが地面に倒れた。そのままカメのように這いつくばって防波堤の端へ移動し、そこで力尽きた。

「おい、ゼル。死んだのか？」

そばにしゃがみ込み、クラリッサはゼルの頭をステッキの先で小突いた。その時ふと小さな音のようなものが聞こえてきた。

『……♪……♪』

防波堤に押し寄せる波音の合間からその音は聞こえた。かき消されそうなほど、儚くかすかな——音楽のようなもの。弾ける青い波の向こうで何かが光った気がした。ゼルを小突くのをやめて、クラリッサは海の方に身を乗り出した。吸い寄せられるように水面に顔を近づけようとした時、

「だめよ、海に魅入られては。人魚にさらわれてしまうわよ」

その声にクラリッサははっと身を引っ込めた。振り返ると若い女性が後ろに立っていた。

「この海には人魚が住んでいるの。彼女たちは美しく不思議な歌声を持っていてね。時々人間をさらっていくの。今まで何人もその歌声に惑わされて消えてしまったわ……」

遠い目で女性は海を見つめた。亜麻色の髪が風になびく。顔にかかる髪を払って、女性はどこか寂しげに笑った。

「こんにちは、かわいいお嬢さん。見かけない顔ね、よそから来たのかしら。——ねえ、そっちの男の子は大丈夫？ ぴくりとも動かないけど」

女性の指摘に、クラリッサは思い出したようにうつ伏せに倒れているゼルを見た。

「どうやら潮風に酔ったらしい。少し休めば直ると思うが、つい先ほどこの場所についたばかりでどこへ行けばいいのかわからないのだ」

「あら、そうなの。じゃあうちにいらっしゃい。この港町に住んでいるの」

後ろに広がる大きな街並みを指さし、女性がにこやかに言った。

「私はセリーナよ。ようこそ、港町パーセルへ」

パーセルはユヴェール王国の南東にある大きな港町だ。

漁業が盛んで、毎朝広場では大きな市が立つ。飛び交う売り子の声と方々から集まって来る買い物客で街は朝からとても賑やかだった。

路地の一角にあるセリーナの家。海の見える窓辺のテーブルで、クラリッサはレモネードをがちそうになっていた。

「私はクラリッサ。探しものをして旅をしている。……あれは私の下僕のゼルだ」

ソファの上でぐったりと寝ているゼルをクラリッサは振り返った。夢でも見ているのかうんうんと苦しげに唸っている。

セリーナの好意で二人はしばらく彼女の家で休ませてもらうことになった。彼女はここに一人で暮らしているという。クラリッサのグラスにおかわりのレモネードを注ぎながら彼女はくすくすと笑った。

「下僕って……お友達でしょう？ そんな風に呼んだらだめよ」

「……おともだち？」

「ええ。だって一緒に旅をするなんて仲がいいからでしょう。それならお友達だわ」

トモダチ。聞きなれないその言葉をクラリッサは胸の中で繰り返した。それは下僕とはどう違うのだろうか？ 頭の中に凝縮されている何千という書物の知識をクラリッサは引っ張り出す。だが適当な答えは見付からなかった。

「あ、それとも恋人なのかしら？」悪戯っぽくセリーナが訊いてくる。

「コイビト？ うむ……よくわからないな」

クラリッサは首をひねった。そう言われるとゼルは自分にとって何なのだろう。今まで『下僕』とばかり思っていたが違うと言われると、わからない。解明すべく考えていると、セリーナはなんだか楽しそうに目を輝かせた。

「そう、まだ気持ちがわからないのね……。でも恋の始まりってそういうものよ。少しずつわかってくるわきっと。……私もエルネストに会った時はそうだった」

「エルネスト？」

「私の恋人よ。……今はもういないけど」

「いない？ それはどういうことだ？」

ふっとセリーナが目線を伏せた。

「二年ほど前にね……いなくなってしまったの。人魚にさらわれたのよ」

窓の方へセリーナが顔を向けた。陽射しに照らされてきらきらと波がきらめいている。

「それまではここで一緒に暮らしていたのよ。彼は細工職人でね。ほら、あの棚にあるオルゴール、あれは彼が修復したの。見事な装飾でしょう？ とても腕がよかったの。私たち結婚する予定だったの。でも落し物を探しにいったそれっきり。だから時々つい足が海に向いてしまふの……もう戻ってこないとわかってるのに」

穏やかな景色を映す瞳がみるみるうちに潤んでいく。

「愛していたから……失ったことが今だに受け止めきれないの」

——それなしでは存続できない。なくてはならないものですわ。

クラリッサはヒルデガルドの言葉を思い出し、はっとした。

「それはよくないことだな。取り戻すべきなのでは？」

「取り戻す？ そんなの無理だわ。人魚に連れ去られた者は決して帰ってこない……」

「だが“愛”をなくしたら人は生きていけないのだろう？ 空っぽのお菓子箱のように心が虚しくなってしまうのだろう？」

「そうね……確かに辛かったわ。でも少しずつ時間が癒してくれたから今は平気よ。皆に心配かけ続けるわけにもいかないし……それに」

セリーナが続けようとした時、時軽快なノックの音とともに、部屋の扉が開いた。

「セリーナ、レモンを持って来たよ。レモネードにするって……あ、お客さんかい？」

入って来たのは金髪の若い青年だった。腕に抱える紙袋にはレモンが山ほど入っている。

「まあ、ジョエル。ありがとう」

ぱっと立ち上がりセリーナはジョエルと呼んだ青年のもとに駆け寄った。仲がよさそうに二人は話し始める。新しくつがれた冷たいレモネードをクラリッサはコクリと飲んだ。その時、棚にあるオルゴールがポロン、と鳴った。

『……て。見つけて……』

空耳かと思いクラリッサはあたりを見回した。玄関先で話す二人はおしゃべりを続けている。だが声はまた聞こえた。

『見つけて……海の中。もう一つの私……おねがい……』

オルゴールから白い霧のようなものが浮かび上がり女性の形になった。その手はずっと窓の方を指差し、そして消えた。ちょうどその時ゼルが目を覚ました。

「ふああーよく寝た。……てか、何だあさっきの……海がどうのって……夢か？」

どうやらゼルには聞こえていたらしい。大きく伸びをするゼルのそばへ行き、クラリッサはレモネードの入ったコップを差し出した。

「気分が悪い時はすっぱいものもいいと聞いたことがある。飲むがいい」

「おー、悪いな。……なんかやさしいなお前。なにかたくらんでやが、ぶっ！！」

「飲んだか？ じゃあさっさと行くぞ」

「げほっ！ げほごほっ！ い、いくってどこに！？」

無理やり口の中に流し込まれて激しくゼルはむせかえった。再びツンとたった髪をつまんでクラリッサはよし、と頷いた。

「どこってももちろん、海の中へだ」

休憩のお礼を言った後、クラリッサとゼルはセリーナの家を出て防波堤へとやってきた。

「ここから聞こえたんだ。さっきのオルゴールと同じような音が」

先端部にしゃがみこんで、クラリッサは紺碧の海を覗き込んだ。その後ろでゼルは砂を噛みつぶしたような顔をしていた。

「おい、本気じゃねーんだろ？ 海の中なんて……」

「冗談ではない。あのオルゴールが言ったのだ、海の中見つけて、と。何かがあるのだ。セリーナの恋人かもしれない。あれは彼が作ったものらしいからな」

「は？　なんで他人のために海に入んだよ。いくら感情が知りたいから——っておい！！」

反動をつけて海に飛び込もうとしたクラリッサの首根っこをゼルが掴んだ。

「ばっか、あぶねえだろ！」

「はなせ。私は愛を学ばねばならない。使命なのだ。それにそなたもセリーナには世話になっただろう。ならば恩を返すべきだ。そうだ、先に行け」

「はっ？　冗談じゃねえ！　オレ泳げねえし！　息とかどうすん……どわあああっ！」

ばしゃーんと派手な音をたてて海に落ち、ゼルは必死にもがいた。だが抵抗むなしくぶくぶくと泡をたてて沈んでいく。それを見届けてクラリッサはステッキを折りたたんでエプロンドレスのポケットにしまい、鼻をつまんで海へと飛び込んだ……。

光の差し込む明るい海中をクラリッサとゼルはゆっくりと沈んでいった。

クラリッサの魔力で作りだした大きなしゃぼん玉に二人は包まれていた。目の前をいくつもの魚の群れが通り過ぎて行く。幻想的な風景にクラリッサは目を奪われていた。

海底に向かうにつれて周りはじょじょに暗くなっていく。だがやがて暗がりの中に小さな光が見えてきた。

ぽっかりと浮かぶ大きな球体。その中には小さな赤い屋根の家がある。芝生の敷かれた庭もあって、色とりどりの花が咲き乱れている。

クラリッサたちはゆっくりとその中に降りて行った。すると花壇の中から一人の青年が驚いた様子で立ち上がった。

「あなたたちは……人間？」

海水を飲んでぐったりしたゼルをそのままに、クラリッサは青年に近付いた。

「ああ、そうだ。私はクラリッサ。突然お邪魔して申し訳ない。ここはあなたの家か？」

「ええ、僕と恋人の。驚いたな。人魚ならともかく、僕と同じ人間がここへ来るなんて」

「……人魚？」

そう訊き返した時、家の戸が開いて少女が顔を出した。

「エルネスト、どうしたの？」

青い髪に青い瞳、透けるような白い肌。一目で人間ではないとクラリッサは気付いた。

「シレーヌ！ 来てくれ、はじめての人間のお客さんだよ。上から降りてきたんだ」

青年が少女に手招きをした。「……人間？」と呟き少女ははっと顔を強張らせた。

「エルネスト、離れて！」

鋭く叫んで走って来ると、少女は青年を押しつけてクラリッサの前に立った。

「え？ どうしたんだい、シレーヌ」

エルネストが動揺の色を浮かべる。クラリッサを睨んだまま少女は言った。

「少し向こうへ行っててエルネスト。お願い」

有無を言わさぬ強い口調にエルネストと呼ばれた青年は少し戸惑った様子だったが、「わかった」と言って家の中へ入って行った。

「……エルネスト、聞き覚えがある名前だ。彼はセリーナの恋人か？」

ではもしかして——クラリッサは少女を見た。「君が彼をさらった人魚なのか？」

だが足がある。少女のスカートからのぞくのはクラリッサと同じ人間の足だった。

「だったらなんだっていうの」海の色をした瞳を少女・シレーヌがきつとつりあげた。

「あんた誰？ いったい何しにきたの？ ただの人間じゃないわね」

「私はクラリッサだ。シトロンの森から来た。不思議な音が聞こえて……海に飛び込んだらここへ辿り着いた」

「そう。じゃあさっさと出て行って。ここは人間の来るところじゃないわ」

「わかった、じゃあ彼を連れて帰ろう。セリーナが待っているんだ」

「連れて帰る？ セリーナなんて知らないわ！ 彼は私の恋人よ！ ここでずっと一緒に暮らし

てるの」

両手を広げてシレーヌはクラリッサをその先に通さないようにしている。そこへふいにゼルの声がした。

「……んなわけねーだろ。人間がこんなところで長く暮らせるかよ」ペっぺっと口に残った海水を吐きむくりと起き上がると、ゼルはぶるるっと首を振った。

「人魚は人間をさらってその生気を食う。大方海に落ちたところを拾ってきたんだろーよ」

「あんた」シレーヌがぎくりと身をすくめた。

「いやな気配がする。あんた魔物ね？ でも……なんだか違う匂いもする」

シレーヌは調べるようにゼルをくまなく見回し、

「あんた……普通の魔物じゃないわね。“まざりもの”だわ」

——まざりもの？

クラリッサは二人を交互に見た。口を尖らせフンとゼルが鼻を鳴らした。

「うるせえ。……そんなのてめえも一緒だろ。それよりあの男、返しやがれ」

「何言ってるの？ どうしてそんなことしなきゃならないの」

「人のモン横取りしてきたんだろ。オレ様だったらそんな姑息なマネしねーぞ。ていうか人間と妖魔なんてうまくいくわけねえ。なんでこだわるんだ？」

「愛しているからよ。海に落ちて記憶をなくした彼を私が見つけたの！ 渡さないわ！」

「でも、誘拐はよくない。エルネストとセリーナはお互い思い合っていたのだ。“愛”とは互いの気持ちが一貫していないと成り立たないのだから？ だったら戻るべきだ」

「そんなの知らない。でも今は私と思い合ってるの。私の恋人なのよ！」

「……ううむ？ それではどうしたらいいのだ？」

クラリッサは腕を組んで少し——悩んだ。セリーナが恋人を取り戻せば“愛”というものを理解出来る——そうクラリッサは考えていた。でもシレーヌも彼と愛し合っているというなら話はややこしくなる。

「なんで悩んでんだ？ もといた場所に連れて帰ればいいだろ。こいつは悪党だ」

呆れた様子でゼルが家の方へ歩き出した。すかさずシレーヌが前に飛び出す。

「やめて！ 彼はそんなこと望まない。記憶もないもの。今は私との生活がすべてなのよ」

「記憶う？ は、どっかに隠したんだろ。そうやって妖魔は人を操る。匂いでわかるぜ」

ぺろりと舌舐めずりした次の瞬間、目にもとまらぬ速さでシレーヌの横を通り抜けゼルは家中へ飛び込んだ。そして棚の上のあるものを掴んで戻って来た。

「クラリッサ！」

ゼルが放り投げてきたのは、美しい装飾のオルゴール。クラリッサの二つのサファイアがきらめく。ぱかっと蓋が開いて中から光が溢れた。

「だめよ！ やめて！」

シレーヌが悲鳴を上げた。「そんなことしたら、私は——彼は——！」

駆けつけてきたエルネストの上に溢れた光がきらきらと降り注いだ。「うっ」と呻いてエルネストが頭を抱える。ゼルが黒い翼を大きく広げた。

「クラリッサ！」

ゼルの手をクラリッサは掴んだ。眩しい光が弾け、辺りが真っ白に染まった。

目を覚ましたのは防波堤の上だった。

近くにはゼルとエルネストが倒れている。戻って来たのだとクラリッサは気付いた。

駆けつけてきた街の人々は一様に目を瞠った。二年前にいなくなったはずのエルネストがそこにいたからだ。転がる様に人垣に駆けこんできたセリーナは、両手で口を覆ってしばらく呆然としていた。だがエルネストが自分に気がつくと、強く抱きしめ合った……。

星空の下、大きなキャンプファイアーが赤々と燃えている。

色とりどりの提灯が灯り、その下で人々は笑ったり踊ったり思い思いに楽しんでいる。

エルネストが帰ってきたことを祝って、街の広場ではちょっとした祭が開かれていた。

人魚にさらわれて初めて生還した人間だからだそう。彼を助けたということでクラリッサたちも招待され、遠巻きに群衆を眺めながら適当に取って来た料理をつまんでいた。

「けっ、くだらねえ。なんでこんな集まりにオレ様が参加しなきゃならねーんだ」

夜中を過ぎてても祭は終わらない。骨付き肉を口に運びながらゼルが悪態をついた。

「……その割によく食べているな。二人にもぜひ出てほしいと頼まれたのだ」

セリーナとエルネストはまた一緒に暮らし始めた。

戻って来た時、エルネストはだいたいの記憶を取り戻していたのだ。もちろんセリーナのことも。二人はまた恋人同士になったのだ。

「これでセリーナは空っぽではなくなるのだな。“ひとかけら”を見つけたのだから」

セリーナはエルネストを愛していて、エルネストはセリーナを愛している。シレーヌによって二人は引き離されていたが再び一つになった。セリーナは沈んだ顔を失った。それは失っていた喜びを取り戻したからだろう。

「これでよかったのだな？」

シレーヌとの愛は幻。彼女はエルネストの記憶をオルゴールに封じて彼をあの場合に閉じ込めていた。だから二人はぴったり合う“ひとかけら”ではなかったのだ。

「いいんじゃないのか？ あの半魔はあの男を操って自分のものにしてたんだから」

「半魔……？ それはなんだ？」

クラリッサは肉にかぶりつくゼルの横顔を見た。

「あいつは人魚じゃねえ。“まざりもの”だ」

「まざりもの……シレーヌがそなたに言った言葉だな。それは何なのだ？」

ゼルの手がぴたりと止まった。肉に夢中になっていた瞳がずっと暗くなる。

「……半人前ってことだよ。魔物になりきれない魔物。落ちこぼれた。あの女は完全な人魚になるためにあの男をさらったんだ。力を得るために人間の生気が必要だからな」

「……だからそなたも私の心臓がほしいのか？」

黙ってゼルがこちらを向いた。黒い瞳は冷たい満月のようだった。いつものような熱のない静かな表情に、クラリッサの左胸の奥がかすかに——震えた。何か言おうと小さく唇を開きかけた時、二人のもとへエルネストがやってきた。

「やあ、こんな隅の方にいたんだね。楽しんでるかい？」

「ああ」と頷いた時、クラリッサの目にエルネストが持つ二つのオルゴールが目に入った。「それは？」

「ああ、これは僕が祖母の形見を直したものだ。こっちが家にあったもの、こっちが君が取り戻してくれたもの。この二つは対でね、揃って初めて一つの音楽になるんだ」

エルネストが二つのオルゴールの蓋を開いた。二つの違うメロディが重なって美しい旋律を奏で始める。

なるほど、だから見つけてと言っていたのか。オルゴールの“心”は自分の片割れを取り戻したかったのだ。今はもう声は聞こえない。願いが叶って満足したのだろう。

「二年前、僕はこれを海に落として……取りにいこうとしたんだろう。それで人魚に連れ去られて……。でもよく覚えていないんだ。どうして海の中で一緒に暮らしていたのか」

地上に戻った時、エルネストはかわりにシレーヌのことを忘れてしまっていた。海底での一件をクラリッサは彼に話したが、さらわれた時の記憶もあいまいらしかった。

「でも徐々に仕事をしてみて感覚が戻って来たよ。セリーナを知らないかな？ 壊れていた部分を直したからオルゴールを見せたいんだ」

「セリーナ？ さあ、知らないな……」

そういえば祭が始まった時以来見ていない。エルネストが首を傾げた。

「そうか……どこへ行ったんだろう。まあいいか、探してみるよ」

「じゃあ私も行こう」

クラリッサは立ち上がった。そしてゼルに呼びかけようとしたが、

「オレは肉を食うから行かない！」と骨をくわえたまま拒絶され、置いていくことにした。

「本当に何も覚えていないのか？ 海の中でのことは」

歩きながらクラリッサはエルネストに尋ねた。

「うん、そうなんだ。ぼんやりとしていて……。でも何か大事なことがあったような」

少し俯いてエルネストが小さく唸る。だがふと何かに気付いたように顔を上げた。

「今、セリーナの声がしなかった？」

騒がしい人混みの中を見回すがそれらしき姿はない。エルネストが呼ばれたようにふらりと近くの路地に入って行く。その後をクラリッサは追いかけた。だが数歩進んだのち、突然エルネストの背中が止まった。どうしたのだろうと、クラリッサはその後ろから路地の奥を覗きこんだ。

「セリーナ、待ってくれ」

そこにはセリーナと一人の青年——彼女の家にレモンを持ってきた青年がいた。

「ジョエル、だめよ。だめなのよ——辛いけど」

セリーナがかたくなに首を振る。ジョエルがその肩を掴んだ。

「どうして？ エルネストが帰って来たからか？ だけどそんなの納得できないよ。俺だって君のことが好きなんだ！」

ジョエルがセリーナを強く抱きしめた。クラリッサは声にならない声を小さく上げた。

セリーナは抵抗するわけでもなくただされるがままになっていた。だがやがて——そっとジョエ

ルの背中に手を回した。

「……そうか」ぽつりとエルネストが呟いた。

「そうか……そうだったんだ」

突然路地から走り出たエルネストを追って、クラリッサは港の方へやってきた。

エルネストは防波堤の先端に立ち、夜の闇に染まった海を見つめていた。

「……知っていたんだ、僕は」落ち着いた声音とともに彼は振り返った。

「彼女の心が……少しずつ離れているのを。だから」

波の音はその声に重なる。手の中のオルゴールをエルネストは見下ろした。

「オルゴールを……海に捨てたんだ。これは愛の歌だから……でも僕らの間からは消え行こうとしていたから。それが悲しくて」

「……消えゆく？ どういうことだ？」

エルネストの言葉の意味がクラリッサにはわからなかった。愛が消える？ どこかへ行ってしまおうというのか。

「確かに僕らは愛し合っていた……でも、少しずつ気持ちがずれていったんだ。僕はそれに気付いていた。でも知らないふりをした。彼女もそうだった。お互いに失いたくないと言う気持ちがあったから……でも僕のいない二年で彼女の心は変わったんだ」

セリーナとジョエルはお互いに思い合うようになった。さっきのがその証拠だ。けれどエルネストが帰ってきて状況が変わってしまった。

「セリーナは君を愛していないのか？ うそをついたのか？」

「嘘じゃないよ。確かにそうだったから。でも今は別のところにあるのさ。人の気持ちというものは時の流れとともに変わっていくことがある。それは仕方のないことなんだ。……そしてそれは僕も同じ。彼女の元に戻って来たけれど……昔とは何かが違うんだ」

寂しげにエルネストが微笑んだ。

クラリッサは一人混乱していた。愛とは生まれたり、移動したり、消えたり、そんなに気まぐれなものなのか。それではまるで掴みどころがない。そんな不埒なものがどうしてなくてはならないのだろう。クラリッサは思わず呟いた。

「じゃあ……本当の“愛”はどこにあるんだ？」

その時、突然エルネストの後ろで大きな波しぶきがあがった。その向こうから何本もの手が一斉に伸びてきて、彼の体に巻き付く。オルゴールが地面に転がった。

「エルネスト！」

ポケットからステッキを取り出し、クラリッサはエルネストに駆け寄った。急いでステッキの先を差し出す。その時、彼を引きずりこもうとしている腕の主たちが姿を現した。

「人魚？」

金と赤と緑の髪をした美しい姿をした三人の少女たち——だが人間ではない。耳の部分は小さな龍の翼のような形をしており、指の間には水かきのようなものがついている。そして波の間からは足ではなく鱗に覆われた尾ひれが見えた。

エルネストが掴んだステッキをクラリッサは強く引っ張った。だが足を踏ん張ってもびくともしない。逆に海の方へ引き寄せられていく。

「やめて！ 姉さんたち！」

ついにエルネストの手がステッキを離れようとした時、海の中からシレーヌが現れ少女たちに飛び付いた。気を失ったエルネストとともにクラリッサは地面に転がった。

「やめて！ 彼に手を出さないで、お願い！」

防波堤の上に上がり、シレーヌが両手を広げる。三人の人魚が顔を見合わせた。

「どうしてだ、妹よ。なぜ邪魔をする？」

「そうだ、その男はお前を裏切り他の女のところへ行ってしまったのだぞ」

「だから連れて行って殺さねば。それが我々の一族の掟だ」

「いいえ、出来ないわ！」青い髪を振り乱しシレーヌが叫ぶ。

「彼は私にとって大事な人なの！ だから殺すなんて——」

「でも地上に戻り、その男はお前のことを忘れてしまった。我々人魚は一度愛を交わした相手に裏切られたら、泡になって消えてしまう。お前もわかっているだろう」

「人間の気持ちは変わりやすい。だから本気になるなど言ったのに——お前は言いつけを破った。その男の魂を食らわないとお前はいつまでも半人前のままだというのに」

人魚たちが口々に責めたてる。シレーヌは「でも、でも」と口ごもった。

「いいか、シレーヌ」金色の髪の人魚がすうっと前に出てきた。

「このままではお前は一族を追放になる。いや、その前にその男を殺さずに朝を迎えれば……お前は泡になって消えてしまう。だから、やるんだ」

そう言って人魚が差し出したのは、美しい短剣だった。「これでその男を殺すんだ。そうすればお前は救われる。わかったな？」

そう言って三人の人魚たちは、暗闇の海の中に消えて行った。

「……泡になるとはどういうことだ？」

むくりと起き上がり、クラリッサは海から上がって来たシレーヌを見上げた。裸足でぺたぺたと歩いてくるとシレーヌは崩れるように倒れているエルネストのそばに座った。

「死ぬということよ。私たち人魚は……愛する者を失うと泡になってしまう」

「……だからエルネストを殺すのか？ でもそれでは結局失うのでは？」

短剣を突きさせばエルネストは死んでしまう。死とはすべての終わり——無だ。

「違うわ、“心”を手に入れるの。地上に戻って彼は私を忘れてしまった……私への愛も。だから殺して永遠に私のものにするのよ。そうすればずっと……一緒にいられる」

「命を奪って無理やり手に入れるのか？ それは正しいことなのか？ “愛”というのはそういう風に手に入れて人に喜びを与えるのか？」

「だって仕方ないじゃない！ そうしないと私は死んでしまうんだから。それに人間と妖魔はずっと一緒にはいられないのよ！」

震える手でシレーヌは短剣を振り上げた。その時、エルネストが目を覚ました。

「……シレーヌ？」

薄く瞬きを繰り返し、その双眸が和らぐ。

「ああ、やっぱり君だ……シレーヌ。ごめんよ、君に謝りたかったんだ」

「え……？ エルネスト、私のことを」

シレーヌが目を瞠る。エルネストがゆっくりと身を起こした。

「思い出したよ、僕がオルゴールを捨てて海に飛び込んだことも、君が助けてくれたことも……そして悲しい記憶を預かってくれたことも。すまない君のことを忘れてしまって。何か大事なことがあったような気がして、ずっと考えてたんだ。ようやくわかったよ」

エルネストの手がそっとシレーヌの頬に触れた。

「ありがとう……君と会えてよかった。もう一度会えたら、そう言いたかったんだ」

「……エルネスト」

エルネストは優しくシレーヌを抱きしめた。シレーヌの目から涙がこぼれ落ちる。短剣を握る腕がだらりと下がった。

「やっぱり……私には出来ない。出来ないわ」

ふるふると頭を振り、シレーヌはエルネストの体を押し戻した。

「あなたには生きていてほしい。心から……愛してるから。だから——守るわ」

そう極上の微笑みを浮かべて——シレーヌは握っていた短剣をもう一度振り上げた。クラリッサの目にその軌道が映る。振り下ろされた光る刃が彼女の胸に突き刺さるのも——。

「シレーヌ！」崩れ落ちた体をエルネストが受け止めた。

「シレーヌ、どうして……シレーヌ！」

反応のない体を抱きしめエルネストが叫ぶ。何度も、何度も、何度も……。

やがて遠くの空が明るくなり始めた。水平線から太陽が昇り、夜が——明けていく。

目を閉じたまま動かないシレーヌの体が、きらきらと発光し透き通っていく。薄れて消え行くその体をエルネストは抱きしめた。

「愛してる……愛しているよ、シレーヌ……僕がいるべき場所は、気付いたらいつの間にか君の所だったんだ」

身をかがめ、エルネストはシレーヌの唇にそっと——キスをした。

その瞬間、彼女の体が跡形もなく消え失せた。小さな虹色の泡が舞い上がり、海に還っていく。その中の一つがクラリッサの左胸に、そっと……溶けていった。

「……おい、何してんだ？ こんなところで」

座り込んだままの動かないクラリッサの頭をゼルが小突いた。首を動かしてゼルを見上げる。相変わらずのふてぶてしい顔がそこにあった。

「祭はとっくに終わっちゃったぞ。どこに行ったのかと思ったぜ」

「ゼル……」今までのことを説明して、さまざまな疑問をクラリッサはぶつけようとした。でもどういうわけか息が詰まってうまく出てこない。

「ゼル、“愛する”ことは……なくすことばかりなのか？」

ようやく紡いだ言葉に、左胸がチクリと痛んだ。

どうしてだろう、胸が——苦しい。針で刺されているようにチクチクと痛い。そして、息が震えて何かが込みあげそうになる。

「それなのに人はどうしてその感情を必要とするんだ？」

こんなに苦しい思いを。これはシレーヌの……痛みだ。そして彼女の思い。胸が躍るような高揚感などない。ただ深い深い——せつなさだけが漂っている。

「……しょうがねえだろ、人間の心は欲張りなんだ」隣にゼルが座った。

「押さえつけたって言うことはきかねえ。生きてる限りずっと心は動く。悲しかろうが苦しかりうが止まらねえで動く。錆び付いて鈍くなったら何も感じられなくなるから」

喜びも、幸せも——。それを知るために動き続ける。この世界に終わりがないように。今日が過ぎれば明日がまた来るように。

「そうか、では私もここで止まってはいけないのだな。いつか知らなければならないのだな。でも……何だかとても痛いのだ……」

左胸のあたりをクラリッサはぎゅっと押さえた。

「なあ、ゼル……魔物と人間はずっと一緒にはいられないのか？」

その質問にはゼルは答えなかった。ただ眩しい金色に染まっていく空を見つめ、そしてそっとクラリッサの髪に手を触れた——。

やがて防波堤は始まりの光に包み込まれていった。

その時足元に転がる二つのオルゴールから、儚く美しい音色がこぼれた。

『……けて。とど……けて』

その一つから、女性の姿をした白いもやのようなものがふわりと浮かびあがった。

『届けて……愛しい人のもとへ』

もう一つのオルゴールの上に、今度は男性らしき白い影が現れる。二人は手を取り合い体を寄せ合って——朝日の中に溶けていった。

防波堤の先端にエルネストは海の方を見つめて座り込んでいた。だがふと立ち上がってクラリッサの方へ戻って来ると、二つのオルゴールを拾い上げた。

「……これはね、二つで一つなんだ」ぽつりとエルネストが呟いた。

「祖父が祖母に送った永遠の愛の証……だから二つは離ればなれにしてはいけないんだ」

エルネストの頬を一すじの涙が伝った。オルゴールを手に先端に立ち、彼は虹色の泡が消えていったどこまでも青い海を見つめ——微笑んだ。

「君に贈るよ、シレーヌ……僕の愛の証として」

“さようなら……”

愛の歌を奏でる誓いの箱が、手のひらを離れた。小さな音を立てて波間に落ち、ゆっくりと深い水底へと沈んでいく。

「……なくすわけじゃねーよ」

ゼルの手がクラリッサの髪から離れた。ぬくもりが潮風にさらわれていく。名残惜しいような気がして、クラリッサはその指先を目で追った。

「たとえ形はなくなっても、心ってのは……大事なことは忘れねえもんさ」

その時、どこからかオルゴールの音色が聞こえてきた。

重なり合ううたかたの旋律は、波の音とともに、穏やかに流れ続けていた。

世話焼き魔一メイド 番棚葵

あらすじ

○あらすじ

魔界の王子としての記憶を取り戻しながらも、魔界に帰ることを渋る裕太＝ユタ。そんな彼に、魔界からの刺客が襲いかかる。そしてついに、クラスメートがその戦いの巻き添えに。自分がいることで周囲に迷惑がかかると感じたユタは、世話役の人魚姫サリナと共に魔界に帰る決意をするのだった。

○登場人物紹介

鎌井裕太（ユタ）

入学前の記憶がない少年。その正体は魔界の王子・ユタ……らしい。

海野紗理奈（サリナ）

魔界から来た人魚姫。幼い頃からユタを慕っていて、何かと過剰に世話を焼く。

「うーむ、これがそうなのか」

僕はうなって、強風の吹きすさぶ崖の上から、眼下に広がる赤茶けた大地を見つめた。

荒涼とした色彩の光景は、しかし印象をそれだけに留めておらず、所々に緑色——植物だろう——を配色することで、どこか生命の気配を漂わせている。「死」と「生」の同居したフィールド。それが水平線が見えるくらいに壮大に広がっていた。

だが、ここまでなら僕が「住んでいた」世界でも見られる光景だ。僕がうなったのには別に理由があって、この世界における自然の配色は茶色と緑だけではなかったのだ。

ぽつぽつと見える、黄色や赤——まあ、この二つは日本にもある自然の色だからいい。緑と同居しているのには違和感があるが。さらに、それに加えて、青、群青色、灰色、紫、オレンジ、etc. 様々な色が、子供が気まぐれに落書きしたように、大地のそこかしこに塗られてあったのだ。

隣から「あれらも植物ですよ」と解説してもらおう。頭を殴られたような衝撃を受けた。

とどめは頭上に広がる空である。青く晴れているかと思うと、急に灰色に変色する。かと思えば、極彩色の光がにじみ出てきた。太陽は出ているが、その数は二つ。片方はとても小さく、大きい方より若干早く動いている。空の色彩がころころ変わるのは、この二つの太陽の魔力が互いに干渉しているため、とのことだった。

「本当、おかしなところだね。ここは」

「あなたの故郷ですよ」

僕の隣に立つ少女、サリナが微笑しつつ言った。どこか楽しそうなのは、僕が単純に呆気にとられているわけではないとわかったからだろう。

「どうです？ 昔のことを思い出してきましたか、ユタ様？」

「うん、うっすらとね」

僕は認めざるを得なかった。確かに僕は、この光景を見たことがある。サイケな色の集合体が植物だとサリナに教えてもらった時、衝撃を受けたのも、単にその概念に抵抗があるだけではなく、どこか脳の奥に触れるような感触を受けたからだ。

僕は、ここを、知っている。

人間・鎌井裕太ではなく、魔族の王子・ユタとして。

「ここが……魔界」

僕はつぶやくと、色々な気持ちをいっぺんに呼気に乗せ、口から吐いた。

僕達——記憶を失い普通の高校生として生活していた魔界の王子ユタと、人魚族の姫にしてユタの世話役であるサリナは、とうとう魔界へと帰っていた。

それまではあまり魔界に帰る気にはなってなかったのだが、前回夢魔族の襲撃を受けた結果、自分のクラスメイトにまで累が及ぶ可能性があること知り、帰郷を決意した。今まで僕を狙ってきた魔族は、何も夢魔族に限らない。様々な異種族が、魔界の王子を人質に取らんと襲撃をかけてきた。今後、他の刺客が再びクラスメイトを巻き込んで襲いかかってくる可能性もあるだろう。

それはできるだけ避けたかったのだ。

ちなみに他種族が襲ってくる理由は「自分たちが魔界の支配者に成り代わりたいから」らしい。魔界は魔人族という種族が頂点に立って治めているのだが、それを良しとしない種族も多いようであった。

「それで下克上を狙われるんだから、うちの親父ってよっぽど人望ないんだな」

「そういうわけでもないですよ。単純に、血気盛んな種族が多いんです、魔界では」

崖から降りた後。今までのことを軽く整理して、そんなことをつぶやく僕に、サリナが苦笑して答えた。人間の世界でも着ていたメイド服を身に包んでいる。もう少し動きやすい格好でもいいと思うんだけど、ひょっとして気に入ってるんだらうか。

と、そんな彼女が、少し首を傾げてつぶやいた。

「ユタ様。その様子だと、やはり記憶は完全には戻りませんか？」

「うん。この景色には刺激を受けたけど、すべて記憶を取り戻すまでにはいかないね」

荒れ地の上を歩き、首を巡らせながら、僕はうなずく。崖の上からだと小さな染みのように見えた、緑やそのほかカラフルな色が、今は丈の短い草として目に映っていた。

紫やオレンジの草は、見ていて少し違和感を感じる。少ししか感じないのは、昔ここにいた経験があるからだらう。記憶はないけど。

そう、僕の記憶——魔界の王子ユタとしての記憶は、完全に戻っているわけではなかった。特に魔界にいた頃の記憶は、ほとんど思い出していない。サリナは小さい頃から僕の世話役をして一緒にいるから、彼女との思い出は時々思い出すんだけど。

「やっぱりまずいよねえ。魔界の王子が記憶喪失なんて」

「そうですね。旦那様は、間違いなく怒ると思われそうです」

「うう、気が重いなあ」

「大丈夫ですよ。そのために、わざわざ到着ポイントをここにしたのでですから」

サリナはにこりと笑った。到着ポイントとは、人間の世界と魔界を行き来する際に使うトンネルの出入り口のようなものだ。トンネルと言ったけど、実際にはその到着ポイント間でワープが行われて、次元を超えて各世界にたどり着く。

これは数と場所がきちりと決まっていて、僕達は人間の世界で住んでいた町の、とある山奥の湖に術を使ってワープ用の穴を開き、先ほどの崖の上に立った。湖と崖が、それぞれ到着ポイントというわけである。

で、王城に戻るならもっと近くのポイントに出ればいいのだが、僕達はあえて少し遠い到着ポイントを選んだ。もちろん理由あってのことで、城に気づかれないようにこっそりと、ある人物に会う予定なのだ。サリナは笑いながら、その人物のことを言った。

「賢者様なら、きっといい方法を教えてください。安心してください」

「うん。そうなることを信じてるよ」

僕はため息を吐きつつ、遙か遠くにうっすらと見える色彩の塊を見た。崖の上から見えたが、森である。人間の世界と違ってカラフルなそれが、僕達の当座の目的だった。

正確には、その中にある小屋と、そこで待ち受けている人物が。

その賢者の名前はシヴィルと言うらしい。王城に勤めている文官で、以前夢魔族の攻撃に悩む僕達に知恵を貸してくれた。魔人族の中で、もっとも知識に富んでいると言われている。

僕達がまず彼に会うことにしたのは、言うまでもなく記憶を取り戻すためだ。魔界の王にして僕の親父は、非常に厳格かつ偏屈、そして横暴な性格なのである。

そんな王に「記憶を失ってます、てへ」とか言えば、「魔界の王子たるものが不甲斐ない！」と怒り出すに違いない。下手をすれば、殺されるまで折檻を受ける可能性もある。少なくとも僕のなけなしの記憶はそう告げていて、サリナも——ありがたくないことに——そのことを保証してくれた。

なんとしても、記憶を取り戻す必要があった。そこで、前にもお世話になった賢者様に、もう一度すがりつこうと考えたわけだ。幸い、サリナが事前に連絡を取ってみると、内密に会ってくれるという返事をよこしてくれた。

その待ち合わせ場所が、今から向かう森の中の小屋なのである。荒野の道なき道を歩くこと、数時間。僕達はその森の入り口までたどり着いていた。

そして、僕の我慢はそこまでが限界だった。

立ち止まって、前を歩くサリナに声をかける。我ながら、だらしのない声を。

「ちょっと、サリナ。少し休まない？」

「え、どうしてです？」

「どうしてって……かなりの時間歩いているよ。だいぶ疲れたんですけど」

そう、向こうの到着ポイントである山の奥までの行軍中、そして崖の上からここに至るまで、僕達はほとんど休みを取っていなかった。おかげで僕はへとへとになっていたのである。女の子のサリナが平然とした顔をしていたので、口にはすまいと思っていたが。

案の定、サリナはこちらに振り返ると、微苦笑を浮かべて言った。

「もう、ユタ様。これくらいでへばるなんて、だらしがないですよ。人間の世界の生活で、身体がなまったんじゃないですか？」

「そうかもしれない」

ここは素直に認めるしかなかった。きっと、魔界の住人はこの荒野を歩き回っても平気なくらいには、基礎体力があるのだろう。僕もユタであった頃は、それくらいはしていた気がするし。

しかし、鎌井裕太として一年間人間をやっていた身としては、いきなり何時間も歩きっぱなしというのは辛い。少し哀願の目でサリナを見してみる。

「ふふ、わかりました。休憩にしましょう。そろそろお昼ですし」

サリナは優しく笑ってくれると、手に下げた鞆の中からレジャーシートを取りだして森の入り口の地面に敷いた。このシートは人間の世界から持ってきたものだ。僕も背負っていたリュックの中から、弁当箱を取り出す。中身は白飯に唐揚げ、野菜の煮物など、オーソドックスなものだった。

(そういえばこれ、最後に味わう向こうの世界の料理になるのかもしれないんだよなあ)

そう考えると少し感慨深かった。僕がしみじみと弁当をながめていると、自分の弁当箱にサリナが箸を入れ、唐揚げを取った。

「はい、ユタ様。あーん」

またか。僕はリアクションに困った。向こうの世界でも、サリナは僕に手ずから料理を食べさせようとしていた。世話を焼いてくれるのはいいけど、これはちょっと恥ずかしい。

「いやあのね、サリナ？ 弁当くらい自分で食べられるってば」

「駄目です。ユタ様のお世話を焼くのが私の努めなんですから……それに」

「それに？」

「ここなら誰もいませんし、そこまで照れることもないでしょう？」

顔を赤くしてこちらを見つめてくるサリナに、僕は胸がときめきそうになった。

彼女の言うことにも一理ある。ここは、素直に言葉に甘えるべきだろう。まあ、向こうでも何だかんだ押し切られて、毎日料理を食べさせられていた気もするけど。

「じゃ、じゃあ。あーん」

「はい」

サリナが箸を僕に差し入れる。いい塩梅に揚げられた鶏肉が、口の中で肉汁をしたたかせた。美味しい。魔界でもこういう料理を食べられるといいんだけどな。もちろん、サリナの手製で。

「ユタ様。どうですか、お味は？」

「うん、美味しい」

僕がそう言おうとした時。ふと、首筋に何かを感じた。

これは——視線？

「誰だ？」

思わず振り返る。が、そこには誰もいない。赤茶けた大地と、点々とした僕達の足跡が見えるだけだ。

「どうしたんですか、ユタ様？」

「……いや、何でもない」

緊張の色を顔に出すサリナに、僕は首を振って答えた。少々疲れているのかもしれない。ここが魔界という、異邦の世界——本当は故郷なのだが——なので緊張しているせいもあるのかもしれないなかった。

だけど。この体験で僕は一つの収穫を得ていた。それは、次のような推測である。

「そうか。人間の世界を出たからって、油断は禁物なんだよな。他種族の刺客がまだ僕を狙っている可能性はあるんだ……サリナ、悠長にしていられない。昼食が終わったら、すぐにでも出発して……」

そしてサリナの方を向いた僕は、首を傾げなければならなかった。

サリナは先ほどまでの晴れやかな笑顔もどこへやら、何か考え込むようにうつむいている。真剣な目つきで、穴が空くかと思うくらいにじっと地面を見つめていた。

「そう……記憶が戻るのは……確かに」

ぶつぶつ、何やらつぶやいている。僕は彼女の顔をのぞき込んだ。

「どうしたの、サリナ？」

「……え？ いえ、何でもありません。ちょっと、ぼおっ、としてただけで」

彼女はぼんやりと僕を見てから、慌てて両手を振った。引きつったような愛想笑いを浮かべていて、あまり何でもないとはい難い表情をしている。

「本当に、大丈夫なの？ 何かあったら言ってよ」

「ええ、はい」

サリナはそう言って、今度は微笑を浮かべてみせたが、今一ぴんとこない表情だと僕には思えてしまう。

(まあ、いいか。ひょっとしたら疲れが出てきていて、それを僕に伝えたくないだけかもしれないもんな)

健気で一途な彼女の性格を知っている僕としては、それが一番しっくりくる解釈だと思った。ので、それ以上あまり気にしないようにした。

「ほう、まさか本当に記憶喪失とはな」

感心したかのようにつぶやいて、テーブルの向こう側に座る老人は目を細めた。

老人と言っても、人間の世界によく見られる、よぼよぼとしたお爺さんのイメージはない。髪と眉とひげが白く、野坊主に生えているくらいで、さすがに手足は細いものの、体つきは全体的にがっしりとしている。

ゆったりとした服を身につけ、片手に分厚い本を持ち、わずかな明かりが差し込んでくる木製の壁の部屋の中央で、背もたれのない椅子にどっかりと腰をかけている。

「本当に、何も覚えておらんのか？」

「いえ、少しは思い出せるんですが……細かいことはさっぱりです」

「そうだろうな。さもなければ、ユタ王子が文官にすぎないわしに敬語など使ってくるはずがない。やれやれ、礼儀を覚えたのはいいが、どこか悪ガキが大人しくなったようでつまらんな」
肩をすくめると、言葉とは裏腹に興味深そうな目で僕をじろじろと見つめてきた。

ここは森の中にある小屋。昼食を終えた僕とサリナは、その後特にさしたる障害に出会うこともなく、例の目線も謎のまま、とりあえずこの待ち合わせ場所についたのだ。

そこにはこの老人、すなわち賢者シヴィルがすでに待っていて、茶と席をすすめてくれた。自分も椅子に腰掛け、早速、僕達の相談に乗ってくれる。僕は記憶を取り戻すに当たって、今までの状況をすべて話した。説明には若干の時間がかかり、粗末な掘っ立て小屋に似合わない、瀟洒な陶磁器に入って出てきたハーブティは、すっかり冷めてしまった。

そのハーブティを一口すすると、シヴィルは僕の目をじっと見つめて言った。

「ともあれ、お前さんが本物のユタ王子なのは間違いなさそうだな。目はその者の中に潜む存在を映し出す。お前さんの目の中には、確かに王子の姿が見えるよ」

「はぁ、そうですか」

よくわかったような、わからないような言葉だが、信用はしてもらえたようだ。

「ただし」

シヴィルが付け加える。

「もしもその話が本当なら、記憶を蘇らせるのは相当厄介だぞ」

「え？」

「単なる事故や、怪我、病気などで失った記憶は、放っておいても元に戻る。その修復力を手助けする術をかけることも可能だ。だが、お前さんは自らの術の力で……それが事故だったとしてもだ……記憶を『封印』してしまった。どういうことかわかるかね？」

「えっと。その『封印』を解かないと、元に戻らないってことですか？」

「そうじゃ。そして、『封印』を解くための条件設定は、それこそ無数にパターンがある。キーワードの詠唱、儀式の行使、アイテムの使用など。これは術をかけた当人でないとわかりようがない。そして当人であるお前さんは記憶を失っておる。堂々巡りだ」

ズバッ、と斬り捨てたその言葉に、僕はめまいを覚えそうになった。

つまりシヴィルはこう言っているのだ。

「じゃあ、記憶は戻らないんですか？」

「少なくとも、わしの力ではな。記憶が少しずつ戻っているということは、封印が不完全なのかもしれない。だから時間が経てばすべて戻るかもしれないが、術や外部の力で今すぐ記憶の封印をどうにかすることはできないな」

淡々とつぶやくシヴィル。一切の感情を挟まないその言葉は、事実だけを的確に指摘していた。僕は自分の境遇も忘れて、少し感心する。さすが賢者、私情というものは挟まないらしい。

「どうだ、面白くなってきただろう？」

前言撤回。この爺さん、笑ってやがる。

「ちょっ、人の不幸を楽しまないでくださいよ！ 僕が記憶を失っているからって、強気に出て！」

「まあまあ、落ち着いてくださいユタ様。シヴィル様は元々こんな性格ですよ」

隣のサリナが苦笑を浮かべ、立ち上がる僕を「どうどう」と鎮めてきた。腕をホールドされる。美しい彼女の外貌の中でも、ひときわ目立つ大きな胸が押し当てられたので僕はあっさりとその場に座ることになった。

と、シヴィルの笑みがさらに深くなった。

「おやおや、ユタ王子。すっかりサリナに頭が上がりなくなっておるな。昔はあれだけ威張りちらしていたのに」

「え！ 僕ってそんなだったの？」

「そりゃあ。ユタ王子といえば、わがままで、気まぐれで、周囲を迷惑をかけてばかりのドラ息子だったからの。特に世話役のサリナには、何かとちょっかいをかけては困らせておったなあ」

うわあ。僕はこの時初めて、自分がユタ王子であったことを後悔した。

「えっと、その、サリナ……ごめん」

「ふふ、いいですよ」

深々と頭を下げると、サリナは微笑を浮かべて許してくれた。本当にいい娘だよなあ。

ただ、僕には少し気になることがあった。微笑を浮かべた後、すぐにサリナがその表情を暗くしたのである。とは言っても、今持ち出したユタの所行に思うところがあるわけではないらしい。というのも、森の入り口で休憩をしてからずっと、彼女は物思うような表情を浮かべていたからだ。

何をそんなに気にかけているのだろうか。聞こうか聞くまいか思っているうちに、この小屋までついてしまった。しかしまだ彼女が懸念に思うことがあるなら、やはり今のうちに尋ねておくべきだろうか。

僕がうつむき加減のサリナに向かって、口を開きかけたその時。

「さて、ユタ王子よ。記憶について補足があるのだが」

先にシヴィルが言葉を発した。厳かに、鉄のような重々しい声をもって。真剣な話なのだ、

僕にもわかった。魔人族の賢者に向き直り、続けるよう目で促す。

シヴィルはうなずくと、

「記憶の封印を破る術はないが、記憶を情報として得ることならできるかもしれん」

その言葉に、サリナが、はっ、と顔を上げて尋ねる。

「どういうことです？」

「わしが推測するに、王子は記憶の上に『自分は人間鎌井裕太である』という認識を上塗りすることで封印を施した。しかしその上塗りは完璧ではないので、下の記憶がぽろぽろとこぼれている状態だ。封印を解く、つまり上塗りした認識を術で消し去るのは難しいが、このこぼれる記憶をさらに吸い上げていくことはできると思う」

「えっと。そうすれば、僕の記憶は戻るかもしれないってことですか？」

「そういうことだな。ただし封印、つまり、人間であるという認識は残るから、記憶という情報は頭に入っても、人格まで元には戻らないかもしれんが」

つまり、ユタ王子としての記憶を「客観的に知る」ことはできるが、それを自分の記憶として認識できない。シヴィルの話の要点をまとめると、そういうことらしい。

確かに、記憶が戻ってもそれが他人事にしか感じられないなら、嬉しさも中くらいなりだ。僕の親父も、結局は僕のことを「不甲斐ない」と判断するかもしれない。

「でもまあ……何もしないよりはマシかな」

僕はため息を吐いてつぶやいた。ユタ王子としての記憶をある程度知っておけば、彼に——まあ、僕なんだけど——なりきって魔界の王を欺くことができるかもしれない。僕はそう判断し、シヴィルにどうやって記憶を吸い上げるのか尋ねた。

彼の答は意外なものだった。

「サリナを使う」

「え、私ですか？」

「家族を除けば、お前さんが一番ユタ王子と親しいからな。いや、内政で忙しい王家の人間よりも、お前の方が王子と思い出を共有しているかもしれん。それを利用する」

そう言うと、シヴィルは指につばをつけ、持っていた本をペラペラとめくり始めた。とあるページで手を止め、指を動かす。書いてある文面を確認しているのだろう。

ぶつぶつと何事かつぶやき始めた。たぶん、術に使う呪文を詠唱していると思われる。そしていきなりサリナを指さすと、

「キエーッ！」

気合いとも、奇声ともつかない、甲高い声を上げた。びくっ、と身を震わせたサリナに、次の瞬間、異変が生じる。

「あ、あら？」

彼女の身体がうっすらと、光り始めたのだ。その光のせいで、彼女の存在そのものが希薄になったようにも見える。僕は不安になりながら、シヴィルの方を見た。

「サリナに何をしたんですか？」

「安心せい、すぐに元に戻る。彼女には術の媒介になってもらったただけだ」

「媒介？」

「さよう。彼女とユタ王子が共通して持つ記憶を、彼女から抽出して魔力に変えた。いわば、今のサリナはユタ王子専用の記憶媒体だ。後はお前さんが彼女に触ればいい。その魔力がお前さんに流れ込み、記憶という情報になって定着する。さらに他の記憶もその情報に触発されて、お前さんの中に流れ込んでくるだろう」

うーん、よくわからないけど、とにかくサリナに触ればいいのかな。

「じゃ、早速」

僕が右手をサリナにのぼしかけると、シヴィルが呆れたようにうめいた。

「違う違う、そうじゃない。それでは無理だ」

「え。というと？」

「手で触れるくらいで、情報が頭の中に入ってくるものか。体内に通じる穴で、それを吸い込まなくてはならないのだ。ま、一般的には口だな」

「はあ、なるほど……」

ん？ いや待て、それってつまり。

僕が嫌な予感をしてシヴィルの方を見ると、案の定彼は意地悪く笑っていた。

「そうだ、キスだ。お前さんがサリナに口づけすれば、情報は入ってくる。相手は女性だ、優しくしてやるのだぞ」

「え、き……」

「キスっ？」

僕よりも先に、サリナが素っ頓狂な声を上げた。椅子から立ち上がり、二歩、三歩と後ずさっている。そして叫んだ。

「だ、駄目ですよ、そんなキスだなんて！」

「え？」

拒絶の意志を伝えられ、僕は内心ショックを受けた。

そして、ショックを受けた自分に対して、さらにショックを受けていた。

薄々自覚していたことではあるが、今ではっきりと気づいたのだ。自分はサリナのことを、本当に好きなのだ。都合のいい従者ではなく、一人の女の子として。

それが、こんなにも嫌がられるなんて……胸は触らせてくれたのになあ。

だが、サリナはそんな僕の心境にはおかまいなく、腕を振りながら言葉を続けた。

「だって、だって！ キスですよ、そういうのは恋人同士とかでやるべきです。私のような世話役が、ユタ様とキスだなんて、そんな、そんな……！」

「いやあの、落ち着いてサリナ。これは必要な処置で、人工呼吸みたいなものだから」

何だか言い訳しているみたいで、心の中で自分のことを「情けない」と罵りつつも、僕はとりあえずサリナをなだめようとした。

できなかった。いきなりサリナが涙をこぼしたからである。

「ごめんなさい、ユタ様……でも、でも！」

そして、いきなり彼女は身体の向きを変えると、扉を開いて小屋から走り去った。

僕は啞然として身動き一つ取れない。彼女を傷つけたことに後悔したのもあるが、唐突な展開に脳がついていけなかったのだ。

僕が我に返ったのは、数分後。後ろから咳払いが聞こえてからであった。

「いいのか、王子。追いかけないで。彼女がおらんと、記憶は取り戻せないぞ」

「あ、ああ。そうだった」

そして僕は小屋を飛び出す。森の中を見回したが、すでにサリナはその姿を消していた。

「くそ、どこに行ったんだ！」

「占いだと、あっちだな」

マイペースな声が響いた。振り返ると、シヴィルが本に目を落としながら、無造作に人差し指をのばしていた。

いつの間に占いなんかしたのか。というか、それなら一緒についてきてくれればいいのに。色々言いたいことはあったが、僕はとりあえずサリナを追いかけることを優先とした。

僕がサリナを追いかけて始めたころ、サリナは自分の中の自分の声と会話していた。

(私は、なんてことを……ユタ様の記憶を取り戻さないといけないのに)

(でも、わかっているの？ ユタ様が記憶を取り戻すということは……)

(わかってる！ けど、それがユタ様のためになるなら、私は……)

(そんなの損するだけじゃない。今なら、まだ間に合うかもしれないわよ)

(そうかもしれないけど……でも、でも)

(あの方は離れていくわ、このままだと)

(……………)

(いい？ それを解決するには、方法は一つしかないの)

声は、まるで他人のように、サリナにその方法を囁いた。

追跡は意外とすぐに終わった。数百メートルほど走った先、幹の半径が大人の身長ほどはあろうかという巨木の根元に、サリナが佇んでいたからである。

僕は安堵の息を吐くと、ぼおっと立っているサリナに近づいた。

「よかった、すぐに見つかって。サリナ、さあ小屋に戻ろう」

すると、サリナはこちらを見つめ、呆然とした声で尋ねる。

「小屋に戻って、記憶を戻すんですか？」

「うん。どうしても君が、その、キスがイヤだって言うんなら、違う方法をシヴィルに考えてもらう。あの人なら、それくらいのことは……」

この時、僕は気づいていなかった。サリナの瞳が、光を映していないことに。

「記憶を戻して……」

「え？」

「記憶を戻して、ユタ様はどこに行くんですか？」

「どこって、特に決めてないけど。強いて言うなら、王城くらいで」

「ダメです」

僕は自分の耳を疑った。今、サリナは何て言った？

「記憶を戻して、王城に行ってはダメ」

「い、いきなり何言ってるんだよ、サリナっ？ 一体どうして！」

「だって、そんなことしたら……私とユタ様、ただの世話役と王子に戻っちゃう」

声にかすれたものが混じっていた。サリナの肩が小刻みに震える。

「サリナ……？」

「だから記憶を戻しては、ダメっ！」

同時だった。彼女がヒステリックに叫ぶのと、その姿が一気に上昇するのと。

僕は見た。サリナの下半身が魚のそれになり、手に水で作られた短剣が生まれるのを。人魚族の中でも、ドルフィン種とトビウオ種のハーフである彼女は、すさまじい跳躍力を持つ。そして、魔法で作り出した水の短剣は、目標をたやすく切り裂くだろう。

「ちょ、ちょっとっ？」

僕は慌てながらも、自身を変えた。白い髪、赤銅色の肌。魔界の王子ユタの姿に。この姿の方が若干身体能力も上昇する。空中から襲い来る剣、それを持つ白く細い手を、できるだけ丁寧に受け止めた。

そのまま、サリナといっしょにもつれ合い、地面に転がる。驚いたことに、まだサリナは闘志をたぎらせていて、すぐに起き上がると僕に馬乗りになり剣を突きつけてきた。

「ユタ様、お願いします……記憶、戻さないで……」

「何言ってるんだよ、サリナ、正気に戻って！」

僕はその手を必至に押さえ、説得を試みる。しかし、呼びかけに応える気配はなかった。

サリナは再び肩をふるわせた。目から涙があふれている。

「だって、だって私……私は」

そして、彼女は目をつぶって、意を決したように言った。

「私は、ユタ様のことが好きだもの！ 従者でなく、一人の女の子として！」

「え」

僕は呆気にとられてその言葉を聞いた。サリナが僕のことを好きだって？

「サリナ、それ本当……わわわ！」

嬉しさのあまりに弾みかけた声は、すぐに慌てたものになった。サリナがなおも短剣を突きつけてきたからである。これじゃ、甘酸っぱい思いにひたることもできやしない。

「だから、ユタ様。記憶は諦めて。魔界の王子としてでなく、一人の男の子としてずっと私と一緒にいて。お願い」

「そ、そんなこと言われても！」

「私、ずっとユタ様の側にいたいんです。世話役のままなんて……一生このままなんて、イヤなの……」

サリナの気持ちは、僕としても純粋に嬉しかった。短剣持って脅迫されていなければ。

どう考えても今のサリナは異常だ。まるで、何かに取り憑かれているようで……

(いや待てよ。実際、何かに取り憑かれてるんじゃないのか?)

ここは魔界だ。それに僕は色々な魔族に狙われている。人間の世界でクラスメートが巻き込まれたように、僕の世話役であるサリナが巻き込まれても、おかしくはない。

ここまで思考を進めた時、ふと僕はシヴィルの言葉を思い出していた。

——目はその者の中に潜む存在を映し出す。

僕は神経を集中し、眼前に迫っているにあるサリナの目をのぞき込んだ。美しいぬばたまの瞳の奥に、白い霞のよなものが見える。妖しく、邪悪な気配を放つものが！

「誰だお前は！ サリナの中から出てこい！」

僕が叫ぶと、サリナの動きが止まった。次の瞬間、彼女の身体は崩れ落ち、白い煙が浮き上がった。

煙は空中で、人間の形を取った。ただし、おぼろげな輪郭だけだ。頭部に当たる部分に赤い光点が二つ。どうやら目らしい。それを僕に向けてきた。

「……ちっ、まさか気づかれるとはな」

「何者だっ？」

「霊人族、といえはわかるかな？ 記憶喪失の王子様」

霊人族。僕の心許ない魔界の知識にも、その名前はヒットした。肉体を持たず、霊体だけで存在する魔族。他の生物に乗り移り、心を操ることができる。

「そうか、お前がサリナに乗り移って操っていたのか！」

理由は大方、僕をさらって下克上といったところだろう。しかし、僕の予想は半分当たり、半分外れたようだった。

「ご明察……と言いたいところだが、若干違う。この女は操るまでもなかった」

ん？ どういう意味だろう。僕は一瞬眉を寄せたが、すぐに霊人族をにらみつけた。今解決すべき問題は、他にある。

「さっさと彼女の身体から出ていけ！」

「大人しく出ていくと思うかね？」

「もちろん、思わないさ！」

最後の「さ」で僕は手のひらの上に白い炎を生み出した。すべてを焼き尽くす、魔界の白炎を。

「消えろ！」

それを霊人族に投げつける。彼（彼女？）はとっさにそれをよけたが、肩口に当たったようだった。

「ぐっ！」

「よし……えっ？」

手応えに拳を握った僕は、次の瞬間顔から血の気が引くのを感じた。倒れているサリナが、肩を押さえてうめき声を上げたからである。ちょうど、霊人族が白炎を受けた場所だ。

「う、うう」

「サリナっ？ 霊人族、一体何をしたんだ！」

「おやおや、知らないのかね。霊人族は取り憑いた相手と感覚を共有できるのだよ。私がダメージを受ければ、この娘も同じように苦しむ」

「何だっ？」

「さて、月並みだが王子よ。この娘に傷ついて欲しくなければ、一緒に来てもらおうかね。本来ならこんな芸のないことはしたくなかったんだが、君が私の存在に気づいてしまったのがよくないのだよ」

どうもこいつは、あくまでサリナを傀儡にして僕を捕らえたかったらしい。それが霊人族特有の美学なのか、この個体の美学かはわからないが。とにかく、変な奴だ。

しかし変な奴でも強敵は強敵だ。僕は頭をフル回転させていた。霊人族とサリナの感覚のリン

クを、どうにかして絶たないことには、僕に勝ち目はないが、そんな術に覚えはない——ユタの記憶が不完全だからかもしれないが。

（待てよ。記憶、か）

うつぶせに倒れているサリナを見る。光に包まれているその身体を。

二回だ。僕は考えた。この状況を打ち破るには、二回彼女に謝らなければならない。

「ごめん！」

一回目の謝罪と同時に、僕は再び白炎を放った。

「なにっ？」

予想外の行動だったのだろう。霊人族が驚きと、苦痛の声を上げる。なに、手加減はしてあるさ。ちょっと痛いくらいにしか感じないはずだ。

そしてその苦痛は、当然ながらサリナにも伝播していた。彼女もうめき声を再度あげる。

しかし、これで霊人族の動きはひるんだ。僕は当初の目的——ダッシュでサリナの側へと近づいた。スライディングの要領でしゃがみ込み、彼女の身体を素早く抱きかかえる。

（サリナ、本当にごめん……）

二回目の謝罪は、胸の中でした。口に出す暇はなかった。事態は一刻を争うのだし、口は使えなくなるからである。

つまり、僕はサリナの瑞々しい唇に、自分の口を寄せて——

そして、後ろから衝撃をくらって転んだ。振り返ると、霊人族が右手を掲げて立っていた。恐らくその手のひらから、衝撃波を放ったのだろう。

霊人族にはそういう能力がある。僕はそれを「今」思い出した。

「やれやれ、間に合ったみたいだな」

立ち上がり、不敵な笑みを浮かべてみせる僕。その態度にすべてを察したか、霊人族は焦りに上擦った声を出した。

「貴様、まさか……記憶をっ？」

「半分くらいだけだね。何とか欲しい情報は手に入れた」

そう言って、右手を掲げる。再び集まる白い炎。だが、今度はぶつけるための塊ではない。そんな初歩級の術は、今の僕には使うのも恥ずかしかった。

炎は細長い棒状の姿を形成し、僕の手の中で一振りの剣と化した。束と刀身の区別もない、光の剣である。

「それは……！」

「『白獄刃』と言うらしいね。『全てを断ち切る』魔界の上級炎術」

そして、僕は無造作に霊人族に近づいた。相手はおびえたように衝撃波を放ってきたけど、軽く右手を振るだけで解決する。白獄刃は、空気の波ですら切り裂くのだ。

「ひ、ひいっ？」

そして、何よりこれの恐ろしいところは——僕は恐怖で動けない霊人族に、無慈悲の刃を浴びせた。もちろん無言だ。こいつにかけてやる言葉など、ありもしない。

「ぐあああああっ？」

断末魔が広がり、霊人族は消滅した。本来ならこのダメージは、サリナにも届くはずだったが、それもなかった。

白獄刃は、霊人族とサリナの接続すら、断ち切ったのである。

「はあ、これが本当のユタの力……なのか」

僕は当惑と、陶酔と、その他色々な感情が混じった声でつぶやいた。総評で言えば、なぜだろう、あまり悪い気はしなかった。やはり男は、強い力に憧れるものなのである。

しばらくすると、サリナのまぶたがぴくぴくと動いた。ゆっくりと目を開く。

「あ、れ……？」

「やあ、サリナ。目は覚めた？」

「ユタ様……私」

そして。いきなり、がばっ、と身体を起こすと、彼女は僕の前で深々と土下座した。

「す、すみませんでした、ユタ様！ 煮るなり焼くなり好きにしてください！」

「え、えっ？」

「私が、私がいけなかったんです！ あんな奴に人質にされて……しかも、ユタ様を襲うなんて！ 本当にごめんなさい！」

「ちょ、ちょっと落ち着いてよ。サリナは取り憑かれただけなんだから、気にしなくていいよ。サリナを操った、あいつが悪い」

「でも……」

なおも謝ろうとするサリナの手を取って、僕は「いいから」と立ち上がらせた。こうも罪悪感に苛まれていては、サリナを助けた甲斐がない。

本当は、一つ確認したいことがあったんだけど。僕に対して放ったあの言葉。

『私は、ユタ様のことが好きなもの！ 従者でなく、一人の女の子として！』

あれが本心なのか、それとも霊人族が彼女を操って無理矢理言わせたものか知りたい。けど、それを今尋ねるのは、サリナに罪の意識を追加するみたいで、抵抗があった。

それに、男である以上、やっぱり告白するなら自分からしないといけないって思うし。その度胸が出来るまで、このことはうやむやにしておこう。

——しかし、もしあれが本心だと、サリナって思い詰めると結構怖い行動に出るタイプなのでは。そういえば、最初に正体を現した時も、短剣持って僕を追い回していたっけ。

「……？ どうしたんですか、ユタ様。急に顔が青ざめてますけど」

「あ、ああ。何でもないない」

慌てて両手を振る僕の顔を、サリナはなおも不思議そうに見ていたが、やがて思い出したように声を上げた。

「そういえば、ユタ様。記憶を戻さないといけないですよ」

「あ、うん。でも、サリナとキスするわけには……」

実は半分くらい戻してもらってるけど。でも、情報量が足りないのは確かだ。

サリナは顔をうつむかせて、何やらもじもじしていたが、ふと僕の顔を見て言った。

「いいですよ」

「え？」

「その、キス……さっきはちょっと取り乱しましたけど、今なら大丈夫ですから」

「サリナ……」

サリナの気持ちがどこにあるのかはわからない。しかし、今の彼女は確かに僕のことを思ってくれていて、それがわかったから僕は感動せざるを得なかった。

彼女の肩に手を置くと、できるだけ穏やかな声を出す。

「わかった、それじゃ……行くよ」

「あ、でもその前に」

不意にサリナが制止をかけ、上目遣いに尋ねる。

「あの、一つ確認しておきたいんです。ユタ様はこれ、人工呼吸みたいなものだと言いましたよね？」

「え？ うん」

「それは、今でも本当にそう思ってるのですか？」

「……それは」

すぐには答えられなかった。サリナの質問の意図がわからなかったし、わかったところでそれが僕の気持ちの告白につながることに代わりないからだ。心の準備が足りない。

さっき「いつか頑張ろう」と決意したところなのに、今言えるはずがなかった。

ふと、サリナが寂しそうな笑みを浮かぶ。

「やっぱり、人工呼吸ですか」

「えっと、それは、その」

「まあ、どっちでもいいです」

いきなり、あっけらかんとなった。

僕は二重に驚いた。彼女の声の調子が変わったのと、自分の首に、細くて白い腕が巻き付けられたのと。

サリナの唇が触れる寸前、こんな声が聞こえた気がした。

「私は、人工呼吸と思わないことにします」

その意味を問いただすことはできなかった。口は塞がっている。

僕はサリナの肩に、自分の手を回した。何となく、抵抗されることはないと感じた。

予想通り、彼女は一瞬身体をこわばらせたものの、すぐに力を抜いて受け入れてくれた。

一体、どれくらい時間が経ったのだろう。ひょっとしたら、そんなに長い間ではなかったのかもしれない。ともあれ、僕らは名残惜しそうに、その身体を離れた。

「ユタ様……」

サリナが僕の顔を見上げる。上気し、頬にバラ色を浮かべたまま。

僕は彼女を見つめ返ししながら次の言葉を待ったが、それは予想外のものとなった。

「記憶は戻りましたか？」

「あ」

そういえば、そのためにキスしたんだっけ。危うく忘れるところだった。

と、その時。僕の頭の中にすさまじい勢いで、情報が流れ込んできた。見たことはないが、走馬燈というのはこういうものなのだろう。別に死にかかっているわけじゃないけど。

それはものすごい勢いで、僕の中を駆けめぐり——そしてすぐに止んだ。

次の瞬間、僕はユタの記憶をほとんど取り戻していた。

「おー、凄い。こんなにも、色々なことを忘れてたんだ」

感心して声を出す僕に、サリナが微笑みながら言った。

「どうですか、何か思い出せました？」

「ユタについて色々わかったよ。けど、にわかには自分のこととは思えないな」

例えば、ユタの一人称は「俺」だった。でも、僕はいきなりそれを使おうとは思わない。しっくりこないからだ。

後、結構乱暴な性格だったらしく、魔界に住む鹿のような動物を、術で片っ端からハンティングしている光景が浮かんだ。本当にやんちゃな王子だったんだな。

しかし、サリナが前に言っていた通り、優しいところもあったようで。王城で老いた使用人の代わりに重い荷物を持ってやったりしている。僕は少し安心した。ただ、その使用人がかなり恐縮しても、知ったこっちゃないとばかりに無視していたけど。

何はともあれ、サリナの記憶によるユタの全貌は見えてきた。後は、この記憶に触発されて、さらに自分自身の記憶が抽出されることを祈るだけだ。

「さてと。とりあえず王城に向かうとしようか。これで親父にも顔を合わせられるし、今のよう
に刺客に狙われることもなくなるだろ」

「ええ、そうですね。でも、その前に小屋に戻って、シヴィル様にお礼を言わなければ」

「いや、わしならここにいるんだが」

横手からいきなり声がして、僕とサリナは飛び上がった。見れば小屋にいたはずのシヴィルが、無愛想な顔で立っている。

「え、シヴィルさん？ どうしてここにっ？」

「ご挨拶だな。お前さんらが心配になったから、様子を見に来たのだ。そうしたら……くくく、くくく、見たぞ」

急に顔をニヤニヤさせて、腕を宙で交差させた。何かを彷彿させるジェスチャー。

「こう、ぶちゅーっと……情熱的な光景だったな」

「み、見てたんですかっ！」

サリナの悲鳴が上がる。僕も顔が熱を帯びるのを、止めることができなかった。恐らく赤いだろう。

「ちょっと、覗きなんて、趣味が悪いですよ」

照れ隠しに、ぶつぶつ、とぼやくと、ふとシヴィルは真面目な顔で言った。

「いや、趣味が悪いのはお前さんらだろう」

「は？」

「わしは言ったはずだ。ユタ王子が口でサリナに触れる必要がある、と。つまりだな」

そして彼は、右手を挙げて、甲を前に向けてみせると、

「サリナまで口を使う必要はないのだ。手にキスとかで良かったんだよ」

「「あ、あああああっ？」」

僕とサリナは声をそろえて叫ぶと、思わず顔を見合わせた。ものすごく気まずい。頬がますます赤くなっていくのがわかる。

「はっはっはっ、ちょっと考えればわかることだろうに。本当に若さは罪だな！」

シヴィルの笑い声が高らかに流れたが、羞恥に囚われた僕達はずっと硬直し、もはや彼のを聞ける状態ではなかった。

それからしばらくの間。僕とサリナが、互いの顔を見ることすらできなかったのは、言うまでもない。

王子と私とご主人様 広野未沙

あらすじ

○あらすじ

ひょんなことからレーアの前に現れた自称魔界の王子ルネ。彼が現れてからご主人様のイストと共に魔界がらみの事件に巻き込まれることが多くなってしまった。レーアと同僚セルヤの夢に巣くった魔物を倒すため、夢の中で入ったレーア。その魔物退治中、レーアは自分と相性のいい魔物がルネだと知ってしまう。

○登場人物

レーア・ブランデル

一七歳。フォルセル家の使用人。魔法の素質がある。

ルネフォールト＝ベルテルデ・アンテロイネン

通称ルネ。空から降ってきた少年。自称魔界の王子。現在は隣のキプルソフ家に居候中。

イスト・フォルセル

レーアが仕えるフォルセル家の長男。穏やかで誰にでも優しい。

第四話 キスは絶対守りきる

眠る前のひととき。それは、仕事から解放された使用人たち、ほんの少しの安らぎの時間だ。

「そういえば、レーア。最近、魔法の練習はやめたの？」

ふと思い出したようにルームメートのセルヤが尋ねてきた。レーアの働くフォルセル家では使用人は二人部屋をあてがわれる。レーアのような下っ端使用人は、多人数の大部屋に詰め込む家も多い中、恵まれた環境だと思う。

眠る前に髪をとかしていたレーアは、その手を休めて振り返った。

「……まあ、ね」

曖昧な笑みを浮かべながら、答える。

寝る前の魔法の練習は、レーアのそれこそ日課だった。よほどの事情があるときを除いて、毎日行っていたといってもいい。ほんの十日ほど前までは。

とある理由から、レーアは魔法の練習をやめた。

「そう。まあ、その分ぐっすり眠れるなら、私はそっちの方がいいと思うけどね」

セルヤは理由までは追及せずに、さっさと毛布に潜り込む。魔法の練習による万年寝不足状態だったレーアは、何度かセルヤによく眠った方がいい、と諭されたことがあった。

「おやすみ。レーア。ランプ消すの、忘れないでね」

「うん。おやすみ」

レーアは、再び髪をとかし始める。はあ、とため息がこぼれた。

レーア・ブランデル。十七歳。職業、フォルセル家の使用人。フォルセル家の方は皆優しいし、衣食住の待遇もいいので、仕事にこれといった不満もない。

容姿も身長も体重も人並み。月光の色とよく評される淡い金髪も、レーアの住むトルメントゥム王国にはよくある色だ。青い瞳も同じ。特に秀でている能力もなく、使用人としての働きは「普通」。大きな失敗もしなければ、目の覚めるような働きもない。

そんな平凡を絵に描いたようなレーアだが、一つだけ、特別なことがある。

レーアには、魔法の素質があるのだ。

人間界の隣に位置するという魔界には、強力な力を持つ魔物が住んでいる。魔法は、その魔物に呼びかけ力を借りることで発動する。だが、誰もが魔物に呼びかけることができるわけではない。それには、生まれ持った素質というものが必要なのだ。

レーアの住むトルメントゥム王国では、魔法使いの地位が高く、魔法に憧れる人間も多い。レーアもその一人だった。

魔法の素質があるのだから、自分もきっと魔法を使えるはず。

そう信じたレーアは毎晩のように、こっそりと屋敷を抜け出して、魔法の練習をしていたのだ。もっとも、一度も魔法が使えることはなかったのだけれど。

それでもレーアは諦めず、毎日練習を続けていた。

だが、最近、レーアが魔法を使えなかった理由が判明したのだ。

それはもう、レーアにとっては驚愕の事実としか言いようがなかった。

レーアに素質がなかったわけではなかった。

事実、魔物にレーアの声は、聞こえていたのだ。

単にその魔物が無視していただけで。

レーアは、明かりを消すと、自分もベッドに潜り込む。隣のベッドでは、すでにセルヤが寝息を立て始めていた。

レーアは、暗闇に慣れ始めた瞳で、ぼんやりと天井を眺める。

少し前までは、屋敷を抜け出して、裏庭で魔法の練習をしていた時間だ。

魔法を使うこと。それ自体がレーアの夢だった。

(ほんと、ひどい話よね)

まさか、自分と相性のいい魔物が、とても近くにいるとは思わなかった。あまつさえ、毎日、魔法の練習を見に来ていたなんて。

その名もルネ。本名、ルネフォールト＝ベルテルデ・アントロイネン。魔界の王子（らしい）。現在、フォルセル家の隣にあるキプルソフ家に居候中。

ルネは、どこからどう見ても普通の人間の姿をしている。魔界の王子だと言われても、強大な力を見せられるまでは、なかなか信じられなかったほどだ。

ましてや、自分と相性のいい魔物が、ルネだなんて思うはずがない。言葉は届いていたのに、魔物が無視していた。そんな可能性、誰が考えるだろう。

ルネは、努力を続けていれば魔法を使えるようにしてやる、とか言っていたけれど、そんな気分にはなれなかった。

人が一生懸命報われない努力をしているところを楽しんでいたのかと思うと、やはり良い気分ではない。

魔法の練習をやめたのだって、そうだ。

ルネとは、あれ以来、顔を合わせていない。ルネの方も、フォルセル家までやってきたりはしていなかった。

(考えるのはやめよう)

ルネはキプルソフ家の居候。レーアはフォルセル家の使用人。

根本的に立場が違う。接点だって、魔法さえ唱えなければ、ない。

レーアが憧れていたのは、魔法を使う行為であって、魔法使いではない。一度はルネの気まぐれで使うことが出来たのだ。もう、目的は果たした。だから、魔法のことは忘れよう。そうしよう。

「レーア。ちょうどよかった」

レーアが客室の掃除中、ひょっこりと顔を出したのは、フォルセル家の長男、イストだった。パブリックスクールを卒業したばかりのイストは、紡績会社の経営で家をあげがちな両親にかわり、フォルセル家を守っている。レーアのご主人様といってもいい存在だ。

「イスト様。どうかされたんですか？」

特に骨が折れるベッドメイキングが、ようやく終わって一息ついていたところだった。客人が来る予定がなくとも、ベッドはいつも清潔に保っておかねばならない。

「セルヤに聞いたら、ここにいるっていうから」

イストはゆったりと客室の椅子に座る。どこかに出かけていたのか、黒い上着とズボンは、よそ行きのものだ。

「ほら、最近、レーア、魔法の練習やめちゃったでしょう？」

レーアの魔法の練習を見に、いつもの時間に裏庭まで行ったけれどいなかったね。どうしたの？ イストからそう尋ねられたのは、レーアが魔法の練習をやめて、三日ほど経ったときのことだった。

事情があってやめたんです、とは言ったけれど、詳しい事情までは話していない。イストも、そうなんだ、と少し寂しそうに答えただけだった。

「あれは便利だったね。あの時間、裏庭にレーアがいるっていうのは確実なんだから、用事があるときは、そこにいけばよかったし」

そう言われると、申し訳ない気分になるが、もう魔法は使わないと決めたのだ。

それよりも、わざわざイストがやってきた理由の方が気になる。

レーアはご主人様に尋ねた。

「私に、何か用があるんでしょうか？」

「うん」

イストはうなずいた。

「今日はあるよ。用がなくても、レーアと話すのは面白いんだけどね」

「え？」

「えっと、用事だよね」

まるでさっきの言葉がレーアの空耳じゃないかと疑ってしまうほどに、イストはさらりと続ける。レーアも、特に追及する気にはなれなかった。

イストは、ほんの少し表情をかげらせる。どうしたのだろう。何となく不安になって、レーアはイストの顔を覗き込んだ。

「何か、あったんですか？」

「ルネの調子がどうもよくないみたいなんだ」

「ルネが、ですか？」

レーアは眉をひそめた。

「うん。数日前から、寝込んでいるんだって。隣のキプルソフ夫人がすごく心配していてね。」

僕も、夫人から聞いて、昨日、お見舞いに行ってきたんだ」

寝込んでいる。一体、どうしたのだろう。

レーアの記憶の中のルネは、いつも堂々としていて偉そうだった。体調を崩すとかそんな様子は、みじんも感じさせない。

第一、魔界の人間も、レーアたちのように病気などで体調を崩すことがあるのだろうか。それがまずわからない。

「それで、どうして私に？」

確かにレーアとルネの因縁は浅くない。イストと二人、ルネに助けられたこともある。

お見舞いにでも誘われるのだろうか。でも、それだったら、昨日、イストが見舞いに行く前に誘ってくるような気がする。

イストは顔を上げた。青い瞳がレーアをうつす。

「ルネ曰く、レーアの力が必要なんだって」

「私の力が、ですか？」

うん、とイストがうなづく。だが、イスト自身、よくわかっていないようだった。

「うん。僕も詳しい理由までは聞いていないんだけど」

「……」

「レーア。さすがに君だけがキプルソフ家を訪ねるわけにはいかないから、僕がついていくことになるけれど……来てくれる？」

レーアは迷った。正直、魔法の件で、ルネに対してはかなり腹が立っている。

けれど、ルネに助けられたことがあることも確かなのだ。

「レーア？ 仕事のことなら、僕から話を通しておくよ」

なかなか答えないレーアに、イストは仕事のことを気に掛かっていると勘違いしたようだ。

「いえ、そういうわけじゃないんですけど……」

レーアは首を振る。

ここでもし、レーアが断ったらどうなるだろうか。イストのことだ。怒ったり責めたりすることはないだろう。残念そうな顔をして、わかったよ、とレーアの意志を汲んでくれるに違いない。

レーアはそれでいいかもしれない。でも、そのあと、ルネに弁明するのはイストだ。

お世話になっているイストに、余計なことをさせるのは気が引ける。

レーアは決意した。

そう。ルネに頼まれたからじゃない。これはあくまでイストの顔を立てるためだ。

「わかりました。行きます」

従者でもない限り、使用人が他人の家を訪ねるということは滅多にない。当然、レーアがキプルソフ家に入るのも、今日が初めてだった。

フォルセル家の隣にあるキプルソフ家だが、両家の間を高い塀が隔てているため、全景を見る機会はほとんどなかった。フォルセル家より前に立っていたという建物は、茶色い外壁がやや色あせているものの、それがかえって風情になっている。建物の規模は、フォルセル家と同じくらいだろうか。

夫を亡くし、一人息子は仕事でほとんど家にいないような状態。広い屋敷に実質キプルソフ夫人は一人暮らしのような状態。そんなところに、ルネは「甥っ子」として転がり込んだのだ。

当然、二人の間に血縁などない。

「緊張しなくても大丈夫だよ。キプルソフ夫人は、優しい方だから」

体が硬くなっていたのだろうか。イストが微笑みかけてくれる。レーアはこくりとうなずいた。

使用人であるレーアは、あくまでイストの付き添いだ。キプルソフ夫人だってそう解釈するだろう。直接会話を交わすことがあるかも怪しいくらいだ。

それはわかっている、やはり緊張する。

キプルソフ夫人は、推定年齢六十歳ほどの上品な女性だった。ほぼ真っ白になった髪を、綺麗に結い上げている。落ち着いた深い茶色のドレスがよく似合っている。

「すみませんね。フォルセルさん。ルネのためにわざわざ今日も来てくださって」

「いいえ。気にしないでください。ルネとは年も近いですし、いい友人なんです」

イストは、卒がない受け答えを返す。キプルソフ夫人は、イストに好感を持っているらしい。レーアに向けられる視線が好意的だったのも、そのためだろう。

「ルネの様子はどうですか？」

イストの問いに、キプルソフ夫人の表情が曇る。それだけで、だいたいの様子は想像することが出来た。

「昨日とあまりかわりません。お医者様は、ただの疲労だろうっておっしゃっているのだけれど」

医者が魔界の人間の体調を判断できるのだろうか。レーアはそんなことを考える。もっとも、ルネの見た目は普通の人間と同じだ。どんな医者が、目の前の患者が魔界からきた存在だと考えるだろう。

ルネは、日当たりのいい二階の角部屋をあてがわれていた。

キプルソフ夫人に礼を言って、部屋の中に入る。

「ルネ。レーアを連れてきたよ」

ルネの部屋は、いたってシンプルなものだった。生活感というものがあまりない。カーテンもベッドも、そのほかの家具も、趣味の良いもので揃えられている。客間の一つをそのままルネにあてがったのだろう。

窓際に置かれた、三人は眠れそうなほど広いベッド。そこにルネは横たわっていた。

「本当か。イスト」

ルネの声は、レーアの知っているそれより力がない。本当に具合が悪いらしい。

ゆっくりとルネが起き上がる。黒い固そうな髪。やや幼さを残した綺麗な顔立ち。いつもより生気がないことが、彼をどこか妖しくみせていた。

レーアは自分の思考に驚いて、慌てて別のことを考える。

(寝間着も黒なんだ……)

服装の趣味は、徹底しているらしい。さすがにリネン類は白だったけれど。

「……レーア」

「ルネ」

ルネから魔法の「種明かし」を聞いて以来、顔を合わせるのは初めてだ。

「こっちに来てくれないか」

ルネの顔は真面目だ。レーアはちらりと隣のイストの顔を見る。イストは軽くうなずいた。ゆっくりと首を振って、レーアはルネの元へと歩いた。

「……」

言いたいことはたくさんあるはずなのに、なかなか言葉が出てくれない。相手が病人で、しかも思ったよりも症状が重そうだからだろうか。

「レーア」

ルネのややかすれた声。気のせいかな、声が熱っぽさを感じる。

黒い瞳がやや潤んでいるのは、体温が高いからだろうか。

「魔界の人間も、体調を悪くするんですね」

レーアの皮肉めいた言葉に、ルネの唇がかすかに笑みを形作る。

「……そうだな」

ルネの手が、レーアの腕に伸びる。

(え——?)

思いも寄らない力で、ルネの方に引き寄せられる。

レーアは軽くよろけ、ルネの方に倒れ込む。

ルネの顔が驚くほど近くにあって——。

「大丈夫？」

イストが逆方向から引っ張ってくれて、すんでの所でレーアは踏みとどまった。

「ありがとうございます」

レーアの心臓はドキドキしていた。

きっと、イストがいなかったら、そのまま、レーアはルネとキスしていただろう。それが純粋な事故なのか、故意的なものかはともかくとして。

「ルネ」

イストの声は、気のせいかいつもより低い。

「さっきのことは、どういうことかな」

「さっきのこと、というのは」

ルネはしれっとしている。

「レーアにキスしようとしたでしょう？」

(え?)

「ああ」

ルネはあっさり肯定した。レーアの心臓がどきり、と高鳴る。

魔界の人間とはいえ、男性にキスされそうになったのは、今回が初めてだ。

(どうして、ルネは私に……)

「俺の回復には、一番手っ取り早い方法だからな」

「へっ？」

レーアの口から、思わず変な声が出る。どこか甘い思いは、あっという間に霧散した。

ルネは、平然と続ける。

「今回の俺の体調不良の原因はわかっているんだ。魔界は魔力で満たされている。けれど、人間界は魔力が微々たるものだろう？ にもかかわらず、最近、大技をけっこう使ったからな。平たく言うと、魔力が足りなくなったんだ。魔界の生き物にとって、食料と同じくらい、魔力は必要な糧だ」

「それと、キスとどう関係があるんですか！」

レーアの抗議に力が入る。

「手っ取り早く魔力を補給する方法なんだよ」

「どう結びつくのか、全然わかりません！」

「まあまあレーア。落ち着いて」

イストになだめられて、レーアは振り上げかけた腕をおろした。

「でも、確かに僕も知りたいな。どうして、レーアにキスすると、ルネの魔力が回復するの？」

はあ、とルネがため息をついた。

「二人とも、魔法の原理は知ってるよな。魔界の生物に声をかけて、力を貸してもらおう、っていう。なら、考えたことはあるか？ どうして、魔界の生物は、人間に力を貸すのか。魔界の生物だって暇じゃない。メリットがあるからこそ、力を貸すんだ」

「……」

レーアは答えられなかった。魔法の本には、魔物が力を貸してくれる、とあっても、何かを引き替えにしている、というような記述は見当たらなかったように思える。

第一、差し出せる何かの想像がつかない。

「人間の生気を引き替えにしてるんだよ」

「生気？」

「ああ。人間の生きる源だ。もっとも、そんなに大量にもらっているわけじゃない。一回は微々たる量だ。でも、その微々たる量の生気が、魔物にとって、上質の魔力に変換することができる」

「つまり、人間の生気を魔力に変換すれば、ルネの体調は回復するという理解でいいのかな」

「そういうことだ」

イストの言葉に、ルネは大きくなずいた。

「それはわかったけれど……」

イストの声には、ため息が含まれている。

「どうして、レーアなの？ 人間なら、他にもたくさんいるでしょう？」

イストの質問はルネに向けられているけれど、レーアも、その答えを出せるような気がした。

「たとえば、キプルソフ夫人だって、ここで働く使用人だって人間だ。もちろん、僕だって」

「人間だったら誰だっていいわけじゃない。俺の場合は、レーアじゃないと駄目なんだ。俺にとって、相性のいい人間は、レーアだから」

（やっぱり）

予想通りの答えが、ルネの口から紡がれる。

「で、手っ取り早く生気をもらう方法は、口移しだ。わかったらろう？」

そう言って、ルネはベッドの上で胸を張る。

確かに事情はわかった。わかったけれど。

「レーア。……どうしてベッドから離れる」

レーアは身構えた。

「つまり、私がルネにキスをしなくちゃいけないってことですか？」

「ああ。理解が早いな」

「——嫌です」

レーアはきっぱりと言った。

レーアだって女の子。初めてのキスにはそれなりの憧れだってある。

それが、ただの魔界の人間の回復手段で奪われたらたまらない。

確かに弱っているルネはかわいそうだと思う。でも、それとこれとは、話が別だ。

予想もしなかった答えなのか、ルネが目を見詰めている。

「何故だ」

「他に方法はないんですか？」

本当に、さっきイストが助けてくれてよかった。そうでなければ、今頃、レーアの初めてのキ

スはあっさり奪われていただろう。体力回復なんていう理由の元に。

「何が不満なんだ？ 俺が、ずっと力を貸していなかったからか」

「それもありますけど、女の子にとって、キスは特別なものなんです！」

レーアは必死で主張をした。

「なんだそれ。何で、そんなものが特別なんだ」

危惧していた通り、ルネには、そういう概念がなかったらしい。

「それがわからない限り、絶対に嫌です」

「お前……」

ルネの顔は、いつもにまして白っぽい。具合が悪いのは本当なんだろう。

「他に、手段はないんですか。たとえば、私がここで魔法を唱える、とか」

「魔法でもらえる生气は微々たる量だ」

「微々たる量でも、ないよりマシじゃないですか」

「お前、ここで三日三晩魔法を唱え続けることができるのか？」

「……」

あえなく撃沈。さすがに三日も仕事を放棄するわけにはいかない。たとえ、イストが許してくれたとしても、レーアの体力が持つかどうか。

「だから、お前もおとなしく——」

ルネがベッドを出ようとする。

「本当にそれしか方法はないの？」

割り込んだのは、イストだった。腰を浮かせたルネは、とりあえずまたベッドへと沈み込む。

「イスト。お前、妙にレーアの肩を持つな」

挑戦的にイストを見上げるルネに、イストは苦笑する。

「ルネには理解しがたいみたいだけど、この年の人間の女の子にとって、キスは大切なものなんだよ。というか、君は、相性のいい人間が、たとえば僕だったとしても、キスをして体力回復を図ったわけ？」

「……」

ぐっとルネが言葉に詰まった。

(魔界にも男女の概念はあるのね)

レーアは安心する。もし、する、と力強く答えられたらどうしようかと思った。

「口移し以外にも方法があるんでしょう？ もちろん、三日三晩魔法を唱え続けるという非現実的な方法以外で」

「……ある」

ルネは苦々しげに答えた。

「だったら、それで回復をはかったらどうかな。それだったら、レーアだって協力してくれると思うよ。レーアだって、ルネの回復を祈っていないわけじゃないよね？」

「は、はい」

レーアは答えた。

ルネに対してひっかかるころはあるけれど、だからといって、ルネがこのまま衰弱してほし

いわけじゃない。

「……口移しが一瞬で楽なんだがなあ」

どうやら、ルネは諦めきれていないようで、ぶつぶつと呟いている。ぱっと思いついたように手を叩いた。レーアを見て、にっと笑う。

「じゃあ、レーア。こうしないか。俺とお前が勝負して、俺が勝ったら、おとなしく口移しをする」

「勝負、ですか？」

レーアは警戒した。ルネの言うことは、ろくな事がない。

きっと、レーアが圧倒的に不利で、負ける確率九十九パーセント以上な提案をしてくるにきまっている。

「おことわ……」

「いいんじゃない？」

「イスト様？」

言葉を遮られて、思わずレーアはイストの顔を見た。イストなら助け船を出してくれると信じていたのに。

「ルネがそれで諦めてくれるんなら」

「ですが……」

正直、ルネと勝負して勝てる気がしない。レーアは平凡な女の子だ。武器になり得る魔法だって、ルネの力を借りなければ発動しない。

イストがレーアに微笑みかける。まるで、大丈夫、といっているように思えて、レーアは口をつぐむ。

イストはルネに向き直る。何か、イストには策があるのだろうか。

「ただ、勝負の相手は、レーアじゃなくて僕」

思いがけないイストの言葉に、レーアは目を丸くする。

「ほら、前に勝負しようって話があったけど、魔物のせいで話がうやむやになったことがあったよね？」

「確かに、そんなことがあったな」

ルネの瞳が鋭く光った、ような気がした。

「それで、何で勝負をするんだ？」

「そうだね。前は、ルネが決めたから、今回は、勝負の内容を決めるのは僕でいいかな」

好戦的なルネに比べ、イストの口調は、どこまでも穏やかだ。

レーアとしては、イストを信じるしかない。

一体、イストは何をしようというのだろうか。イストがルネに勝てそうなもの。一体、何があるのだろうか。

「別にかまわないぞ」

ルネが言う。その言葉は自信に満ちていた。どんな勝負でも勝つ自信があるのだろうか。

「じゃあ、ちょっと準備をするから、待っていて」

部屋を出て行こうとするイストに、レーアは慌てて声をかける。レーアは、フォルセル家の使

用人。主人を動かしてはいけない。

「イスト様。準備なら私がします」

イストが足を止める。

「あ。そうだね。僕が準備をするよりも、レーアにしてもらった方がいいかな。レーア。悪いけれどトランプを借りてきてくれない？ なかったら、僕の部屋にあるから」

「かしこまりました！」

レーアは頭を下げると、ルネの部屋を飛び出した。

(……トランプ?)

どうやら、カードゲームをするつもりらしい。

幸いなことに、トランプはすぐに借りることができた。キプルソフ家の使用人も、ルネとイストがゲームに興じると考えたらしく、特に使い道を追及されることもなかった。

レーアがルネの部屋を開けると、イストとルネが話をしていた。いつの間にか、木製のテーブルがベッドの側まで運ばれている。ルネはベッドに腰をかけ、イストとテーブルを挟んで向かい合っていた。一見和やかに見えるものの、勝負を控えているせいか、そこに漂う雰囲気は、どこか緊迫しているように感じられる。

「イスト様。借りて参りました」

レーアはイストにトランプを渡す。裏面の模様は赤と白の幾何学模様。

「ありがとう。レーア」

レーアは会釈をすると、一步下がった。イストは、トランプをテーブルの上に広げる。見事な手さばきで、カードが扇形に広がった。

「これで何をやるつもりなんだ？」

どうやら、レーアが不在の間、勝負について説明していたわけではないらしい。怪訝そうに尋ねるルネに、イストは口元に笑みを浮かべる。

「簡単なゲームだよ。パブリックスクールに通っていた頃、学友たちとよくやっていたゲームがあっただけね。ブラックジャックというんだけど。大丈夫。ルールは簡単だから」

男性使用人たちがたまにトランプで盛り上がっているのを見たことがあるけれど、レーア自身はあまりやったことがない。レーアでも理解できるだろうか？ レーアもイストの説明に耳を傾ける。

イストはカードを一枚めくる。中央にハートが一個だけ書いてある札だった。

「トランプについては、さっき説明したよね。ルールは単純。手札の合計を二十一に近くすればいいんだ。基本はカードに書いてある数字だけれど、絵札は一律十。エースだけは特別で、十一と解釈してもいいし、一と解釈してもいい。何枚引いてもいいけれど、ただ二十二以上になってしまったら、その時点で負け」

「手札はお前が配るのか？」

「そうしようと思ってる。つまり、僕がディーラーだね。だから、僕は、手札の合計が十七を越えたら、僕の意志に関係なく、そこで自動的にストップしなくちゃならない。どう？」

ルネはしばらく黙り込んでいたが、やがて口を開いた。

「いいだろう」

きっとルネなりに勝算があると見込んだのだろう。

「じゃあ、決定だね」

にっこりとイストが微笑んだ。イストは机の上に広げたトランプを一つの山にする。そしてカードのシャッフルを始めた。一連の動作は流れるような手つきで行われ、随分慣れていることを思わせる。学生時代よくやっていた、という言葉に嘘はないらしい。

ルネに表向きにカードが二枚配られる。

ハートの四とクラブの六。合計十。

「けっこういい数字だね」

一方、イストの方にある二枚のカードは、両方ふせられていた。

「お前のカードはめくらないのか？」

「僕はディーラーだから。一枚だけめくるよ」

イストがカードを一枚めくる。出てきたのは、スペードの十だった。

「これを見て、ルネはどうするか決めてくれるかな」

イストとルネ。二人の視線がかち合う。束の間、火花が散った、ように思えた。

「……」

ルネは真剣に自分の手札を眺めている。イストはどこか涼しい顔だ。

「二十一を越えない限りは、何度でも札を引くことができるよ。どうする？」

「今、考えている！」

挑発的なイストの言葉に、ルネは怒鳴ると、またカードに視線を落とす。

レーアははらはらしながら二人の勝負を見つめていた。

随分ルネに有利な勝負のように思える。イストには考える権利はないのだから。

(大丈夫かな。イスト様)

イストを信じたい。なにせ、レーアのファーストキスがかかっているのだ。

たぶん、当事者の二人よりドキドキしているだろう。いつの間にか、手に汗握っている。

「引くことにする」

「じゃあ、上から一枚、どうぞ」

「……」

ルネはイストの言葉通り、カードの上から一枚札をひいた。

難しい顔をしていたルネだが、引いたカードを見て、表情が明るくなる。

(いいカードをひいたんだ)

慌ててレーアはイストに視線を走らせるが、イストは普段の表情を崩さない。そこには焦りも何もなかった。

この勝負を提案したのはイストだ。最初から自分が不利の勝負をしかけるはずがない。そう信じたい。

けれど。

ルネが引いたカードをテーブルの上に置く。その動作は自信に満ちあふれていた。

出てきた札は、ハートのクイーン。合計二十。

かなり、いい数字だ。

「この三枚でいい」

ルネの宣言は力強い。

「わかったよ。じゃあ、僕は、ホールカードをオープンするね」

これが七以上だったら、イストのターンは自動的に終わりだ。

イストがカードをめくる。現れたのは、ハートの六。

合計、十六。首の皮一枚でつながっているような感じだろうか。

「十六、か。十七には足りないから、もう一枚、引かないといけないね」

(もしかして、これって圧倒的に不利なんじゃ)

ルネの数字は二十。つまり、五を引くしかイストが勝つ道はないのだ。

大丈夫なのだろうか。ファーストキス云々などと意地を張っている場合ではないのかもしれない。

イストが勝負を引き受けてくれた。それだけで十分だと思わないと。

レーアは覚悟を決めた。

「あとにも先にも、これで勝負は決まるよ」

イストは宣言というにはいつも通りすぎる口調で言うと、トランプに手をかけた。

後にも先にも、これで勝負は決まる。

(どうか、イスト様が勝ちますように！)

負けても決してイストを恨んだりはしないけれど。でも。

イストがトランプをめくる。

「スペードの四。引き分けだね」

イストの声が、ルネの部屋に響いた。

ふう、とレーアは安堵に包まれた息を吐き出す。

「勝ったと思ったんだがな」

ルネは悔しそうだ。人差し指を立てると、ぐっと突きだした。

「もう一回やるぞ！」

どうやらルネの闘争心に火をつけたらしい。

「僕はかまわないよ」

そう言って、イストはまた鮮やかにトランプをシャッフルする。ルネとイスト、それぞれにカードが配られた。

ルネの札の合計は、十二。

「じゃあ、僕の札をめくるよ」

イストが一枚めくる。現れたのは、ダイヤの五。

「じゃあ、ルネ。どうする？」

「引く」

ルネはトランプの山に手をかける。クラブの五。合計十七。

ルネはうなった。

確かに悩ましいところだ。

「引く！」

ルネは高らかに宣言すると、トランプを一枚めくる。

現れたのは――。

「バースト、だね」

ハートのキングだった。合計二十七で二十二を越えてしまっている。

「……」

ルネは黙り込んだまま、忌々しげに側に並ぶカードを見つめている。

「じゃあ、僕のカードをオープンしようか」

イストは、ゆっくりと伏せてあったカードを表に返した。

「クラブのジャック。……合計十五か」

十七より小さいので、イストは自動的にカードを引かなくてはならない。

(どうか、六以下が出ますように！)

レーアは祈った。とりあえず、バーストさえしなければ、どんな数値だってかまわない。とにかく、イストが勝ってくれば。

ルネはいつになく真剣な表情で、イストの手を見つめている。

「引くよ」

イストの手がトランプにかかる。

(神様、お願い！)

レーアは思わずぎゅっと目をつむった。両手を組み合わせて、神に祈る。

カードがめくられる音がする。薄目をあけたまま、なかなか怖くて直視できない。

「ダイヤの十」

イストの声が響いた。

——バースト。

レーアの祈りは届かなかっただらしい。引き分け。またやり直し。

ルネがほっと息を吐き出したのがわかった。

「じゃあ、次の——」

ルネの言葉をイストが遮る。

「僕の勝ち、だね」

イストにしては珍しく、どこか勝ち誇った口調。

(——え？)

レーアは思わずイストの顔を見る。

ルネもイストもバースト。二十二以上だったら、数値なんて関係ないはずだ。

驚いたのは、レーアだけではなかった。勝負の相手であるルネも思わずイストの方に身を乗り出している。勝負の当事者とあって、イストにくってかかる。

「どういうことだ？ 俺だってお前だって、バーストには変わらないだろう？」

「うん。そうだね。でも、言っていなかったっけ？」

急くようなルネの口調に比べて、イストの方は泰然としている。

「確かに数値の場合は引き分けなんだけれど、双方バーストの場合は、ディーラーの勝ちなんだよ。つまり、僕の勝ち」

「なんだって？ そんなことは聞いていないぞ」

「そうだったっけ？ でも、文句があるなら、自分で調べてみるといいよ。本当だから」

「……」

ルネは納得がいかないようだ。きつく唇をかみしめている。

「俺は納得しないぞ」

「しなくてもいいけれど、これがルールなんだから、仕方ないよ。それとも、魔界の王子ともあ

ろうものが、一度決まった勝負を翻すの？」

「……」

ルネは言葉に詰まった。

魔界の王子、という言葉がきいたらしい。

「わかった」

ルネは苦々しい声で告げる。

「じゃあ、どうすれば、ルネは回復するの？」

イストの問いかけに、ルネは深々と息を吐く。

「一晩、手を握ればいい」

「一晩？ 一晩まるまるずっとですか？」

思わず声を上げたのはレーアだった。キスなら一瞬。そうルネがこだわった理由がかすかに見えた気がした。

「ああ。そうだ。だから、嫌だったんだ」

「どうする？ レーア。キスなら一瞬らしいけど」

「手を握ります！」

レーアは即答した。一晩くらいなら、我慢できるだろう。

「了解。あとのことは僕にまかせて。レーア」

にっこりとイストが微笑む。レーアは思い切りよく頭を下げた。

「イスト様。ありがとうございます」

「いいんだよ。気にしないで。僕も、レーアのファーストキスを奪われるのは少ししゃくだったからね」

これはこれで照れる。レーアはそう思う。ベッドの側に用意した椅子に座り、レーアは、ルネの手を握っていた。魔界の人間も、基本はレーアたちと同じつくりをしているらしい。体温がある。ルネの手は温かった。

これで魔力が回復するというのは、なんだか不思議だ。本当なのか疑問だけれど、心なしか、ルネの顔色に徐々に赤みが差しているようにも思える。

イストも出来る限り遅くまで残ってくれていたものの、ついさっき屋敷へと帰ってしまった。それ以来、何となく沈黙が続いている。

「キプルソフ夫人から、レーアの滞在許可はとったから、心配しないで」

帰り際、そう言ってイストは微笑んだ。一体、どういう説明をしたのか、レーアには見当も付かない。明日迎えに来るから。そう言ってもいたけれど。

(この沈黙が痛いなあ)

レーアは、ルネの横顔見てため息をつきたい気分になった。

ベッドに座っているルネは、どこかつまらなそうな顔をしている。勝負に負けて機嫌が悪いのだろうか。それでも、イストがいたときには、会話に混じっていたのだ。

さっきから、二人の間に会話は無い。

今まで、二人きりになったことなど、何度だってあったのに。

「お前は、どうして魔法が使いたいんだ？」

「——え？」

急なルネからの問いに驚いて、レーアは顔を上げた。

「聞こえなかったか？」

「いえ。聞こえましたけど」

どうして魔法が使いたいのか。

「それは……」

即答できない自分がいた。

「俺は、人間にとって魔法は過ぎた力だと思う」

「……」

「人間界の魔法使いは、戦争にかり出されることが多いと聞いた」

味方の魔法使いの善し悪しで戦争の勝敗が決まる、と言われていたことはレーアも知っている。この国で魔法使いの地位が高いのは、昔、優れた戦績を挙げた魔法使いがいた名残らしい。

人間には魔法は過ぎた力。それがルネの信念で、だからこそ、ルネはレーアの呼びかけを無視していたのだろうか。

だったら……。

レーア自身、魔法が使えてどうこう、ということ考えたことはあまりない。フォルセル家の待遇は、使用人としては文句ない。今の境遇を変えようというハングリー精神があるわけでもない。ただ、憧れ。夢みたいなものだった。

「それに、強力な力を使えるのは俺たちの特権でいいと思うんだ」

「！」

人の悪い笑みをルネが浮かべる。

「手、離しますよ」

レーアは反撃を試みる。その途端、ぎゅう、と握られた手に力が込められた。

「離せるものなら離してみたらどうだ？」

病人のはずなのに、力は思いの外強い。徐々に回復しているのもあるのだろう。

ぶんぶん強く手を振ってみたが、ふりほどくことはできなかった。

「……」

どうやら、レーアはどうしてもルネにはかなわないようにできているらしい。

ひとしきり抵抗を試みて、荒い息を吐くレーアに、ルネがぽつりと呟いた。

「まあ、お前が本当に魔法を使いたい理由があるなら、力を貸してやることも考えるぞ」

「え？」

顔を上げる。その途端、ぎゅうっとさきほど以上の力で手を握られる。

「痛い痛い痛い。痛いですルネ！」

ルネの表情に反省はない。それどころか必死になって笑いをこらえているように見える。レーアは大きく息を吐き出した。

早く朝が来ないかなあ。レーアは強くそう思うのだった。

くるくる 水島朱音

あらすじ

○あらすじ

高校卒業後、地元で就職していた関千尋は、高校のとき同じ部活だった君島尚輝から徐々に連絡を受ける。彼曰く、卒業制作として書いていた未完成のはずのリレー小説が、何故か母校の図書室にあったのだという。その謎を解き明かすため、千尋たち図書部のメンバーは尚輝に呼び出された。

○登場人物

関千尋

美優の親友。現在は地元で働いている。

小山内美優

図書部の部員の一人だった少女。高校卒業を前にこの世を去った。

第五話 松永洸の話

決して多いとは言えない本数だが、この町にも一応バスは走っている。ただ、一本逃してしまうと次のバスが来るまでにかなり待たなければいけないのだが。

そして、バス停についてから財布を忘れたことに気付いた洸は、乗る予定だったバスを逃してしまった。その上、その次のバスが予定より遅れたため、だいぶ余裕を持って家を出たにも関わらず、待ち合わせ時間に間に合わないことが確定してしまった。

しかしそのおかげで、懐かしい顔と予定より早く鉢合わせることになったのだが。

「あんた、県外で一人暮らししてるんじゃないっけ？」

隣に座る千尋は、四年前と全く変わらぬ口調でそう尋ねてくる。

「昨日こっちに帰ってきたんだよ。で、実家に泊ってたから」

「ああ、なるほど」

確かに、今日の会合に合わせて帰省したのであれば、駅に向かうこのバスに乗っていることはありえない。だが、久しぶりに家族に顔を見せようとも思ったので、洸は昨日のうちに帰っていたのだった。

窓の外に流れる景色を見ながら、久々に見る故郷の街並みに目を細める。

「……もうすぐ、大学卒業だよな。こっち戻ってくるの？」

「いや、向こうで就職するよ」

「そっか。まあ、そうだろうね」

過去のことには触れまいとするかのように、当たり障りの無い話題が続いた。しばらくしてそれも途切れると、二人して黙って窓の外に目を向けた。

懐かしい景色。

あの頃と、何も変わらない。

夏が終わり、柔らかくなった日差しの変化を感じる暇もないまま、大気は一気に冷え込む。冬になれば学校でもストーブが出されるが、それにはまだ早過ぎる。

窓に張り付いてグラウンドを眺めている明日花は、すでにセーターを着ていた。

「なに見てるの？」

熱心にグラウンドに目を向ける彼女が気になり、声をかけてみる。

「なんで尚輝走ってんの？」

質問が返ってきたが、その言葉に彼女が尚輝を見ていたのだと理解する。席を立ち、明日花の隣に並んでグラウンドを見てみると、確かに尚輝がトラックを走っている。

「ああ、体育祭の部活対抗リレーでね。剣道部の走者が足りないから、助っ人頼まれたんだって」

「へえー」

「尚輝、運動できるからね」

「助っ人頼まれるくらいだもんねえ。応援しなきゃ」

トラックを駆ける尚輝を見て、明日花はにこにこ笑顔を浮かべた。

しばらくそのままいそうなので、洸は一人、席に戻った。尚輝からは事前に欠席の報告を受けているが、あとの二人からは何も聞いていないから来るはずだ。

広い机の上で、ノートを広げる。

(.....このペースなら、無事に完成しそうだな)

卒業制作、と題しているからには、何がなんでも卒業に間に合わせなければいけない。みんなの受験勉強との兼ね合いを危惧していたが、話は順調に進んでいた。

「今、洸の番？」

顔を上げると、明日花が窓の傍に立ったままこちらを見ていた。

「そう。この調子だと冬休み前には完成するかな？」

「意外と早く進んだねー。良かったあ」

「うん、ホントに良かった」

話の中では、ヒロインと引き離された主人公が、閉じ込められた喫茶店からの脱出を試みていた。

「.....明日花は、この話の結末、どうなると思う？」

何となく思ったことを尋ねてみた。明日花は、「んー.....」と考えるように小さく唸ってから、視線を再び外に向けた。

「やっぱり、ハッピーエンドは必須だと思うのっ」

「うん、そうだね」

せっかくみんなで完成させる本なのだ。部員全員が、同じことを思っているだろう。

「主人公とヒロインは、幸せにならなくちゃ」

窓の外を見て、明日花は目を細める。

その横顔に、

(ああ、恋する女の子だなあ)

と、思った。

意外に、と言われるのだけれど、洸はもともと人の感情の機微に敏感だ。

だから、尚輝が美優に惹かれているのにも割と早い段階で気がついたし、明日花の尚輝に対する想いに関しても、それは同じだった。

そう、別段変わったことではなかったのだ。以前から、そういう第六感のようなものが鋭かったというだけで。

それ故に。

洸は自分の気持ちになかなか気付けなかったのだ。

なんだか深刻な顔をしているな、と思ったのは、「聞きたいことがある」と明日花に話を持ちかけられた時だった。

いつも通りに振る舞おうとしているのだろうが、隠しきれていない部分がにじみ出ているのを感じる。

けれど明日花がその「聞きたいこと」を口にする前に、図書室に入ってきた人物によって話は遮られた。尚輝だった。

洸はいつも通りに挨拶を返したが、すぐに明日花が尚輝に対して何も言わないことに気がついた。それどころか、彼の方に視線を向けようとしめない。

(……これは、何かあったかな)

しかし、尚輝の方は普段と変わらない様子で明日花に声をかけている。単に喧嘩したとか、そういうわけではなさそうだ。

その後も部活が終わるまで、さり気なく二人に注意を払っていたけれど、明日花だけがどこことなくぎくしゃくしているのは変わらなかった。

「よろしくな、明日花」

尚輝が今日の報告書の担当である明日花にそう声をかけ、帰宅するために席を立つ。

「あ、僕はもう少し残るよ」

「お？ そうか？」

「うん。明日花が、休んでた間の課題、見てほしいらしいから」

咄嗟に、嘘をついた。

聞いてほしくないことなら踏み込むつもりはなかったけれど、彼女は洸に何かを言おうとしていた。そしてそれは、恐らく尚輝に対する妙な態度に関連していることなのだろう。

明日花は洸の発言に驚いたようだったが、尚輝はすぐに納得して、一人で図書室を去っていた。

「……何か、言いかけてたでしょ？」

そう尋ねると、斜め前の席に座っていた明日花は正面に移動してきた。そして言いにくそうに声をもごもごと潜ませ、確認のように洸に問いかけた。

「尚輝ってさ……美優のこと、好きなの？」

どういう経緯でそれを知ったのかはわからないけれど、

(ああ、知ってしまったのか)

と思った。だって、明日花は尚輝のことが好きだ。好きな人が、自分以外の誰かを好きだと知るの、辛いことだろう。

けれど、何故それを洸に尋ねるのだろう。単に、確認したかっただけなのだろうか。

そう思い首を傾げると、明日花は見覚えのある一冊のノートを取り出した。

「リレー小説？」

それは、部員たちが卒業制作として全員で書いている、リレー小説のノートだった。

明日花に見るように促され、一番新しいページをめくってみると、そこには。

「……これ……」

告白の言葉が、書かれていた。それは、尚輝の字だった。その上に綴られた小説が尚輝の番であることから。そして、ついこの間、洸が尚輝に告白を促したことから、それを書いたのは間違いなく彼なのだろう。

(まさか、リレー小説を告白に使うとは思わなかったなあ……)

でも、それなら明日花がこのノートを持っているのは、おかしい。なぜなら、尚輝の次にノートを見るのは、美優のはずだからだ。尚輝だって、もちろんそのつもりであれを書き込んだのだろう。

その疑問に対し、明日花は「古文のノートを借りようとして、たまたまりレー小説のノートを覗いてしまい、びっくりしてそのまま持ち出してしまった」と説明した。

それは、事実なのだろう。驚いて、思わずそのまま持ってきてしまったというのも、本当の話で。

けれど、もっと別の理由も、あるような気がした。

「びっくりした、だけ？」

案の定、そう尋ねると明日花は凶星をつかれたように、目を見開いた。

彼女は、その告白が美優に伝わらないことを望んでいるのだろう。明日花が尚輝が好きだということは考えれば、それは当然の気持ちのように思えた。

「……どうすれば、いいかなあ」

上半身を机の上に寝そべらせた明日花は、きっとそう尋ねながらも、どうするのが一番良いのか自分でちゃんとわかっている。それでも、否定してくれる言葉が欲しいのだろう。

美優が、あの告白を見なくて済む方法。それがあんなら、教えてほしいと思っているはずだ。

けれどあいにく、洸はそれには応えられなかった。美優に尚輝の告白を伝えない方法なら、いくらでもあった。だが、それでは尚輝の想いを踏みにじることになる。

明日花の気持ちだって、大事にしたい。

けれど、尚輝の背中を押したのは、洸だ。そして、尚輝はようやく勇気を出して美優に想いを告げようとしているのだ。それを、無下にはしたくない。

「……何も見なかった振りをして、美優に返すのが一番良いと思うよ」

だから洸は、一番無難な、一番正しいと思われる返答をした。

「ん……だよねえ」

明日花は、机に頬をくっつけたまま顔を上げない。泣いているのだろうか、と少し心配になった。

「……美優ってさあ、可愛いよね」

尚輝は美優のどこが好きなのか、という会話を交わした後に、明日花はぽつりとそんなことを言った。

「私もあんな風に、なりたかった、なあ……」

その声は、どこか自嘲気味だった。ともすれば、本当に泣いてしまいそうにも感じられた。

明日花の言う通り、美優は可愛い女の子だと思う。優しく素直で控えめで、まるで欠点など

ないような。

けれど洸は。

「……明日花も、可愛いよ」

洸は、明日花だってとても可愛い女の子だと、思うのだ。明るくて、表情がころころ変わって、誰とでもすぐに仲良くなれて。

美優とは違うけれど、明日花だってまた、女の子らしくて可愛い子だと、洸は思うのだ。

「ふふっ。……ありがとー」

けれど明日花はそれを、慰めるための方便だと受け取ったのだろう。

(……本心なのに)

今は何を言っても、明日花の耳には慰めとしか届かない気がした。だが、洸のその言葉で明日花が体を起こし、ようやく笑ってくれたので、それでもいいかなと思える。まだ、どこか力のない笑みだったが、目の端に涙の残滓が見られなかったことに安心した。

けれど、その後の明日花の発言によって、洸の心は途端に穏やかでいられなくなる。

「洸みたいな人、好きになれたら良かったな」

その言葉は、洸が明日花に言った「可愛い」とは違い、本心からのものではないとわかっている。

わかっているのに。いや、わかっているからこそ。

ちくちくと胸を刺す不快な痛み、洸は苦笑いを浮かべることしかできなかった。

まさか、こんな形で自覚することになるとは思わなかったのだ。自分でも。

(……いつからだったんだろう)

自分の気持ちが、一番わからない。人の気持ちは、見ていたらわかるのに。

洸はもともと人の感情の機微に敏感だ。明日花の尚輝に対する想いに関しても、割と早い段階で気づいていた。

だから、だからこそ自分の気持ちには気づけなかった。それを、いつもの第六感のようなものだと思っていたから。

洸が明日花の気持ちに気づいたのは、彼女をよく見ていたからだったのだ。

(うわぁ……)

なんだか、とてつもなく恥ずかしい気持ちになる。別に初恋というわけではないが。

しかし、自分の気持ちに気づいた時点で失恋確定とは。

(……まあ、僕は別に明日花と付き合いたいとかはないしね)

明日花が洸のことを好きになることはないだろうし、洸だって別にそれで構わないと思っている。

ただ、彼女がいつも通り元気でいてくれれば、それでいい。

それに、今は大事な時期だ。勉強以外のことに必死になって、受験に失敗するようなことがあってはならない。

だから、洸は自分の気持ちに気づいたところで、それを大したものとは思わないことにした。

(……でも、もしかしたら)

今になって思う。

明日花の気持ちを知っていながら、美優に告白するよう尚輝の背中を押したのは、もちろん彼の恋が上手く行ってほしいと思っていたからだけだ。

もしかしたら、心のどこかで明日花が尚輝を諦めることを願っていたからだろうか。

けれど、尚輝の告白は失敗に終わったようだった。駄目だった、と報告してきた彼に、洸は何も言えずに俯く。部活を休むという彼の申し出も、仕方がないと思った。

しばらくは、そっとしておくべきだ。

リレー小説のことは少し心配だったが、あれは基本的に各自が家で書くようにしているから、部活自体には顔を出さなくても進行に問題はないだろう。

(ただ、順番がなぁ……)

今の順番通りでは、尚輝が美優に回すことになる。大丈夫だろうか、とそこだけ懸念を抱いていた。

「うーん……最後をどう締めるかで迷うよね……」

「もう謎掛けの部分は解決したろ？」

「うん、主人公とヒロインももうくつついたしね。あと一つくらいエピソード入れて締めって感じだと思うんだけど……」

意外に、この締め部分の部分が難しい。リレー小説なら尚更である。

放課後の図書室、今はまだ部活の出席者は洸と尚輝の二人だけだ。明日花も来るはずだが、少し遅れているらしい。

「やっぱ、学校に戻ってくるのがいいかな。最初は学園ものとしてスタートしたわけだし」

「そうだね。えーと、今は千尋がノート持ってるのかな」

「そのはずだけど……あ」

会話の途中で、何かを思い出したように尚輝が小さく声を上げる。「何？」と尋ねると、彼は視線を逸らした。

「その、さ。ノートを回す順番なんだけど」

「うん」

ピン、と来た。洸が抱いていた懸念だ。

「今度から、千尋と順番変わってもらうことにしたから」

「……千尋と」

「ああ」

なるほど。

千尋と交替すれば、確かに尚輝が美優と接触することはなくなる。尚輝は何も言わなかったが、十中八九そういうことなのだろう。

手にしていたシャーペンをくるくると回す。洸が開いているのは、件のノートではなく英語の問題集である。

確かに、これで順番云々の問題は解決された。ように見える。

しかし、今の部内の雰囲気ははっきり言って、良いものではない。卒業まで、尚輝はずっと美優のことを避けるつもりなのだろうか。

一人で声には出さずに考え込んでいると、図書室の扉が開き、もう一人の出席者が姿を表した。

「ごめーん、友達と話してたら遅くなっちゃった」

申し訳なさそうに笑いながら、明日花はこちらの机に向かってくる。その姿を見て、思う。

(結果的に……これは、明日花の願った通りになったってことなのかな……)

彼女は、尚輝と美優が上手くいかない【いかに傍点】ことを望んでいた。だとしたら、これは明日花の望み通りの状況だ。

(……でも、それなら)

鞆を椅子に置きながら、尚輝と言葉を交わす明日花を見て思う。

全てが望み通りにいったのなら、どうして彼女は今、無理して笑っているように見えるのだろう。

答えは明白だ。

(明日花は、こんな風になることを望んでいたわけじゃなかった)

尚輝の告白が成功しないことを願っていたとしても、決して二人に険悪な雰囲気になってほしかったわけではないだろう。

卒業まで、変わることなく、みんな仲良く、楽しく。その思いは、全員同じだったはずなのに

。

どうして、すれ違ってしまったのだろう。

(.....雨、降りそうだなあ)

ぼんやりと薄く濁った空を見上げて思う。そろそろ雪が降ってもおかしくないが、天気予報ではまだそのようなことは告げられていない。

もうすぐ終業式だ。冬休みに入れば、今年の夏休み以上に部活に顔を出さなくなるだろう。年末年始に学校が閉まっているのもあるが、それよりも間近に迫った受験が大きかった。

(センター試験まで、あと一ヶ月もない)

流石に気が引き締まってくる。今も、進路相談室に行っていたところだ。

「洗くん」

窓の外を見上げていると、背後から名前を呼ばれた。振り向くと、美優が小さく走り寄ってくる。

「次の授業、先生いないから自習なんだって。聞いた？」

「え、そうなの？ 初耳」

「うん、私もいま職員室で聞いてきたばかり」

ああ、だからこんなところにいるのか、と納得した。進路相談室は、職員室のすぐ隣にある。

「だからね、一緒に受験勉強しない？ 洗くんに教えてほしいところあるんだ」

小首を傾げて尋ねる美優に、「いいよ」と頷く。

「でも、美優と僕の席離れてるよね。誰かに代わってもらわないと」

「あっ、ううん」

首を横に振る美優に、今度は洗が首を傾げた。

「どうせだから、図書室で勉強しない？」

そう言って、眉尻を少し下げて微笑んだ美優に、洗は理解した。

何か話があるのだろう。そしてその内容は、間違いなく部活に関することだ。

図書室には、以外にも洗と美優以外、誰も来なかった。普段から図書室を使う生徒はそう多くない。Aクラスの生徒は、みんな教室で大人しく受験勉強をしているようだ。

「ちょっとややこしく見えるけど、これはこっちの数式の応用なんだよね。何段階かに分けて書き出すとわかりやすいよ」

「えっと.....じゃあ、最初にここの部分の解を出して.....」

「そうそう」

人のいない図書室の中は、静かでもとても居心地が良かった。勉強にも集中できる。

「なんか、ごめんね。私、教えてもらってばっかで.....」

「ううん、僕も勉強になってるし。わからないことがあったら、答えられる範囲で答えるよ」

そう言うと、何故か美優は真顔になって俯いた。

何か変なことを言っただろうか、と疑問に思っていると、彼女は小さく口を開く。

「.....じゃあ、聞いてもいいかな」

「う、うん。何？」

美優は手にしていたシャーペンを置き、顔を上げてまっすぐにこちらを見据えてきた。

「尚輝くんがどうして私を避けてるのか、洸くんは知ってる？」

やはり尚輝のことか、と思ったが、直後に違和感が襲う。

あれ？

(今の美優の口振りは、『何も知らない』ような言い方ではなかったか)

まさか、と思う。当の本人が何も知らないはずはないだろう。それとも、本当に理由がわからない？ そんな馬鹿な。

(……『何も知らない』？)

もしかして。美優は、尚輝に告白されたことすら知らないのでは。

そう考えたのには、心当たりがあるからだ。

(明日花は、美優にノートを見せるのを嫌がっていた)

そこに、尚輝からの告白が書かれていたからだ。けれど、明日花はそれを洸に相談して、そして「何も見なかった振りをして返す」と決めたはずだ。

(……その、はずだ)

一つの可能性が、洸の頭に浮かび上がる。

美優が、あの告白を見ていなかったとしたら。

(……そうなるように仕組んだのは……)

一人しかいない。

洸の微妙な表情の変化を感じ取ったのだろう。美優が眉根を寄せた。

「……何か、知ってるんだね」

知っている。

けれど、本当に全てを話してしまっても、いいのだろうか。

(だって、そうしたら明日花が……)

そう、彼女のしたことも、バレることになる。美優だけでなく、尚輝にも。

もちろん、明日花の行為はいけないことだ。告白が伝わらなかったことを尚輝に教えれば、彼の誤解は解け、美優に対する態度も元通りになるだろう。

けれどその後、明日花が尚輝に責められるようなことが、ないと言えるだろうか？

「……知らない」

気がつけば、事実とは逆の言葉が口から出ていた。美優が、目を見開く。

何も知らないふりをしていれば、明日花は誰にも責められずに済むと思った。それが正しいことなのかどうかなんて、洸にだってわからなかった。

「……嘘」

美優が眉をしかめる。

「嘘だよ。洸くん、何か知ってる」

珍しく食い下がると思った。普段なら、人の言葉を端【ルビ：はな】から否定するようなことはしないのに。

表情に出たのがまずかった、と今更ながらに思うが、黙っていても肯定の意味にとられてし

もう。

「どうして、そう言い切れるの？」

「だって……」

顔に出ていたから、というだけではさすがに理由にならないとわかっているのだろう。今度は、美優が口をつぐむ番だった。

「とにかく、僕は何も知らないよ」

「……知っているも、話せないってことなんだね」

その通りだ、とは口に出せなかった。出せるわけがない。洗の無言の肯定を受け取り、美優は悲しげに俯いた。ツキン、と胸に痛みが走る。

この雰囲気では、もう勉強どころではない。洗は黙って手元の教材を片付け始めた。

「……誰も、何も教えてくれないの」

独り言のように、美優が呟く。その声に、思わず動かしていた手を止める。

「私……私が、何をしたのか……いけないところがあったなら、ちゃんと教えてほしいのに……」

「違う。美優は何も悪くない」

すぐに否定した。それは事実だったから。美優は何も悪くない。

しかし、そう言うと彼女は俯けていた顔を上げて、睨むようにキッとこちらを見た。その目には、涙が浮かんでいた。

「じゃあ、どうして何も言ってくれないの！」

彼女が声を荒げるのを、洗は初めて聞いた。いくら他に誰もいないとはいえ、ここが図書室であることにはかわりないのに。今の美優には、そんなことすら配慮する余裕がないということだろうか。

「美優、落ち着いて」

「私、なんでこんなことになったのか全然わからない！ 何も聞いてない！ みんな……みんな何か隠してる」

「美優……」

駄目だ。美優は今、感情が高ぶって冷静になれずにいる。

「洗くんだって、このままじゃいけないって思うでしょう？」

「それは……もちろん……」

「なのに、なんで黙ってるの！」

美優の言うことはもつともだ。もつともだが。

話して、全てが上手くいくなら、洗だってとっくにそうしている。だが、そうできないのには理由があるのだと、どうして美優はわかってくれないのか。

思わず、頭に血が上った。

「話せないことだってあるんだ！」

大きな声が出た。けれど美優はそれに全くひるむことなく、むしろ跳ね返すようにさらに声を荒げる。

「それは逃げてるってことじゃないの！ だから何も変わらないんだよ！」

「勝手なことを言わないでくれ！ 何も知らないくせに！」

「知らないよ！ わかるわけじゃない！」

冷静になれずに、堂々巡りの言い合いが続く。お互いが、あまりに自分本位な言い分を通そうとしている。

(落ち着け、落ち着け)

自分に言い聞かせるものの、一度爆発してしまった感情は、簡単にはおさまらなかった。普段、激情を表に出すことがない分、尚更だ。そしてそれは、美優も同じで。

気がついた時には、二人とも椅子から立ち上がり、言い合いに息を切らしていた。呼吸の音だけが室内に反響する。静寂が耳に痛い。

美優は机についた手のひらを、固く握りしめた。

「……洸くんは……何を守ろうとしているの……」

呟いた美優の声は、悲しげだった。

授業終了のチャイムはまだ鳴らない。しかし彼女は手早く教材を片付けると、図書室を出てしまった。

残された洸は、力なく椅子に座り直す。

(何を……)

守ろうとしているんだろう。美優の言葉が耳に残る。

明日花を？ 部活を？ 自分を？

(……わからない……)

少なくとも、美優ではなかった。洸は、彼女が苦しんでいるのを知っていながら、助けてやらなかった。どうすれば助けられるのかも、知っていたのに。

洸は明日花に、一番正しいと思われる返答をした。けれど、結果的に明日花はそれを受け入れなかった。

ならば、「一番正しい」と思われる行動をとらなかった明日花をかばった洸は、果たして本当に正しいことをしているのだろうか。

正しい、とは何か。

(……わからない……)

ただ、「間違った」ということしかわからない。

洸だけでない、きっとみんなが、どこかで何かを間違えていたんだ。

それが最後のチャンスだった、と洸が気付くのはもう少し後のことになる。

美優は、突然この世を去った。高校を卒業することもできず、卒業制作の完成も見届けられないまま。

洸は、千尋からかかってきた電話でそのことを知った。

葬儀では、友人を代表して誰か一人がスピーチをすることになった。最初は、彼女のクラスメイトであり、所属していた図書部の部長でもある洸が、その役を任された。

しかし、洸はそれを千尋に代わってもらった。彼女の方が、美優との縁が深いことを知っていたし、何より、その時の洸にはスピーチなどとてもできそうになかったからだ。

美優の葬儀の日、初雪が降った。

柔らかに微笑む美優の遺影を見ることができず、洸はずっと地面に目を向けていた。土の上に舞い降りた雪は、すぐに消えてしまう。

『どうして何も言ってくれないの』

美優は、彼女はきっと、洸が思っていた以上に寂しい思いをしていた。

今になって、あの時美優が叫ぶように叩きつけてきた言葉の数々を思い出し、後悔する。

『何を守ろうとしているの』

守れたはずだった。明日花も、部活も、自分も。そして、美優も。

彼女の言う通り、逃げているだけだったのだ。誰かが傷つくことが怖くて、何も見ないふりをしていた。けれど、傷つかなければ前に進めないことだって、あったのだ。あの時、すれ違ってしまった図書部の関係を修復するためには、きっとその傷が必要だった。

今更、そのことに気づいたところで、どうにもならない。今更、真実をみんなに話したところで、残酷なだけだ。

だからもう、黙っていようと思った。

尚輝は美優にふられたと思っている、明日花は尚輝の想いを伝えなかった、千尋はどちらも知らない、洸はどちらも知っている。

ならばもう、それぞれがそれぞれの真実を胸に秘めていれば、それでいい。

目を閉じると、図書部を成立させてからのことが、ゆっくりと頭の中を駆け巡る。ただひたすらに楽しかった日々。いつだって、あの図書室の中にはみんなの笑顔があった。

その日以来。

誰も、放課後の図書室を訪れなくなった。

「……リレー小説、さ」

ふと口を開くと、それまで無言で窓の外を見ていた千尋が、こちらを向いた。今日初めて、高校時代のことを話題に出した。

「あれ、あのまま続いてたら、最後どうなったかな」

四年前、似たような質問を明日花にもしたのを思い出す。

あの物語は最後、惜しいところで未完成のままに終わってしまったけれど。もしも事故が起らなければ、どうなっていただろう。

千尋は、再び窓の外に目を向けた。高い建物が増えてきた。もうすぐ駅に着く。

「……あたしさ」

てっきり答える気がないのかと思ったが、千尋はちゃんと返事をした。視線は相変わらず、流れる景色を見据えたままだったが。

「あの小説、実は完成してたんじゃないかって思うんだよね」

「……え？」

千尋は、考え込むように少し目を細める。四年前は全く化粧っ気のなかったその目元に、今はきっちりアイメイクが施されているのを見て、時の流れを感じるとともに言いようのない僅かな寂しさが胸をよぎる。

「あれさ……もうほとんど、完成に近かったじゃん」

「……うん」

「それで、最後に持ってたの、美優じゃん」

「うん」

なんとなく、千尋の言おうとしていることがわかってきた。

「……あの子さ、最後まで書き上げてたんじゃないかって」

確かに、その可能性はあり得る。順番として、洸は美優から受け取っていたから、最終的にノートが彼女に渡った時点でどこまで進んでいたかはわからないけれど。

洸が書いた時点で、あの話はかなりラストに近いところまでいっていたと思う。

だが。

「……仮にそうだとすると、あれが学校の図書室にあるのは……やっぱり、変だよ」

本の形として存在していることは、やはり不自然だ。

そう言うと、千尋は「うん、それはそう思う」と頷いた。ふと、すでに駅前の景色に変わっていることに気付く。もう到着だ。

待ち合わせの喫茶店は、バスの到着場所から徒歩で数十秒しかかからない。もうすぐ、四人揃う。

「……そろそろだね」

「うん」

隣に座る千尋から、微かに緊張が伝わってくる。

あれから、随分と時間が経ってしまったけれど。今度こそ、みんなと正面から向き合うから。
そのために、君がみんなを引きあわせてくれたんだろう？

美優。

審判部な面々 諸星崇

あらすじ

○あらすじ

日下部公平は、全国大会出場経験もある元エースピッチャー。しかし、肩の故障で野球をあきらめざるを得なくなった。進学先で公平は、「審判部」を率いる風間凜と出会う。あらゆる競技の審判を務める部活で、公平はスポーツをはじめ、さまざまな競技や種目に、審判として関わることとなった。

○登場人物

日下部公平（くさかべ こうへい）

審判部の部員。元野球少年で、スポーツ全般が得意。大好きな野球に、審判として関わる道を選ぶ。

風真凜（かざま りん）

審判部の部長。判断力に優れ、つねに威風堂々としている強気な女性。致命的な「ルール音痴」。

第4話 朴念仁のダイヤモンド

1 最年長者の目

東雲（しのめ）学園の昼休みは十二時半からの一時間である。

この間、学生は基本的に自由行動となる。昼食をとってもいいし、とらずに遊んでいてもいい。教室にいてもいいし、学生食堂やカフェテラスに行ってもいいし、中庭で寝転がっていてもいい。

学園の敷地から出ることは禁止されているが、近所のラーメン屋でこっそりランチタイムの特盛ギョーザ定食を平らげる生徒もいる。みんな、思い思いにつかの間の自由を満喫するわけだ。

ここ審判部の部室でも、平和な午後のひとときが流れていた。

「あー、食った食った」

男性用Lサイズの弁当箱を空っぽにして、公平（こうへい）はふくれた腹をさすった。

満足だ。成長期の少年の胃袋も充分満たされている。このときばかりは、勉強しろと口すっぱく言う母親にも、心から感謝できる。

「こら。行儀が悪いぞ、日下部（くさかべ）」

対面で、公平の半分くらいの大きさの弁当箱をつついていた少女がたしなめる。

まっすぐな黒髪に切れ長のきれいな瞳。ピンと伸びた背筋が、涼やかな表情を支えている。同じく昼食を食べ終えた彼女は、弁当箱をナプキンできれいに包み、きちんと手を合わせて食後の礼をした。

「審判たるもの、人からどう見られているか、つねに意識しなければいけない。威厳を損なうようなことはしてはならん」

「他に誰もいないんですから、いいじゃないですか」

「日頃から心がけるように。そう言っているのだ」

返事かわりに、公平は軽く頭をかいた。少女は「しかたのないやつだ」と、小さく苦笑する。さわやかな風のような、ふわりとした笑みだった。

審判部部长、風真凜（かざまりん）。どんなことにも判定を下すという風変わりな部活「審判部」を束ねる二年生だ。公平より一年先輩になる。ちなみに公平も審判部の部員で、彼女にはちょっと頭が上がらない。

説教じみたことを言っている凜だが、べつに口うるさい人物ではない。公平にとっては頼もしく、尊敬している先輩だ。審判という活動にも人一倍熱心で、公平もいろいろと教えられることは多い。

一方で、教えることも多い。しっかりしているように見える凜だが、ときどき、とんでもないところで抜けていることがあるのだ。

とはいえ、食事のマナーに関しては、完全に公平が教えられる側だ。へたにやぶを突いては、本格的に凜の説教が始まりかねない。

公平はそそくさと弁当箱をかたづけ、ペットボトルのお茶を飲もうとふたをひねった。

そのとき、部室の奥で爆音と煙が上がった。

「うお!？」

振動に背中を突き飛ばされ、身体がつんのめる。こぼれそうになったお茶を、あわてて口を押さえて止めた。

凜は動じた様子もなく、手早く部室の窓を開けて煙を外に追い出しにかかる。新鮮な風が立ち込める灰色をうすめ、その向こうにひょろっとした影を映し出した。

「こ、こんちはっす、研（けん）さん……」

「やあ」

ぬぼーとした声に、公平は思わず顔を引きつらせた。

ビン底メガネにすすけた白衣。髪はぼさぼさで腰も曲がっている。口の周りには無精ひげ。やせすぎの身体は針金というか、鶏がらのようだ。

街で出くわしたら通報されてもおかしくない、絵に描いたような不審人物がそこにいる。心なしか、背後に不気味なオーラすら見える気がした。

しかし、公平にはその人物に対して、一定の敬意を払う必要がある。土井垣研介（どいがきけんすけ）。これでも審判部の最年長者で、凜よりも先輩の三年生なのだ。

「お食事ですか、土井垣先輩」

「うん。一段落したからね。三日食べないとさすがに体温が下がってきたよ。あはは」

凜に答えて笑う研介の身体が、左右にゆらゆらと揺れる。ゆるんだ口元は、なかなかもとに戻らない。明らかに意識が身体から乖離している。

「公平くん、なんだか久しぶりだね。大きくなったねー」

「いや、変わってないっす」

本気かどうなのか、研介の言葉に、公平は手を横に振る。たしかに丸三日、研介とは顔を合わせていないが、それだけで見ちがえるほど大きくなるわけがない。

「ホントに三日間、こもりっきりだったんですか？」

「そうだよ。いやー、あんまり微生物の反応がおもしろいもんだから寝るのももったいなかったよ」

よく見ると、研介の目の下にはものすごい色のくまができていた。一日くらいの徹夜でできるものには見えない。食事同様、おそらく睡眠も三日間、とっていないのだろう。

審判部の部室の奥には、戸棚に囲まれた研介専用のスペースがある。顕微鏡やら試験管やら各種薬品のビンやらで埋め尽くされた、理科室顔負けの空間だ。

研介は三日前からここにこもり、なにやら実験をずっと続けていた。めずらしいことではない。公平もこれまで何度か、研介がここに入ったまま出てこないところを見ている。

科学系の知識にやたらと富んでいる研介は、このスペースで、趣味でいろいろ実験をしているのだ。

ちなみに公平は、物理の教科書も読んでいられないレベルなので、実際に研介が何をやっているのかは、よく知らない。部長の凜が黙認しているので、公平も口を出さないようにしているだ

けだ。

「研兄さん！」

と、そのとき、部室のドアが大きな音を立てて開いた。

「ああ、もう！　まただらしなかつこうで歩き回って！　今度は何したの！」

鈴の音のようなかるやかな声が反響し、小柄な少女が飛び込んでくる。紺色のセーラー服は、凜の着ている東雲学園高等部の制服とはデザインがちがう。中等部のものだ。

一声叫んでから、少女は室内に向けて勢いよく頭を下げた。

「こんにちは。凜先輩、日下部先輩！」

両耳の上でまとめられた二本の髪が、おじぎに合わせてぴょこんとはねる。なんとも愛嬌のある光景に、公平は頬をゆるませた。

「おっす、千鶴（ちづる）」

「ああ、こんにちは。今日もご苦労様だな、雨宮（あまみや）」

「ホントです。もう」

答えた少女、雨宮千鶴の頬がぷくっとふくれた。

彼女は東雲学園中等部の三年生だ。同じ学園ではあるが、審判部の部員ではない。が、彼女は何度となくこの部室に出入りしており、公平も凜もよく知っている仲だった。

その、千鶴を呼び寄せる理由である人物は、あいかわらずのびやかにかまえている。

「やあ、どうかしたのかい、千鶴くん？」

「どうかしたのじゃないでしょ。審判部の窓から煙が出てたもん。そんなことするの、研兄さんだけじゃない。まったく、三日も帰ってこなくて心配したんだからね」

ひょろりとした長身の研介と、中学三年生にしても小柄な千鶴とでは、頭二つほども背丈がちがう。

しかし、詰め寄る勢いもあって、迫力では千鶴のほうが完全に勝っていた。

「ここにいるって伝言、しといたはずだけどね」

弁解する研介に、千鶴の頬がさらにふくれる。

「だからって、帰ってこないこととはべつだもん。……さびしかったんだから」

すねた千鶴は、そのままぷいっと横を向いた。

公平はその横顔を、微笑ましく見つめる。千鶴と研介は家族ぐるみのつき合いで、千鶴が生まれたときから研介が兄がわりを務めていたそう。おかげで千鶴は、本当の妹であるかのように、研介によくなっている。

もっとも、研介がこんな性分なので、今では千鶴のほうがもっぱら研介のお世話役だ。だらしないう兄としっかり者の妹という構図がぴったりと当てはまる。

ただ、それを言ったら千鶴が不満そうな顔をするのも予想がつく。口ではやいのやいのと言っているが、千鶴が研介を兄以上の存在として慕っているのは、公平からすれば一目瞭然なのだ。

「ほ、ほら！　お弁当持ってきたから、食べよ。どうせ何も食べてなかったんでしょ。研兄さんの好きな玉子焼きもいっぱい作ってきたから」

ちらりとのぞいた本音をごまかすように、千鶴はぱたぱたと机の上をかたづけ始める。と、不意に研介がその手を取った。

突然のことに、千鶴が小さく飛び上がる。

「な、なに？ 研兄さん」

研介は視線を動かさない。いつもの眠そうな目ではなく、真剣な目つきでじっと一点を見つめる。

千鶴の顔が見る見るうちに紅潮していった。

「や、やだ、どうしちゃったの、いったい」

研介から千鶴に積極的な行動に出たことは一度もない。千鶴の再三のアタックにも、ずっと柳の枝のようにのりりくらしとしていたのだ。

それが急に、どうしたのか。公平も凜も、研介のまとう真剣な空気に押されて言葉を失う。

まばたきもしないまま、研介はおごそかに口を開いた。

「——それ、公平くんのお茶かい？」

出てきたのは、誰も予想だにしない言葉だった。

奇妙な沈黙が室内を満たす。研介の視線の先には、公平が持参したお茶のペットボトルがあった。千鶴の手は、その研介の視線に重なりかけたところで、ちょうど止まっている。

「は、はい。そうですけど」

とまどいつつ、公平は答える。千鶴はぼかんと口を開けた後、真っ赤な顔でふるふるふるえ出した。気づいていない研介は、公平のほうにずいっと顔を近づける。

「一口いただいでいいかな」

「どうぞ」

爆発寸前の千鶴の顔色をうがかいながら、公平はお茶を差し出した。研介はそれを一口ふくんで、口の中で何度も転がす。

「んー……」

天井を見上げ、研介はなにごとかを考え込む。千鶴が手を振り払ったが、反応を示さない。朴念仁を指さして涙目で訴えかける千鶴を、公平と凜は必死になってなだめるはめになった。

ひとしきりお茶を味わって満足したのか、研介は奥の流し台に行って、口の中身を吐き出した。公平のほうを振り返ると、いつもの緊張感のない声で言う。

「公平くん。保健室で胃腸薬をもらっておくといいよ。それと明日、ちょっといやなことになると思うけど、運が悪かったと思いなさい」

「は？」

言っている意味がわからず、公平の頭に疑問符が浮かぶ。が、問いただす前に不機嫌を極めた恋する乙女の声が割って入った。

「お話、終わった!? ちょうどいいじゃない。まずはきちんと手を洗って！ ……水で流すだけじゃなくて石鹼も使うの！」

「知ってるかい、千鶴くん？ 手には人間の身体を維持する役割を持つ常在菌がいてね。洗剤はそれを次々に殺してしまうんだよ。ほら、こうすると何億もの常在菌の悲鳴が」

「残った変な菌に殺されるよりマシでしょ！ へりくつ言わないの！」

頭から湯気でも出そうな勢いで千鶴が言い募る。とても公平が口をはさめるすきはない。研介が弁当をつまむ間も、千鶴のお説教はとぎれることがなかった。

結局、公平はその日、研介の言葉の真意をたしかめる機会を失ってしまった。

2 頼りなきエキスパート

翌日、公平の腹はみごとに下った。

部室のテレビからは見覚えのあるお茶のペットボトルと、そこに不純物がまぎれ込んで回収さわぎになっているとのニュースの映像が流れている。

「さすがは土井垣先輩だな。あれだけで見抜いてしまうとは」

食後のお茶をすすりながら、凜が感心したように言う。彼女はいつも、茶葉を用意して自分で淹れる。ペットボトルのお茶はあまり好みではないらしい。

対する公平は、ぐったりしたままうめいた。

「のんきに感心しないでくださいよ……」

下腹に力が入らなくて、弱々しい声しか出ない。凜は公平のぶんもお茶を淹れてくれたが、丁重に辞退した。今、腹の中の水分を増やしたくはない。

「そうです。図に乗っちゃいますから、あんまりほめないでください」

同席している千鶴が注文をつける。が、その顔はどこか誇らしげだった。研介の力を認められて悪い気はしないのだろう。湯飲みをつけた口元がほころんでいる。

凜は千鶴に笑いかけ、公平には少しあきれた目を向けた。

「キミが先輩の助言に従わないからだろう」

「もっとはっきり言ってほしかったです……」

公平の飲んでいたお茶に不純物が入っていたことを、研介は昨日、一口で見破った。と言うより、ペットボトルを見た時点で気がついたらしい。口に入れたのは確認のためだった。

今日、公平の腹に起きる事態を研介は把握していたのだ。それで胃腸薬をもらっておけなどと言い出したのだが、公平は結局、意味がわからずにそのままにしていた。

結果がこの始末である。

「年長者の忠告は聞くものだ。それとも先輩の目を疑っていたのか？」

「えっと……」

痛いところを突かれて、公平は思わず視線をそらした。「ほう」とつぶやいた凜の目が、また少し冷たくなる。

公平にも言い分はある。研介が良識も能力もある人物だということはわかっているが、やはりただよう頼りなさはぬぐえない。いつも千鶴にしかられているところばかりを見ているのでなおさらだ。

とはいえ、今回のことで公平は身をもって研介の実力を思い知らされた。いまさらこんなことを言っても、なんの弁解にもならない。公平が一番よくわかっている。

かくっとうなだれると、凜が小さく鼻を鳴らすのが聞こえた。

「人を見た目で判断するのは感心しないな、日下部」

「おっしゃるとおりです」

「そういえば、どうして研兄さん、審判部にいるんですか？ お役に立ってるとは思えないんで

すけど」

千鶴が不思議そうな顔でたずねる。凜は公平から視線を戻すと、一転しておだやかな口調に変わった。

「土井垣先輩の得意とするところは『検査』だからな。たしかに、審判という言葉にはすぐには結びつかないかもしれない」

千鶴はこっくりとうなずいた。公平も同意する。と、凜の表情にあきれの色が戻った。

「なぜ日下部までうなずく。スポーツではドーピングの有無を『判定』するだろう」

「おお」

思わず手を打ってしまい、公平は凜に冷たい目でにらまれた。今日はほとんど、公平と凜のかみ合わせは悪いらしい。

もともと少年野球に打ち込んでいた公平は、審判部でも主にスポーツの審判をすることが多い。ルールに関する知識も豊富だ。

が、実はそれ以外の分野にはかなりうとい。審判の活躍の場はスポーツ以外にもいくらかあり、凜はそれらのすべてに深い造詣がある。

おかげで公平はよく、不勉強を凜にたしなめられている。公平が凜に弱いところの一つだ。

「まあ、ドーピング検査の需要など、ないに越したことはないがな。他にも先輩の活躍の場は山ほどある。薬剤の成分分析や構造解析、建造物の強度検査などもそうだ。土井垣先輩はそういった分野、つまりは科学系のエキスパートでおられる。あの人の知識や見識には、そこらの学者など足元にもおよばないぞ」

典型的な理系人間である研介は数学や物理、化学の試験は毎回満点。危険物取扱や耐震検査技師などの資格もいくつも持っている。百科事典を引くぐらいなら、研介に聞いたほうが早くて正確で、さらに詳細にわかるらしい。

「調味料の有害性を見抜いたり、機械構造の適合性を判断したりすることに関しては、あれほど正確で鋭い人はいない。学園の施設を新設するときは逐一、土井垣先輩が相談役を頼まれているほどだ。今、審判部の長は私が務めているが、それも土井垣先輩が固辞したゆえだ。本来なら、あの人が部を率いてくださるほうが正しい」

「へー……そうなんだ。ふふ」

審判部の部長を務め、優秀な判断力で信頼を集めている凜。その凜の口から改めて言われると、研介のすごさがいっそう際立つ。

千鶴は素直に感心し、ついで自分のことのようにうれしそうにはにかんだ。

(ホントに研さんのこと、好きなんだな)

公平はちらりと後ろを振り返る。研介は今日も、専用のスペースでなにやら実験中だ。本と実験器具で埋め尽くされた向こう側に、ひよろりとした背中はかかっている。

千鶴の気持ちに気づいているのかいないのか、研介は千鶴にいつも素っ気ない態度を取っているように見える。よき兄としてふるまっているのはわかるが、それ以上のものは見せない。

研介は実際のところ、千鶴をどう思っているのだろうか。そんなことを思ったとき、積み重なっている本の塔がぐらりとかしいだ。

「あ」

と言う間もなく、どんがらがっしょんと派手な音を立てて研介のいる場所は物に埋もれた。

「ああ、もう！ あんなに言ったのにかたづけられないからー！」

千鶴が大声を上げて立ち上がる。ほこりの中からのぞいたひよろ長い手が、弁解するようにひらひら動いた。千鶴はぷりぷりしながら、手慣れた様子で積み重なる本をどけにかかる。

公平はオブジェのように突き出した研介の手を指して、凜に聞いた。

「エキスパートですよね？」

「エキスパートだ」

凜はおごそかにうなずいた。

「まったく、ホントに研兄さんはわたしがいないとダメなんだから！」

どこか楽しそうな千鶴の声が聞こえる。審判部の部室は今日も平和だった。

3 幸せの形

一月に一度ほど、研介は大きなダンボール箱を持って部室に現れる。

「生命維持に不可欠な物質、といったところかな」

と言いながら研介が取り出したのは、ダース単位で買い込まれたポカリスエットとカロリーメイトだった。成分配合のバランスがいいとかで、研介のお気に入りなのだ。

初めてこれを見たとき、公平は思わず言ってしまった。

「わざわざそんなもん買わなくても、千鶴が弁当持ってきてくれるじゃないですか」

「あの子まで泊まり込みさせるわけにはいかないでしょ」

研介は部室で夜を明かすこともたびたびある。昼は千鶴が来てくれるが、朝や夜にも頼るわけにはいかない。研介が自前でなんとかするしかないのだ。

「なら、せめておにぎりなり、弁当なりにしたらどうですか」

「どうせ化学薬品を口にするなら、食事の皮をかぶったものより、そのものずばりのもののほうが気分がいいよ。それに、こっちは長持ちするからね。その都度買いに行く時間ももったいないでしょ」

ちなみに少し前、三日間も絶食したのは、ストックが切れていたからだそうだ。当然、研介がなくなったストックをすぐに補充するわけがない。そんなまめな性格なら千鶴も苦労しない。

ということで、今日もまた、研介の命綱が運び込まれた。

「この前の反省をふまえて、今回はいつもの倍の量にしてみたよ」

「で、運びきれないからオレの出番、と」

「すまないね」

運動不足の権化である研介に、大量の荷物は運べない。となれば、おのずと公平の出番だ。まさか凜に荷物持ちをさせるわけにもいかない。

「いっすよ、これぐらい」

体育会系出身の公平は、先輩に借り出されることには慣れている。荷物を運ぶくらい、お安い御用だ。

そうして研介といっしょに審判部に着くと、凜がイスから腰を上げて出迎えてくれた。

「土井垣先輩、お待ちしております。日下部もご苦労だった」

なんだかいつもと様子がちがう。普段は部室の奥で悠然と座っているのに、今日はどこか困惑しているように見えた。形のいい眉をひそめ、部室の中をうかがっている。

横からのぞくと、耳の上でまとめられたやわらかな髪が見えた。小柄な背中が丸くなって、沈み込んでいるのがわかる。凜はそこにちらちらと視線を送っていた。

「どうした、千鶴。元気ないな」

公平が前に回り込むと、千鶴は暗い顔を上げた。見慣れない千鶴の姿に、公平は思わず息を呑む。

凜は千鶴の肩に手を置き、気遣わしげに声をかけた。

「雨宮。土井垣先輩に話があるのなら、私たちは席をはずすぞ」

千鶴は小さく首を横に振った。いつもの快活さはみじんもない。研介もいぶかしげな表情を浮かべている。

しばらく黙り込んでいた千鶴だが、やがてぼつりと口を開いた。

「先輩方。これ、知ってますか」

千鶴が差し出した一枚の写真を、公平、凜、研介がのぞき込む。そこには豪華な装飾をほどこされた指輪が一つ、映っていた。

中央にはめられた青い宝石が鮮烈な輝きを放つ。立派な石だ。公平にはとんと縁のないものなのでまったくわからないが、かなりの価値を持つものだろう。

写真をじっと凝視した凜が、軽く目を見開く。

「まさか、『ローランドの青いまなざし』か？」

聞いたこともない名前に、公平は首をかしげた。

「なんですか、それ？」

「上流階級層に伝わる、いわくつきの宝石だ。ブルーダイヤモンドの一つで、婚姻の証として知られる。長く行方知れずと聞いたが」

千鶴の家は長い歴史のある、いわゆる旧家だ。父親は一般の企業勤めだが、あちこちに代々受け継がれた土地を持っているため、財産はかなりのものになる。

一部は大学の敷地になっており、そこに研介の両親が研究室を持っている。良家のつき合いはそんなところがきっかけになったらしい。

千鶴本人が明るく気さくな上、そういうあつかいをされることをいやがっているのも、公平はほとんど意識していなかったが、これでも彼女は良家の子女という立場なのだ。

その『ローランドの青いまなざし』なる宝石が関係する、上流階級層というところにも、雨宮家は含まれる。

「『ローランドの青いまなざし』とは、明治時代にヨーロッパから長崎に持ち込まれた宝石だ。海運商ローランドがそこで出会った町娘を見初め、贈ったという。ところがその直後、ローランドは遭難し、行方不明となった。娘はもらった宝石を売り払ってローランドを捜索する資金にあてたのだ。宝石はそのまま戻らなかったが、数年の後、ローランドは発見され、晴れて二人は結ばれた。その逸話が華族の間に広まり、その宝石を『ローランドの青いまなざし』と呼ぶようになったのだ」

公平には聞いたこともない話だ。なかなかおもしろそうな由来だが、やはりこっちのほうが気になってしまう。

「高いんですか？」

「宝石そのものとしての価値はさほどでもない。もちろん、簡単に手の出せる価格ではないが、市場にはもっと値の張る石が広く出回っている。逸話も日本の片隅での小さな物語だからな。欧米ではほとんど通じないそう。今ではゆかりを知っている人も少なくなっただろう」

思わぬところで凜の博識ぶりが披露された。とはいえ、公平の中ではその話と千鶴とがいまいち結びつかない。

千鶴のほうを見ると、彼女はうつむいたまま、ぼつりと言った。

「わたし、お見合いするんです」

言葉の意味が、公平にはすぐには飲み込めなかった。

「お見合いって、あのお見合いか？」

紹介された男女が顔を合わせて、結婚を前提に、というあれのことだろうか。

千鶴がこくりとうなずく。公平は目を丸くした。

「千鶴、まだ十五歳だろ!？」

「資産や権威を持つ名家、旧家と呼ばれる家ではそうめずらしくないことだ。個人的には時代錯誤だと思うがな」

凜が小さく顔をしかめる。あまりこの手の慣習は好きではないらしい。

千鶴の口からは、消え入りそうな声が聞こえた。

「以前から、おじいちゃんが、この宝石を持ってきたらわたしとの縁談を認めるって言ってたんです。でも、凜先輩の言うとおりに、ほとんどの人が忘れちゃった話だし、うちも昔のように影響力があるわけじゃないし。縁談なんてずっと先のことだと、みんな思ってたんです。そうしたら、本当に宝石を持ってきた人が現れて」

千鶴の祖父も、悪気があって言っていたことではない。むしろ、こういう話にしておけば、わざわざ千鶴に縁談が持ち上がることもないだろうと、予防策のつもりだったのだ。

ところが、それがあだになってしまった。まがりなりにも名士である雨宮家の、最大の実力者の言葉だ。条件を満たされてしまった場合、簡単にくつがえすことができないのだ。

『ローランドの青いまなざし』を持参する者が実際に現れた以上、千鶴との縁談を認めざるをえなくなってしまったのである。

「お相手は、なんて言うところ？」

それまで黙っていた研介が口を開いた。千鶴がはじめて顔を上げる。不安にさいなまれる子どものような目が、研介を見る。

「根来（ねごろ）電化。そこの長男の人」

「大手だね」

近年、急速に業績を拡大した家電量販店だ。公平もあちこちで店舗を見かける。都市部にも大型店をかまえるなどして、今、最も上り調子の企業の一つだろう。

「根来電化はここ数年で急激に台頭してきたから、新興というイメージが強いのだろうな。伝統や格式を持ち出されると、どうしても弱い。雨宮を足がかりに、その弱みを埋めようということか」

「そんな大げさなもんなんですか？」

「日本人は伝統というものを重んじる。ことに、年配の世代はそうだ。政財界の中核では、そういった人々の発言力が強い。新参者が絶対におよばないこと。それが歴史、つまりは伝統だ。自分の血筋の歴史を長くすることは、どんな人間にも不可能だからな。手に入るのならば、ほしいものなのだよ」

凜の説明にも、公平としては釈然としない部分が多い。たとえ千鶴が根来電化の御曹司と結婚したところで、根来電化は根来電化だ。いきなり創業百年の老舗に変わるわけではないだろう。

なにより、どう見ても千鶴が乗り気ではない。降ってわいたお見合い話にとまどっているのはまちがいないし、公平からすれば、彼女が承諾するとも思えない。

千鶴は研介のことが好きなのだ。そこにいきなり横槍を入れるほうが無粋ではないのだろうか。

千鶴はさすがのような目で研介を見ている。公平も研介を見た。ビン底めがねの奥は見通せない。しかし、心中おだやかであるはずがない。

研介が千鶴のことを思っているのなら、必ず声を上げてくれる。公平はそう思った。

「千鶴くん。悪いお話ではないと思うよ」

だが、研介の口からは、公平の予想とは正反対の言葉が飛び出した。

「少し早いかもしれないけど、べつに今すぐ、なにもかも決めることにはならない。法律的にも、まだ一年足りないからね。まずは話をすることだよ。お相手の素性もはっきりしているし、いたずらに拒むものでもないよ」

淡々とした口調は、いっさいの感情の起伏を感じさせなかった。冷たいと言ってもいいくらいだ。公平は言葉を失う。

千鶴が、血の気の引いた声で問う。

「研兄さん……わたしが結婚してもいいの？」

研介は押し黙った。千鶴が祈るように、その顔を見つめる。

少女の目は、感情の光を失うことになった。

「真っ当な縁談を組んでくれるなら、先も見えない研究者よりよっぽどマシだよ。むしろ薦める」

「研さん！」

たまらず、公平はイスを蹴立てて立ち上がった。研介はまったく動じず、千鶴の前に置かれた写真に手を伸ばす。

「ところでこの写真、いただいていいかな。興味がわいた」

「ちょっと、どこ行くんですか！」

「よせ、日下部！」

つかみかかりかけた公平を、凜が強い声で制した。公平は足を踏み出すタイミングを失う。その間に、研介は振り向くこともなく、部室を出て行った。

「私たちが行ったところで聞き入れてはもらえん。今はそっとしておくんだ」

凜の言葉が耳に入るとともに、やり場のないいら立ちがこみ上げる。振り返りざま、公平は声を張り上げた。

「いくらなんでも、あんな言い方はないじゃないですか！」

「落ち着け。土井垣先輩は、考えなしにあのようなことを言う人ではない」

「じゃあ、どんな考えがあるって言うんですか！」

「それは……」

公平の剣幕に、凜が口ごもる。めずらしいことだった。いつもなら公平のほうが、冷静な凜にたしなめられて口をつぐむところだ。

凜も、研介の態度にはとまどっている。決して、研介のことを擁護しているわけではない。そ

れがわかったことで、公平は少しだけ落ち着きを取り戻した。

すると、悄然とうなだれている少女の姿が、目に飛び込んできた。

「千鶴、大丈夫か？」

「雨宮。さきほども言ったが、土井垣先輩には、あの人なりの考えがあるはずだ。私たちがきちんと聞いておくから、あまり気に病むな」

かわるがわるに声をかけるが、千鶴は反応しない。うつむいたまま、ただ一点を見つめている。

いや、その目がなにかを見ているのか、それすらあやしい。いたたまれなくなって、公平は千鶴の肩をゆすろうとした。

その瞬間、千鶴がぱっと顔を上げた。

「ごめんなさい、おさわがせしちゃって。わたしの家のことですから、先輩方を巻き込んで迷惑でしたよね。帰ります。それじゃ」

「あ、おい、千鶴！」

一方的に言うと、千鶴はそのまま部室を飛び出してしまった。公平はあわててドアへと走る。

廊下の向こうに、一目散にかけていく小さな背中が見えた。いつもあいさつを忘れない礼儀正しい少女は、一度として、こちらを振り返ることはなかった。

「千鶴……」

最後に無理やり浮かべた笑顔が胸を突く。公平や凜に心配をかけまいと、千鶴が必死になって作った笑み。

それはガラス細工よりも簡単に砕け散ってしまいそうな、弱々しい笑顔だった。

4 ダイヤの輝き

週末。雨宮家の一室に、公平と凜の姿があった。

二十畳ほどの大きな和室に千鶴と両親、祖父、そして公平と凜がならんでいる。二人は千鶴の親戚ということにしてもらった。どうしても千鶴を放っておけなくて、公平が無理に頼み込んだのだ。凜も今回ばかりは骨を折って、公平のわがままを通してくれた。

名目は、雨宮家と根来家の、親族同士での会食となっている。

相手の根来電化からは、社長の根来一郎（いちろう）と、長男の一昭（かずあき）が来ていた。一郎は四十五歳、一昭は二十二歳だそうだ。野心的な顔立ちがよく似ていて、やり手の親子を印象づける。

研介の姿はない。結局、あれ以降、公平は研介と顔を合わせることはなかった。

「……で、あるからして、我が社の展望としましては」

会話の主導権のほとんどは一郎が持っていつている。商売の話が多くて、公平は口をはさむことができない。一昭は父親の横に座って、ときおり、視線を千鶴のほうに向けていた。

千鶴はそんな中、伏し目がちなまま、黙りこくっていた。緊張しているようにも見えるが、ちがうだろう。彼女の沈み込みようは、公平には手に取るようにわかる。

歯がゆい。凜に無理を言って押しかけたのはいいが、結局、公平では千鶴を元気づけることはできなかった。凜も同じだ。千鶴は二人に笑いかけてくれたが、それが無理をしているものだとは、一目でわかった。

一郎の前には、ガラスのふたをされた立派な木箱がある。その中に、青い宝石のはまった指輪が納められていた。公平が写真で見たものと同じ、『ローランドの青いまなざし』という、あの宝石だ。

公平がそれを見ていると、一郎がちょうど、木箱を軽く押し出した。

「こうしてお約束のものも持参しました次第。なにとぞよろしくお願い致します」

「よろしく申し上げます」

父親とともに頭を下げた一昭の言葉に、千鶴の肩がびくりとはねる。一昭は人のよさそうな笑顔を浮かべている。目がぎらついているように見えるのは、公平が先入観を抱いてしまっているからかもしれない。

これまで、根来親子の態度におかしなところは見られなかった。雨宮家も根来家も、友好的に話をしているように思われる。

凜も、千鶴の意思をないがしろにするようなふしがあったら声を上げてくれると言っていた。しかし、今のところ、何も言う様子はない。約束を反故にするような人ではないから、本当に問題がないのだろう。

このまま何もできないまま、話が進んでしまうのだろうか。公平の中にあせりが生まれる。

千鶴は公平にとっても、かわいい妹のような存在だ。研介とはちがった意味で、公平のことを慕ってくれている。

だからこそ、困ったときは助けてやりたい。そう思ったのに、公平は逆に無力感を味わわされるばかりだった。

「さて。私ばかりがしゃべっていてもしかたありませんな。愚息からお嬢さんにお話があるようですし」

「いや、その……」

暗に席をはずそうと言う一郎に、千鶴の父がうめく。千鶴が息を呑むのが聞こえた。公平は奥歯をかみしめる。

そのときだった。

「待っていただけますか」

たん、と乾いた音を立てて、ふすまが開く。逆光の中に、ひよろりとした瘦身が浮かんだ。特徴的なぼさぼさ頭が、奇妙に迫力のある影を演出する。

いつもよりさらにうす汚れた白衣のまま、研介はまっすぐに和室に踏み込んできた。

「研兄さん、どうして……？」

「一生を決める場で隠しごとはよくない。悪いけど、おじゃましに来た」

千鶴のかすれた声に、研介は淡々と答える。公平は、赤く充血しているその目が、いつもとまるでちがうことに気づいた。

少なくとも、こんなに鋭いまなざしの研介は、公平には見た覚えがない。

「どちら様ですか」

「土井垣研介と言います。となりの家の者です」

はっきりとした声が聞こえた。ピンと伸びた背筋は、凜に似た堂々たる威厳を感じさせる。むしろ、研介のほうが背丈があるぶん、勝っているほどだ。

公平は、その場の空気が研介に支配されたかのような、奇妙な感覚を覚えた。

「なにしに来たの？」

千鶴が研介を見上げ、尋ねる。険しい視線と低い声が部屋の中をつらぬく。

「研兄さんが言ったんじゃない。根来さんとの縁談なら願ってもないことだって」

「僕は、真っ当な縁談ならって注釈をつけた。偽物の宝石で話をまとめようとするのは真っ当じゃないだろう」

あまりにあっさりと言うので、全員が一度、研介の言葉を素通ししてしまった。

「それは『ローランドの青いまなざし』なんかじゃない。真っ赤な偽物だ」

視線が机の上の木箱に集中した。

ガラスの中で、青い宝石は静かに輝きを放っている。当然、石は黙したまま語らない。語るのには周りにいる人間だ。

「何を言うかと思えば……突然、何を言い出しているのかね」

一郎が肩をすくめ、小ばかにしたように言う。研介は微動だにしない。ただ冷静に、言葉を連ねる。

「写真を見たときから妙だと思ったんだが、実物を見て確信した。光の透過度がちがう。不純物の混ざった光だ」

断定された『ローランドの青いまなざし』に、凜が強い視線を向けた。

彼女の五感は驚異的に鋭く、判断力も図抜けている。食いちがう意見に対し、どちらの言い分が正しいかを判定するのは得意中の得意だ。ゆえに彼女は、審判部を束ねる部長の立場にある。

だが、宝石を食い入るように見る凜の口から、結論は出てこなかった。判断しかねているのだ。凜の頬を、一筋の汗が流れ落ちる。彼女が判断を迷うことなど、公平は考えたこともなかった。

研介が指摘したのは、凜でも見分けがつかないほどの、わずかなちがいなのだ。

「馬鹿馬鹿しい。雨宮さん。なんですか、この男は」

「まったくです。無礼だろう、君」

一郎が憤慨を隠しもせずと言い、一昭は研介をにらみつけた。

だが、研介はその視線を真っ向から見返す。音のしそうなほどの視線の迫力に、一昭のほうが生かすひるんだ。

「根拠はもう一つある」

そう言って、研介は白衣のポケットに右手を突っ込んだ。無雑作に引き抜かれた手のひらに、青い宝石のはまった指輪がある。

それは宝石箱の中の指輪と、うり二つだった。

「本物はここだ。だから、それは偽物だ。これ以上の証明はない」

ずばりと言い切る研介の言葉に、一郎と一昭が絶句する。新たに出現した『ローランドの青いまなざし』は、陽光をじかに反射して、空とも海ともつかない色合いをかもし出した。

「本物が手に入らなかったから、よく似せたべつのもを用意したんだろう。よくできている。ダイヤであることはたしかだし、写真やガラス越しでは普通、見分けはつかない。けれど、残念だった。僕の目は節穴ではないんだ」

その瞬間、公平の目に、研介の言葉を裏づける証拠が飛び込んできた。

「凶星っすか」

声は根来親子に向けて飛んだ。公平はまばたきもせず二人を見据える。一郎と一昭の表情は、今までとは明らかに変わっていた。

「顔が強張った。目も泳いだ。オレにはダイヤの見分けはできないけど、あんたたちの表情のちがいならわかる」

一昭の手が口元を隠す。すぐに失態に気づいたのだろう。あわてて取りつくろおうと、その手を下ろした。

だが、そんな動きを見逃すほど、審判部は甘くない。公平たちが日頃、見きわめているのは、ボクサーの拳が相手の顔に当たったかどうか、コンマ一秒を下回る瞬間のできごとなのだ。

鍛え抜かれた目をごまかすことなど、誰にもできない。

「表情の変化を指摘されて顔にふれるのは、凶星を突かれた者の典型的な反応ですね。案ずることはありません。反射的な行動ですから、意識して制御することは困難です。虚偽を見破られた場合、ほとんどの人間はそうした反応を示します」

凜が斬りつけるような声でたたみかける。公平は知っている。凜のまっすぐで透きとおった瞳は、正面から見つめられるとものすごい力がある。心にやましさを抱えたまま、受け流すこと

などできない。

だから、彼女の下した判定は絶対なのだ。

「ちなみに、私たちの目も節穴ではありませんよ」

その瞬間、一郎が机を思い切りたたき、顔を真っ赤にして立ち上がった。

「でたらめを言うな！ 雨宮さん、ひどい侮辱ですよ！ こんな馬鹿げた話はない！ 失礼する！」

どなり、木箱に伸びた一郎の手を、公平はすばやくつかんだ。

「なんで持ち帰るんだ。これを鑑定すれば、先輩の話が本当かどうか、はっきりするじゃないか」

「それとも、調べられては不都合なことでもあるのですか」

一郎が言葉につまった。かくかくと、口が開いては閉じる。とっさに言葉が出てこない。それも凶星を突かれた者の反応だ。

後輩たちの援護射撃に、審判部の最年長者がとどめの一撃をくり出した。

「最初から持ち帰るつもりだったのだろう。『ローランドの青いまなざし』はしかるべき日に渡す、などと、いくらでも理由はつけることができる。その間に本物を探せばいい。だが、そうはいかない。その偽物はきっちり鑑定させてもらう。そうすれば、真実は明らかになる」

「その必要はない」

研介に続いたのは、重厚なひびきを持つ、いかめしい声だった。

上座に座した千鶴の祖父が、射抜くように室内を見渡す。その視線だけで、強烈な威圧感がその場を満たした。

旧家を育て上げ、今なお背負って立つ老主人の、往年の気迫が前面に押し出される。

「侮辱や馬鹿げた話とはどちらのことかな、根来殿。やましいことがないのなら、そのように仰せられよ。ただし、この期におよんで嘘偽りを口にするのなら、わかっておられような」

白眉の下から、猛禽のようなまなざしが光を放つ。一郎の顔が見る見るうちに蒼白になり、一昭のほうは腰を抜かした。そのまま畳の上を不恰好にあとずさる。

その背中が研介の足にぶつかった。冷然と見下ろす研介の視線を受けて、一昭の口から裏返った悲鳴が飛び出した。

「根来さん。今日のところはお引き取りください」

千鶴の父が言う。祖父とはまたちがう、強く張りのある声だった。はじかれたように顔を上げた一郎はせわしなく室内を見回し、脱兎のごとく走り去った。我に返った一昭が、転げるようにそのあとを追っていく。

机の上では、残された『ローランドの青いまなざし』が、にぶい光を放っていた。

「研兄さん……」

「ご無沙汰をしております、みなさん」

千鶴のほうを手で制し、研介はまず親族のほうに頭を下げた。

「おさわがせして申し訳ありません。本来、このような場に参上できる者ではありませんが、ぶしつけながらおじゃま致しました。すべては自分の独断によることです。貴家のお嬢様、ならびに後輩たちには責はございません。なにとぞ、ご寛大なる措置をお願い申し上げます」

普段の研介からは想像もつかない、しっかりとした物言いだった。ちゃんと服装や髪を整えていれば、研介がしゃべったとはわからないかもしれない。

凜も研介の横で、深々と頭を下げた。公平もあわててそれにならう。と、千鶴の祖父がからからと笑った。

「なにをかた苦しい。研介くん。いつものとおりでかまわんよ。二人も楽にきなさい」

「そうですか。では」

途端、研介の肩がだらりと落ちた。背も猫背になり、空気が抜けたように、身体から覇気が消える。

いつものしなびた野菜のようになった研介が、ぽりぽりとだらしなく頭をかいた。

「やれやれ。慣れないことでくたびれた。凜くん、公平くん。助かったよ、ありがとう」

「いえ。お安い御用です」

研介のあまりの変貌ぶりについていけない公平をよそに、凜はさらりと答える。取り立てておどろいた様子もなかった。室内の空気も、研介に呼応したようにゆるみ、おだやかなものに変わった。

と、娘をずっと心配そうに見つめていた母親が、やわらかな声で語りかけた。

「研介くん。その宝石はどうするの？」

千鶴の肩がびくっとはねる。公平が顔をのぞき込むと、あわててそっぽを向いた。しかし、その目はちらちらと、もの言いたげに研介のほうをうかがっている。

研介の手には、もう一つの『ローランドの青いまなざし』があった。それが本物だというのなら、研介は千鶴との縁談を認められることになる。

千鶴の顔が、火がついたように赤くなった。公平も千鶴と同じことに気づいて、思わず研介の顔を凝視する。

すると研介は、小さく苦笑いをした。

「すまないね、千鶴くん。これも同じなんだ。偽物だよ」

『は？』

一同から間抜けな声上がる。研介は手にした『ローランドの青いまなざし』を、ぷらぷらと振ってみせた。

「これは人工ダイヤ。彼らに白状させるために作っただけなんだ。組成は本物とまったく同じだけど、本物でないことは変わらないんだよ」

室内を沈黙が満たす。ふたたび呆気にとられた公平は、氣力をふりしぼって、なんとか一言、口にした。

「ハッターリだったんですか？」

「そうなるね。僕は人の表情には鈍感だけど、彼らが何か反応を示せば、凜くんか公平くんが気づいてくれると思ったから。だいたい、根来電化が探して見つけれなかったものを、一介の学生が見つけれられるわけがないでしょ」

豪快な笑い声がこだました。千鶴の祖父が破顔し、のけぞるようにして笑っている。父母も顔を見合わせ、同時に吹き出した。凜は小さく吐息をもらし、研介は困ったように頬をかく。

公平と同じようにぼかんとしていた千鶴は、だまされたことに腹が立ち、しかし研介を責めるわけにもいかないと思ったのか、怒ったり困ったりの百面相をくり返して、結局つんと顔をそらしてしまった。

「なによ！ 隠しごとはよくないとか、えらそうに言ったくせに」

「僕は隠したんじゃないで、真っ向からだましたんだけどね」

「そんなのへりくつだもん！」

研介のバカな弁解に、千鶴は完全にへそを曲げてしまった。情けなく眉根を下げた研介が祖父や両親に助けを求めるが、三人ともにここを笑ったまま、答えない。

公平や凜にも視線が向いたが、二人ともそしらぬ顔を決め込んだ。まんまと手のひらで踊らせてくれた研介への、ささやかな仕返しだった。

研介は天井を見上げ、考え込む。やがて、千鶴の横にすっと腰を下ろし、口を開いた。

「へりくつでもなんでも、君を誰かに渡すわけにはいかなかったんだよ」

からかいもごまかしも、何もない。びっくりするほどストレートな研介の告白に、公平は耳を疑った。

凜も千鶴の家族も、そろって絶句している。しかし、一番おどろいているのは千鶴本人だった。

赤面することも忘れた千鶴は、目も口も開いたまま、穴が空くほど研介の顔をまじまじと見つめる。

研介は軽く頬をかいた。どこか、困っているように見えた。けれど、彼は千鶴から目をそらさなかった。

「一生を決める場で隠しごとはよくない。たしかに僕はそう言ったよ。だから言おう。千鶴くん。君が好きだよ。君が僕以外の人と一緒にいるのは非常に困る。いやだ。だから僕はここに来たんだよ」

千鶴が放心状態におちいった。が、次の瞬間、その顔はトマトよりも真っ赤っ赤になった。

あたふたと小さな両手が振り回される。ぱくぱくと何度も口が開け閉めされる。完全にパニックだ。

その左手を、研介がそっと取った。

「いつかきちんと、君にふさわしい石を贈るから。今はこれで許してほしい」

そう言って、研介は千鶴の薬指に、そっと口づけをした。

その日、公平は千鶴のはじけるような明るい笑顔を、彼女が見せてくれた最高の笑顔を、目に焼きつけることができた。

ここでは本誌掲載六作のそれぞれについて解説する。

第四号である今回のテーマは「キス」とした。恋愛ものなら一つのクライマックスとしてもっと盛り上がるシーンだが、それだけにさまざまな形で描きつくされた感のあるシチュエーションであり、難しくもあるものだ。

『きみの花飾り』入江棗

三姉妹それぞれの葛藤と成長を描いてきたこの物語も、いよいよ折り返し地点を迎えて、今回の主役は再び三女。一話目で長い間被ってきた猫を脱ぐ気持ちにはなったものの、人間の成長というのはそうそう簡単にできるものではなく、行きつ戻りつ進むもの。ストレスを抱える彼女は、生徒会長としてクリスマスのイベントを仕切ることになって……。見所はクライマックス、今回のテーマである「キス」の見せ方だ。口角が緩むのを抑えられない、微笑ましくてカッコいい一幕だった。

『人形姫と泥棒悪魔』貴水玲

心のない（そろそろ、むしろ普通の人間より感情豊かに見えてきたけれど）人形姫と、世話焼きの悪魔の物語も、そろそろ佳境に入ってきた感がある。人形姫の興味の対象となる感情も、いよいよの「愛」——しかし、愛というのが美しいばかりの、単純なばかりのものではない。時には愛によって何も得られないことさえある。そんな「愛」は、彼女たちにどんな影響を与えるのだろうか。

『世話焼き魔—メイド』番棚葵

記憶を失った魔界の王子ユタと、高校生として暮らしていた彼のもとへ押しかけてきた人魚のメイド。いよいよ魔界へ戻ってきた二人——とはいっても、ユタの記憶はまだ戻らない。そこで記憶を取り戻すためにちょっとした「儀式」が必要ということになったのだが……というわけで、今号のテーマからして、どんな儀式なのかは大体想像がつくのではないだろうか。そこから始まる嬉し恥ずかしのドタバタがありつつ、しかしそれだけで済むはずもなく、と、いよいよ待っているであろうクライマックスへ向けての助走という感じな回。

『王子と私とご主人様』広野未沙

魔法の練習に熱心なメイドと、魔界の王子と、少女が勤める館の息子の物語も、前回明かされた（少なくとも本人にとっては）衝撃的な真実によって、グッと動き出した感がある。アレほど熱心だった魔法の練習をやめてしまった彼女の前に、またしても驚くべき事態が……。とにかく周囲に翻弄され続ける主人公の様子を微笑ましく楽しむべき作品というべきだろうか。

『くるくる』水島朱音

空中分解した高校の部活動、死んでしまった少女、書かれなかったはずの本の存在、そして部

員たちがそれぞれに抱えていた秘密の数々——今回もまた新たな（衝撃度で言えば前回以上だろうか）秘密が明らかになった。この辺で一度、一話から読み返してみるといいかもしれない。物語が最初に想像されたのとは別の姿をそこかしこで見せているのがわかり、より趣を増すことだろう。

『審判部な面々』 諸星崇

挫折した野球少年とルール音痴の先輩が、さまざまな「審判」を下してきたこの物語。そろそろ審判もネタ切れかな、と思っていたら、今回は理系的な「検査」という方向が飛び出してきた、相変わらず楽しませてくれる。ここまできると、次はどんな「審判」がテーマになるのかも含めて、楽しみでたまらない。もちろん、キャラクターたちそれぞれが生き生きとして読者を楽しませてくれるのは当たり前のことだ。

奥付

2011年2月日 発行

著 者 入江棗／貴水玲／番棚葵／広野美沙／水島朱音／諸星崇

企画・監修 榎本秋

発 行 所 株式会社榎本事務所
〒179-0076
東京都練馬区土支田1-29-12 ファミール光が丘102
電話 03-6750-6341

表 紙 新月竜（AMG出版工房）

イラスト 伊藤由希、神内みさと、仔樺、なかきしろ。（すべてAMG出版工房）

協 力 脇功一、三浦奈緒
（アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科）

本マガジンは、榎本事務所HPで配布しているPDFファイルを改変しないことを条件に配布、複製は自由とする。ただし、有償での配布は印刷も含めて不許可とする。